三重県埋蔵文化財調査報告 223

神戸遺跡(第２次)・替田遺跡(第３次)
発掘調査報告

～三重県津市南河路所在～

２００１年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

神戸遺跡・替田遺跡は三重県のほぼ中央に位置する津市南河路に所在します。三重県の県庁所在地である津市は、伊勢湾や鈴鹿山脈の豊かな自然環境と温暖な気候にも恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきました。とくに安濃川流域には、弥生時代の中心集落である納所遺跡や、6世紀から7世紀の古墳400基以上からなる群集墳などがあり、当時の文化の一端を見ることができます。

今回報告します神戸遺跡・替田遺跡は、安濃川中流域右岸に位置し、平成11年度県営ほ場整備事業・平成11年度県営かんがい排水整備事業に伴って、調査を行ったものです。この地域の発掘調査は、最近では一般国道23号中勢道路建設に伴い、数年にわたって行われており、数々の調査成果をあげてまいりました。今回の発掘調査でも新たな発見があり、この地域の歴史的重要性が改めて感じられるものであります。しかし、一方でこのような重要な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。これまでに得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、津地方県民局農林水産商工部、津中部土地改良区などの関係諸機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

２００１年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　藤澤英三

例　　言

1　本書は、三重県津市南河路に所在する神戸遺跡および替田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査は平成11年度県営ほ場整備事業（津中部地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　平成11年度調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
主査兼第１係長　河北　秀実（調整）
主事　西出　孝
主事　筒井　英俊
主事　柴山　圭子
主事　田上　稔
土工担当　（財）三重県農業開発公社
調査期間　平成11年５月10日～同年10月18日
調査面積　神戸遺跡　2,100㎡（下層　400㎡）
替田遺跡　80㎡

4　調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、津地方県民局農林水産商工部、津中部土地改良区、津市教育委員会からの協力を得た。

5　報告書作成にあたっては、津市教育委員会　山口　格氏から有益な御教示を得た。

6　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課、及び資料普及グループが行った。また、本文の執筆は河北・筒井・柴山が行い、分担は目次および文末に明記した。なお、写真撮影は、伊藤裕偉・柴山が、全体の編集は柴山が行った。

7　本書の方位は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とする座標北を用いた。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。

9　本報告書での用語は、以下のとおり統一した。

つき……「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん……「椀」「碗」があるが、「椀」を用いた。

10　本報告書での遺構番号は、各地区・遺跡ごとに通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

ＳＤ：溝　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑
ｐｉｔ：ピット、柱穴

11　p５～６「神戸・替田・里前遺跡ほ場整備地内地形図」のコンタラインは、津市教育委員会米山浩之、斎宮歴史博物館　西村美幸の両氏が作成したものである。

12　当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

13　なお、付編として、本報告書に平成11年度県営かんがい排水整備事業（中勢地区）に伴う替田遺跡（第３次）の発掘調査結果を併せて掲載した。

調査期間　平成11年５月10日～同年６月10日
調査面積　280㎡

14　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 ……（柴山圭子・河北秀実）……1
Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（柴山圭子）……9
Ⅲ　神戸遺跡（Ａ地区）調査の成果 ……（柴山圭子）……10
Ⅳ　神戸遺跡（Ｂ地区）調査の成果 ……（柴山圭子）……40
Ⅴ　神戸遺跡（Ｃ地区）調査の成果 ……（筒井英俊）……46
Ⅵ　替田遺跡（第３次）調査の成果 ……（河北秀実）……48
付　替田遺跡（かん排）調査の成果 ……（柴山圭子）……52

挿　図　目　次

第１図　昭和63年時点での各遺跡範囲図 ……1
第２図　神戸・替田・里前遺跡ほ場整備事業地内地形図 ……5・6
第３図　里前遺跡・神戸遺跡東浦地区立会い調査区平面図及び土層図 ……7
第４図　遺跡位置図 ……9
第５図　神戸遺跡（Ａ地区）調査区平面図 ……12・13
第６図　神戸遺跡（Ａ地区）土層断面図 ……14
第７図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＡ46・ＳＢ52・ＳＢ45・ＳＢ43実測図 ……15
第８図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ57・ＳＢ44実測図 ……16
第９図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＡ56・ＳＢ60実測図 ……17
第10図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ59実測図 ……18
第11図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ58実測図 ……19
第12図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ53・ＳＢ54・ＳＢ55実測図、ＳＨ４・ＳＨ５実測図 ……20
第13図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＫ１実測図 ……21
第14図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図１ ……27
第15図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図２ ……28
第16図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図３ ……29
第17図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図４ ……30
第18図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図５ ……31
第19図　神戸遺跡（Ｂ地区）調査区平面図 ……41
第20図　神戸遺跡（Ｂ地区）土層断面図 ……42
第21図　神戸遺跡（Ｂ地区）出土遺物実測図 ……44
第22図　神戸遺跡（Ｃ地区）調査区平面図及び土層断面図 ……47
第23図　替田遺跡（第３次）調査区平面図及び土層断面図 ……48
第24図　替田遺跡（第３次）出土遺物実測図１ ……49
第25図　替田遺跡（第３次）出土遺物実測図２ ……50
第26図　替田遺跡（かん排）調査区平面図及び土層断面図 ……53

表　目　次

第１表　試掘調査結果一覧１ ……3
第２表　試掘調査結果一覧２ ……4
第３表　神戸（Ａ地区）掘立柱建物一覧表 ……11
第４表　神戸（Ａ地区）遺構一覧表１ ……21
第５表　神戸（Ａ地区）遺構一覧表２ ……22
第６表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表１ ……32
第７表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表２ ……33
第８表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表３ ……34
第９表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表４ ……35
第10表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表５ ……36
第11表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表６ ……37
第12表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表７ ……38
第13表　神戸（Ａ地区）出土遺物観察表８ ……39
第14表　神戸（Ｂ地区）遺構一覧表 ……40
第15表　神戸（Ｂ地区）出土遺物観察表 ……45
第16表　替田（第３次）遺構一覧表 ……48
第17表　替田（第３次）出土遺物観察表 ……51
第18表　替田（かん排）遺構一覧表 ……52

写　真　目　次

図版１　神戸（Ａ地区）調査前風景・調査区全景 ……54
図版２　神戸（Ａ地区）調査区全景・ＳＢ44 ……55
図版３　神戸（Ａ地区）ＳＢ46・掘立柱建物群 ……56
図版４　神戸（Ａ地区）説明会風景・下層全景 ……57
図版５　神戸（Ｂ地区）調査区全景・ＳＫ６ ……58
図版６　神戸（Ｃ地区）調査区全景 ……59
　　替田（第３次）調査区全景
図版７　神戸（Ａ地区）出土遺物１ ……60
図版８　神戸（Ａ地区）出土遺物２ ……61
図版９　神戸（Ａ・Ｂ地区）・替田（第３次）
　　出土遺物３ ……62

Ⅰ　前言

1　調査の契機

（1）神戸遺跡の発見と台帳登録

神戸遺跡は昭和54年に河合良成氏によって発見された遺跡である。氏によって記載された埋蔵文化財包蔵地カードによれば、岩田川畔から安濃川畔に至る一帯の水田に土師器、須恵器が散布しているものであるが、遺跡の時代は弥生から古墳時代と考えられていた。

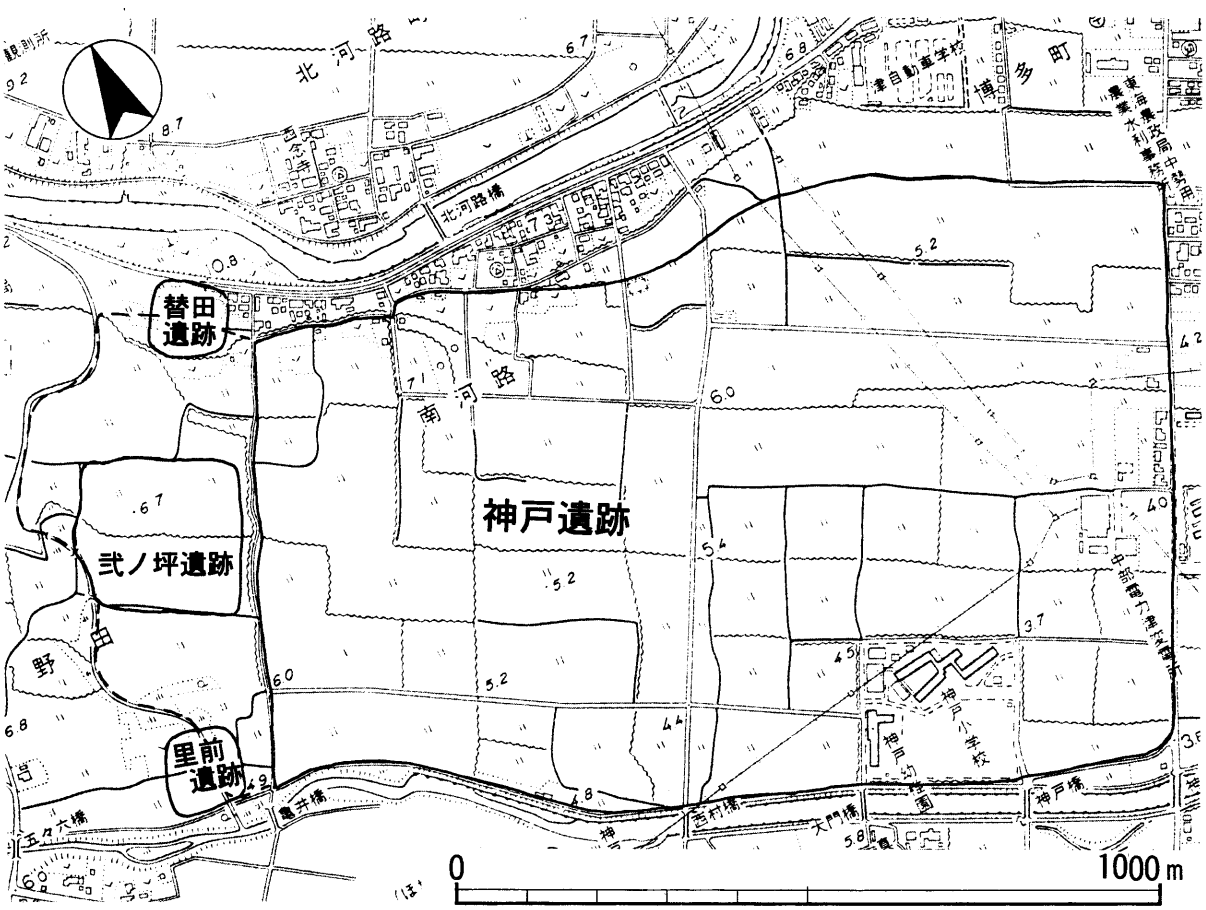
当時、河合氏が作成した略図によると、遺跡の北端は南河路の集落付近、南端は岩田川である。東端は略図では不明確であるが、神戸小学校からさらに東側で、おそらく岩田川にかかる神戸新橋と安濃川にかかる納所橋を結ぶ南北に走る道路を境としていたものと思われる。西端は三泗川付近としており、後述する替田遺跡、弐ノ坪遺跡、里前遺跡も含まれた範囲と考えられていたようである。遺跡の範囲は東西1,200m×南北800mと記載されているが、東西の実距離は1,500m程である。

神戸遺跡の東西幅の問題については、後に地図上に正確に示す際に東西1,200mという数字を適用し、西端を現在の中勢道路付近とすることによって、西側の300m程を遺跡範囲から除いたようである。以後、その範囲が神戸遺跡として取り扱われるようになり、昭和63年発行の『津市遺跡地図』[1] にもその範囲が掲載されている。

神戸遺跡は、広大な遺跡であるが、発見以来採集遺物が具体的に報告されることもなく、また、発掘調査が実施されなかったこともあって、長い間その実態は不明となっていた。

（2）替田・弐ノ坪・里前遺跡の発見と過去の調査

替田遺跡、弐ノ坪遺跡、里前遺跡は昭和58年に国道23号中勢道路建設に伴う分布調査[2]によって発見された遺跡である。その後、昭和63年に前述の『津市遺跡地図』に掲載されたが、この時点で替田遺跡は



第１図　昭和63年時点での各遺跡範囲図（破線は、昭和54年時の神戸遺跡の推定範囲）（１：10,000）

東西100m×南北100m、弐ノ坪遺跡は東西230m×南北200m、里前遺跡は東西110m×南北120mの範囲と考えられていた。

中勢道路建設に伴う上記3遺跡の試掘調査は、平成元年度に三重県埋蔵文化財センターが実施し、その結果道路予定地内において本調査が必要と判断された[3]。

本調査は、平成8年度から10年度にかけて行われた。平成8年度は替田遺跡の第1次調査[4]が行われ、その結果、弥生時代の竪穴住居や土壙墓群、古墳時代の掘立柱建物・土坑・井戸、平安時代後期～鎌倉時代初期の屋敷地等が検出され、各時期の土器や石釧・石帯等が出土した。平成9年度は替田遺跡の第2次調査[5]と弐ノ坪遺跡の調査[6]が行われた。替田遺跡では、弥生時代の溝・土坑、古墳時代の溝・土坑、奈良時代後期の井戸、平安・鎌倉時代頃の掘立柱建物・溝・土坑などを検出した。平成10年度は里前遺跡の調査[7]が行われた。

（3）県営ほ場整備事業に伴う協議と調査の経過

①事前協議

神戸遺跡等を含む地域である津中部地区で平成9年度以降に県営ほ場整備事業が計画された。三重県埋蔵文化財センターでは現地での分布調査によって、遺跡の現状を確認した結果、事業に先立ち試掘調査の必要があると判断した。県埋蔵文化財センターは県農林水産部・津農林水産事務所と協議を行い、事業工区に先行するかたちで試掘調査を順次実施していくこととした。

②平成9年度の試掘調査

平成9年度は、神戸小学校の周辺、すなわち神戸遺跡の南東部分305,000㎡の範囲で試掘調査を行った。調査期間は平成9年11月6～13日で、4×2mの試掘坑を77カ所設定した。

調査区の基本的層序は上から、第1層；耕作土、第2層；灰色系の砂質土、第3層；灰色系の粘質土、第4層；マンガン粒を含む灰色系の粘土、第5層；暗青灰色系の粘土、第6層；暗青灰色系のシルトである。第2層から第4層が遺物包含層である。また、部分的に旧流路と考えられる砂の層もみられた。遺構は試掘坑№6・22・39でピット（小穴）を検出したが、特に№39ではピットが規則的に並んでおり掘立柱建物の可能性が考えられた。また、9カ所の試掘坑で自然流路が検出された。遺物は、33カ所の試掘坑から弥生土器、土師器、須恵器、山茶椀等が出土したが、特に試掘坑№19・36～38・42からは土器が多量に出土した。出土した遺物は弥生～古墳時代および中世のもので、検出された遺構も同時期のものと考えられる。

以上の結果から、遺構および多量の遺物が確認された3地区、合計21,400㎡が遺跡範囲と判断された。

③平成10年度本調査（第1次調査）

上述の試掘調査の結果を基に三重県埋蔵文化財センターは平成10年度に神戸遺跡の第1次本調査を行った。その結果、古墳時代の流路・土坑、奈良時代後期～平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代～室町時代の土坑を確認したが、詳細については発掘調査報告書[8]を参照されたい。

④平成10年度の試掘調査

一方、本調査と前後して、未試掘部分65,500㎡の範囲で試掘調査が実施された。調査期間は平成10年8月24日から9月10日までで、4×2mの試掘坑を247カ所設定した。

遺構は、45カ所の試掘坑で、柱穴・溝・土坑および自然流路を検出した。遺物は131カ所の試掘坑から土師器・製塩土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶椀などが出土したが、その大部分は旧耕土などからの出土である。主な出土遺物については、前回の報告書に実測図を掲載しているので参照されたい。

以上の結果、10年度の試掘調査範囲では、12地区、合計107,000㎡の範囲が遺跡と判断された。

⑤遺跡名及び地区名の再整理

試掘調査の時点では、遺跡名はとりあえず全域を神戸遺跡としていたが、二回にわたる試掘調査の結果を基に津市教育委員会と協議・検討を行い、遺跡名および地区名を新たに付し、15地区、合計128,400㎡を遺跡範囲として、次のように再整理をした。

替田遺跡、里前遺跡、立花堂遺跡、

神戸遺跡野崎地区・田南地区・東浦地区・井堀地区・鳥井前地区・備後地区・フナハチ地区・井明地区・高入地区・品田地区

⑥立会調査

平成11年1月27日には里前遺跡と神戸遺跡東浦地

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	時代
1			攪乱溝		
2			自然流路		
3					
4				土師器片微量	
5			自然流路		
6		15	ピット		
7					
8					
9					
10				土師器片微量	
11				土師器片微量	
12			自然流路		
13					
14					
15					
16					
17					
18					
19		30	旧流路	弥生土器壺、土師器椀等多量	弥生～古墳時代
20			自然流路		
21			自然流路	土師器甕片微量	
22		45	ピット		
23				土師器片微量	
24					
25				土師器鍋片微量	
26			自然流路		
27					
28					
29					
30				土師器片微量	
31				山茶椀片微量	
32					
33				土師器片微量	
34					
35				土師器羽釜片微量	
36		50		土師器甕、須恵器杯蓋、山茶椀等多量	古墳時代・中世
37	25			土師器甕、須恵器杯蓋・甕等多量	古墳時代
38	20	50		土師器甕、須恵器杯蓋・甕等多量	古墳時代
39		25	ピット(掘立柱建物)	土師器片	
40				土師器片微量	
41				土師器鍋片微量	
42		65		古式土師器、土師器羽釜、須恵器杯、山茶椀	古墳時代・中世
43				土師器片微量	
44				土師器片微量	
45				土師器片微量	
46				土師器片微量	
47					
48					
49					
50					
51					
52				土師器片微量	
53				土師器片、山茶椀片微量	
54					
55					
56			自然流路		
57					
58					
59				山茶椀片微量	
60				土師器片、山茶椀片微量	
61				土師器片微量	
62					
63				土師器鍋片微量	
64					
65					
66					
67					
68			自然流路	土師器甕片微量	
69			自然流路	土師器片微量	
70					
71					
72			攪乱溝	土師器片微量	
73					
74				土師器片微量	
75				土師器甕片・高杯片微量	
76					
77					

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
1				土師器片	
2				土師器片、山茶椀	
3				土師器片、山茶椀	
4				土錘	
5					
6				土師器、山茶椀	
7				山茶椀	
8				土師器	
9				須恵器	
10				山茶椀	
11				土師器	
12				土師器片	
13				山茶椀	
14				土師器甕片	
15				天目茶椀、土錘	
16				土師器鍋、須恵器、山茶椀	
17				土師器、須恵器、山茶椀	
18				土師器、山茶椀	
19		45	土坑？		
20				土師器、須恵器、山茶椀	
21				土師器、須恵器、山茶椀	
22	50			山茶椀多数	
23				須恵器甕、山茶椀	
24	15	30	柱穴、溝	須恵器、粘土塊	
25				須恵器、山茶椀	
26				須恵器片、緑釉陶器段皿	
27				土師器鍋、ロクロ土師器、山茶椀	
28				土師器	
29	60			土師器、山茶椀	
30				土師器、山茶椀	
31				土師器皿	
32		40	溝	土師器、ロクロ土師器	
33				土師器鍋	
34				土師器片	
35				土師器片、山茶椀	
36				土師器鍋、山茶椀	
37				土師器皿、山茶椀	
38				土師器皿	
39				土師器片	
40				土師器皿、山茶椀	
41				土師器片	
42				土師器片	
43				土師器羽釜	
44				土師器	
45				土師器	
46				土師器、山茶椀	
47		60	溝、土坑	土師器、須恵器	
48				土師器、山茶椀	
49				ロクロ土師器、須恵器鉢・甕	
50		35	土坑	土師器、須恵器杯・甕	
51				須恵器、灰釉陶器、山茶椀	
52		20	柱穴		
53				土師器皿・鍋、須恵器	
54		20	溝	土師器、山茶椀	
55	34			土師器、須恵器、緑釉陶器、山茶椀	
56				土師器、陶器、瓦	
57				土師器、山茶椀	
58				土師器鍋	
59				土師器	
60				山茶椀	
61		20	土坑？	土師器皿、山茶椀	
62				土師器	
63				土師器鍋	
64				土師器、山茶椀	
65				山茶椀	
66				土師器片	
67				山茶椀	
68				土師器、山茶椀	
69				土師器	
70				土師器皿	
71					
72				山茶椀	
73				土師器	
74				山茶椀	
75				山茶椀、陶器	
76		30	溝	土師器皿、山茶椀	
77				須恵器	
78					欠番
79		40	柱穴		
80					
81					
82				山茶椀	
83					
84				山茶椀	
85					

第１表　試掘調査結果一覧（左：平成９年度、右：平成10年度）

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
86					欠番
87					
88					
89					
90					
91				土師器片	
92				山茶椀	
93				土師器、須恵器、山茶椀	
94				山茶椀	
95				土師器片	
96		30	溝	土師器片多数	
97				土師器片	
98				土師器片	
99		30	柱穴、溝	土師器、須恵器	
100					
101					
102					
103					
104					
105					
106					
107					
108					
109					
110				土師器片	
111					
112					
113					
114					
115				陶器片	
116					
117				土師器、山茶椀	
118					
119					
120					
121		55	溝	土師器、須恵器、山茶椀	
122				土師器	
123		65	土坑	山茶椀	
124				土師器片	
125				土師器、山茶椀	
126		60	柱穴	土師器片、山茶椀	
127					
128					
129					
130					
131					
132					
133					
134					
135					
136					
137					
138					
139					
140					
141					欠番
142					
143				土師器	
144	75	90	柱穴	土師器	
145	55	85	柱穴	土師器	
146	90	105	溝		
147	80	100	柱穴		
148	80	95	柱穴	須恵器	
149			自然流路		
150		50	柱穴	土師器多数、製塩土器	
151		65	柱穴ほか	土師器多数、山茶椀	
152				須恵器	
153		55	柱穴		
154					
155					
156		50	柱穴		
157					欠番
158					
159					
160					
161					
162					
163					
164		40	溝		
165		40	溝	土師器	
166					
167					
168					
169					
170					

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
171		45	溝		
172		55	柱穴		
173					
174					欠番
175		50	自然流路	土師器	
176				弥生土器、土師器	
177		55	柱穴、溝	土師器、山茶椀	
178				土師器	
179		40	土坑		
180					
181					
182					
183					
184					
185					
186					
187					
188					
189					欠番
190					
191					
192					
193					
194				土師器	
195					
196				土師器	
197					
198		60	溝		
199					
200					
201				土師器多量	
202		50	柱穴		
203					
204					
205		45	土坑		
206				土師器	
207				土師器	
208				土師器	
209		85	土坑	弥生土器、土師器	
210					
211				土師器片	
212					
213					
214				土師器片	
215				土師器片、山茶椀	
216				土師器、山茶椀	
217					
218				土師器、山茶椀	
219					
220				土師器	
221				土師器片	
222				土師器、山茶椀	
223				土師器、山茶椀	
224				須恵器	
225		20	土坑	土師器	
226					
227					
228				土師器	
229					
230					
231				土師器、山茶椀	
232					
233					
234		25	柱穴		
235		45	自然流路		
236				土師器	
237				土師器	
238		55	溝		
239		30	土坑		
240				土師器、山茶椀	
241		50	自然流路		
242					
243		85	柱穴	土師器、山茶椀	
244					
245					
246					
247					
248		50	溝	土師器	
249					
250		20	柱穴	土師器、山茶椀	
251		35	溝		
252					
253					

第２表　試掘調査結果一覧（平成10年度）

第２図　神戸・替田・里前遺跡ほ場整備事業地内地形図（１：1,000）〔アミ目部分は遺跡範囲，斜線部分は調査区範囲，■は平成９年度試掘坑，□は平成10年度試掘坑〕

区で、ほ場整備事業の排水路建設予定部分で、立会調査が実施された。なお、遺跡名については、この時点では、里前遺跡を神戸遺跡Ａ地区、神戸遺跡東浦地区を神戸遺跡Ｂ地区と呼称している。

里前遺跡の発掘区は、東西25m、南北２mで調査面積は50㎡である。遺構はまったくみられず、遺物は鎌倉時代の山茶椀などが若干出土したのみである。

神戸遺跡東浦地区の発掘調査区は、東西18m、南北２mで調査面積は36㎡である。時期不明の土坑を３基検出したが、遺物はまったく認められなかった。

以上の結果から、両調査区とも遺跡の縁辺部に位置するとの判断に至った。

（４）替田・弐ノ坪・里前遺跡の今後の調査

替田遺跡、弐ノ坪遺跡、里前遺跡のうち、中勢道路建設予定地より西側に広がる範囲については、平成11年度に試掘調査を行った。その結果、弐ノ坪遺跡、里前遺跡については、平成12年度に本調査を実施しているが、これについては別途報告することとする。

２　調査の経過

（１）　調査経過概要

平成11年度の調査は、県営ほ場整備事業に伴う神戸遺跡の３地区・替田遺跡の１地区とかんがい排水整備事業に伴う替田遺跡について行った。これらを便宜上、神戸遺跡Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区、替田遺跡（第３次）、替田遺跡（かん排）とする。

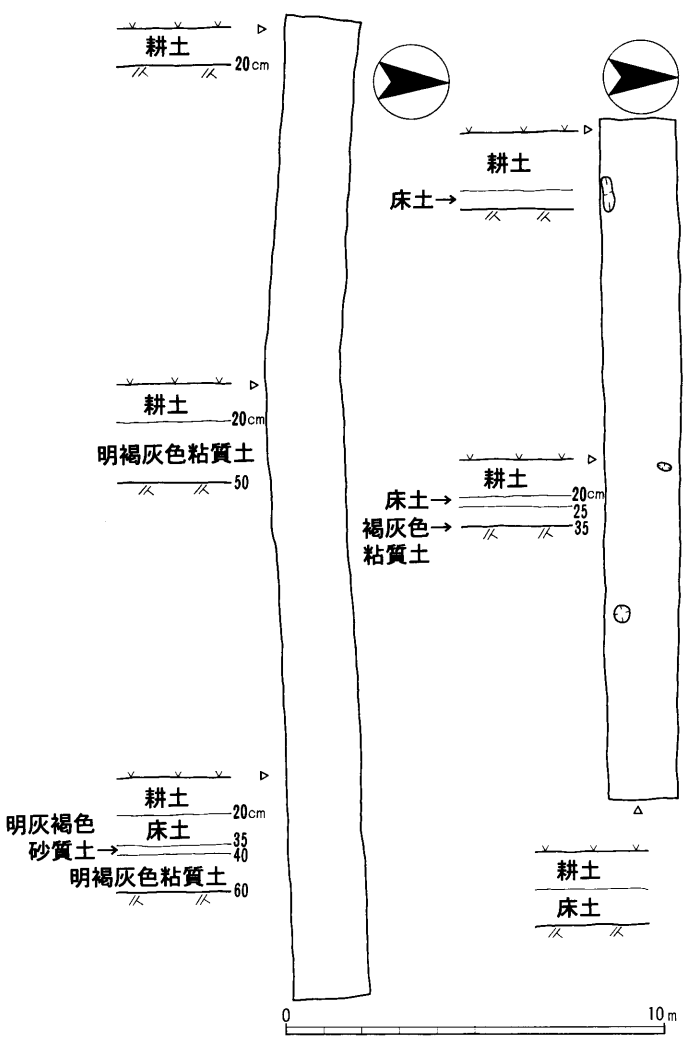
調査期間は平成11年５月10日～同年10月18日である。詳細については、「調査日誌抄」を参照されたい。

なお、湿気が多く蒸し暑い梅雨の時期から、最後まで調査に御協力いただいた作業員の方々の御芳名をここに記し、感謝の意を表する。

池田加代子、伊藤敏子、河合章一、河合花子、
黒川定子、杉田百合子、舘　正志、田中正次、
内藤みつ、樋口三和、本堂志げ子、前川恵子、
真弓百合子、森谷みち子、森谷光子、矢代せつ子、
芳村洋子　　（五十音順、敬称略）

（２）調査日誌（抄）

５月11日　替田遺跡（かん排）調査区表土除去開始。
　　湧水がかなりある。
５月17日　本日より作業員投入。土坑３基検出。
５月18日　平板により遺構実測。全景写真撮影。
　　替田遺跡（かん排）調査終了。
５月20日　神戸遺跡Ａ地区表土除去開始。
５月25日　作業員投入。調査区周囲の排水溝掘削。
６月１日　調査区北部の排水溝から弥生時代の壺が２個体、ほぼ完形で出土。
６月３日　調査区の細長い部分の遺構検出、掘削。
　　ＳＫ１・ＳＨ４・ＳＨ５遺物出土状況図作成。
６月８日　４・５の杭列遺構検出、掘削。
６月11日　６の杭列の遺構検出。南半部はほとんど遺構なし。
　　ｇ６～ｈ６にかけて掘立柱建物を確認。
６月16日　８の杭列遺構検出。
　　掘立柱建物は東に続く。緑釉陶器破片が少量出土。
６月21日　調査区南壁の土層断面実測。



第３図　里前遺跡（左）・神戸遺跡東浦地区（右）
立会調査区平面図（１：200）及び土層図（縮小図）

7月5日　セントヨゼフ学園中2年生郷土学習の一環で現場見学。
7月6日　A地区下層確認のためトレンチ掘削。
7月8日　B地区表土除去開始。
A地区細長い調査区の写真撮影。
7月12日　A地区、遺構平面実測開始。
全景写真撮影。
7月15日　中西先生、教員研修1日目。
7月23日　B地区遺構検出、掘削。
7月29日　B地区土層断面実測。
A地区下層検出。土坑・ピット確認。
8月6日　神戸小学校6年生、現場見学。
8月9日　B地区調査区北端で下層確認。なしと判断。
8月18日　B地区写真撮影。
8月23日　A地区下層遺構検出、掘削。
B地区調査終了。
8月27日　A地区下層、清掃・写真撮影。
東壁土層断面実測。
9月1日　C地区表土除去開始。土器ほとんど皆無。遺構も溝が数条確認できたのみ。
9月2日　A地区下層実測ほぼ終了。
C地区遺構検出、掘削。
9月10日　C地区調査区清掃、写真撮影。
立命館大学　青木先生来訪。ご教示を得る。
9月13日　替田遺跡（第3次）表土除去開始。
9月28日　台風など雨が続いたので、久しぶりの作業となる。
神戸遺跡C地区下層確認調査。なしと判断。
9月29日　替田遺跡（第3次）の遺構検出、掘削。
下層確認調査のためのトレンチ掘削。一部、下層がありそう。
10月5日　上層清掃、写真撮影。遺構平面実測。
10月12日　重機にて上層除去。弥生土器、木製品等出土。
10月14日　下層土層断面実測。替田遺跡（第3次）調査終了。

3　調査の方法

今回の調査面積は、神戸遺跡2,100㎡（A地区　1,100㎡＋下層400㎡・B地区400㎡・C地区200㎡）、替田遺跡（第3次）80㎡、替田遺跡（かん排）280㎡である。掘削は表土については重機で行った。それ以外は人力による掘削である。

今回の調査では、それぞれの調査区内を4m四方の枡目で区切ることによって、小地区を設定した。ただし設定は、国土座標とは無関係であり、またそれぞれの調査区の間に相関関係はない。

替田遺跡（かん排）の調査区の平面図は1/100で、それ以外の平面図・土層断面図は1/20で作成した。また出土遺物を伴う遺構については、原則的に1/5・1/10で作成した。

4　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等宛に行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官宛）
平成11年6月21日付農基第424号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官宛）
平成11年5月14日付教生第247号（県教育長報告）
平成11年5月14日付教生第248号（県教育長報告）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
（久居警察署長宛）
平成12年2月15日付教生第4-57号（県教育長通知）
（河北秀実・柴山圭子）

【註】

①『三重県　津市遺跡地図』津市教育委員会　1988
②『中勢バイパス建設予定地内埋蔵文化財概況一覧』三重県教育委員会文化課　1984（行政資料）
③「Ⅷ　第1次調査遺跡」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅱ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1997
④池端清行・水橋公恵「Ⅵ．替田遺跡（第1次）」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター　1997
⑤水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「Ⅱ．替田遺跡（第2次）」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998
⑥池端清行・米山浩之・宮田勝功「Ⅲ．弐ノ坪遺跡」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998
⑦山口格・西村美幸「Ⅱ．里前遺跡」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報　XI』三重県埋蔵文化財センター　1998
⑧中川　明『神戸遺跡発掘調査報告　－鳥井前地区－』三重県埋蔵文化財センター　1999

Ⅱ　位置と歴史的環境

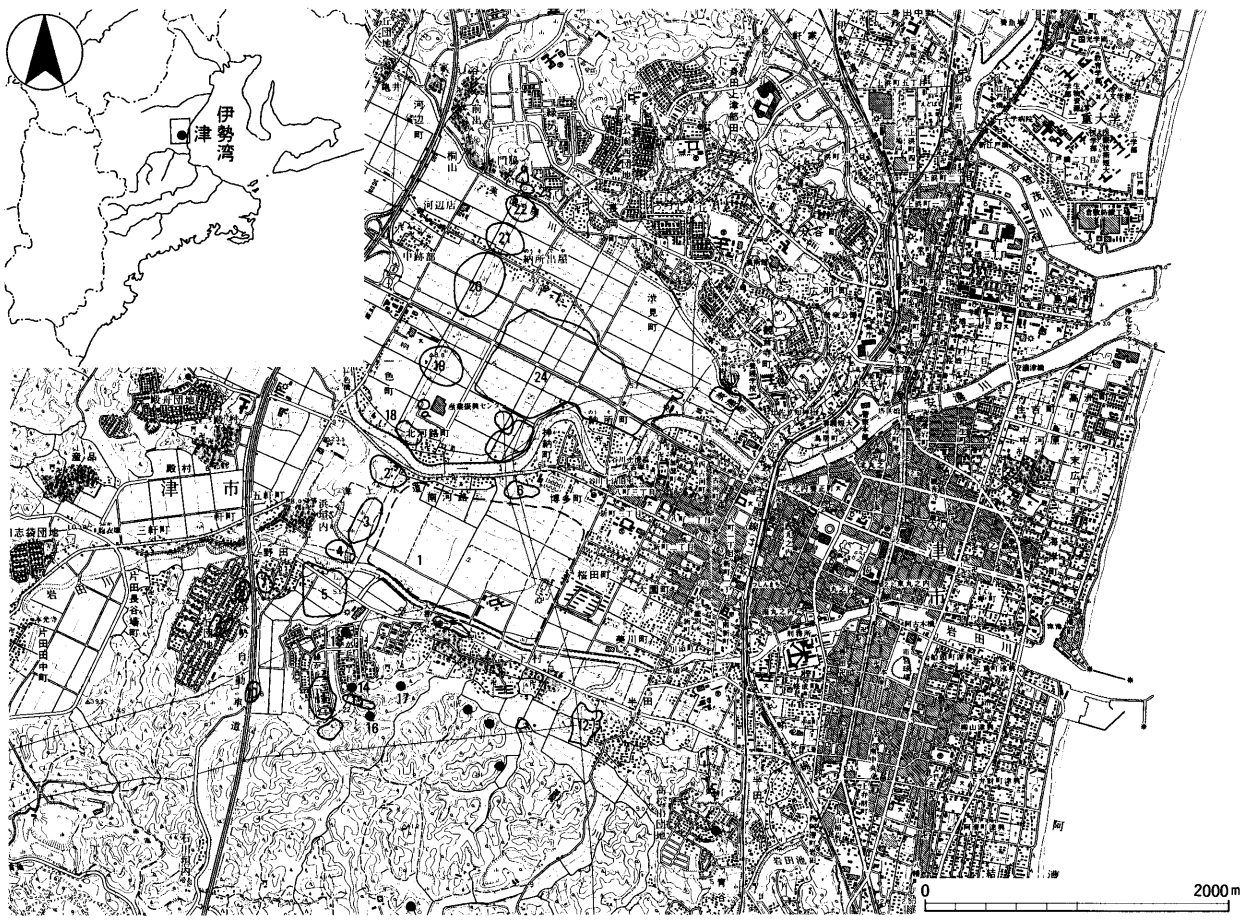
1　位置

神戸遺跡・替田遺跡は、津市神戸・南河路に所在する。これらの遺跡は安濃川中流域右岸、標高約５ｍ～７ｍの沖積地に広がる。安濃川は、鈴鹿山脈の南部に位置する錫丈ケ岳付近に源を発し、下流域に南北幅約３㎞程の肥沃な沖積平野を形成し、津市島崎町付近で伊勢湾に注ぐ。

当遺跡の西方には、長谷山丘陵裾部から延びる伊賀街道が通じており、古来より伊勢、特に安濃津と伊賀地方を結ぶ交通の要衝であったと考えられる。

2　歴史的環境

神戸遺跡・替田遺跡周辺の歴史的環境については、『神戸遺跡発掘調査報告』[1]等に詳細な記述があるので、それを参照されたい。　　（柴山圭子）



1	神戸遺跡	7	野田古墳群	13	鎌切古墳群	19	蔵田遺跡
2	替田遺跡	8	柳谷遺跡	14	おこし古墳群	20	松ノ木遺跡
3	弐の坪遺跡	9	大ヶ瀬遺跡	15	名塚古墳群	21	太田遺跡
4	里前遺跡	10	平栄遺跡	16	神戸古墳	22	森山東遺跡
5	梁瀬遺跡	11	稲葉古墳群	17	西垣内古墳	23	宮ノ前遺跡
6	立花堂遺跡	12	上村遺跡	18	位田遺跡	24	納所遺跡

第４図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院『津東部』『津西部』（１：25,000）より〕

Ⅲ　神戸遺跡（Ａ地区）調査の成果

1　基本層序

調査区は標高約５ｍの沖積地に位置している。現状は水田である。調査区の基本層序は上から順に次のとおりである。

第１層　褐灰色土（耕作土）

第２層　灰色土に鉄分が混じる。（床土）

第３層　灰色シルトに鉄分が混じる。（旧耕作土）

第４層　灰色砂質土に多くの鉄分が混じる。

（検出面）

2　遺構

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代と平安時代に大別できる。また、数条の溝を検出したが、これらは自然流路である可能性がある。

北半部では下層調査を行った。溝などの遺構を検出したが、上層の調査で確認しきれなかった遺構を下層で確認した可能性もある。第５図遺構平面図には、上層・下層を切りあい関係で表現した。

ここでは主な遺構について記述する。

（１）古墳時代の遺構

溝ＳＤ48　調査区の北東隅で検出した。調査区外に広がるため、全体の規模などは不明である。下層検出面からの深さは約0.1ｍ程度である。途中で途切れ方形に屈曲することから、いわゆる「方形周溝墓」の形状に類似している。ただし、Ｓ字状口縁台付甕のＤ類[2]に並行する小形の鉢が出土している。

溝ＳＤ40・41　調査区中央付近で検出した遺構である。幅約1.2ｍ、上層検出面からの深さは約0.3ｍ～0.4ｍで、ＳＤ42・47とほぼ並行して流れる。現地では別々に遺構番号を付けたが、同じ溝であろう。埋土からＳ字甕や柳ヶ坪形壺などが出土している。

掘立柱建物ＳＢ43（第７図）　調査区東部中央で検出した遺構である。南北２間、東西４間のものである。東西棟と考えられ、棟方向はＮ84°Ｗを示す。ピット内からは、Ｓ字甕のＣ類に相当するものが出土している。

掘立柱建物ＳＢ44（第８図）　調査区中央部で検出した遺構である。東西２間、南北３間のものである。南北棟と考えられ、棟方向はＮ23°Ｅを示す。ＴＫ43型式[3]に相当する須恵器杯が出土している。

（２）平安時代の遺構

土坑ＳＫ１（第13図）　細長い調査区の西よりで検出した遺構である。北半分が調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、東西径約１ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍである。埋土中には多くの炭化物を含み、土師器杯や甕が出土している。

竪穴住居ＳＨ４（第12図）　細長い調査区のほぼ中央で検出した遺構である。東側で突出部があるものの平面は方形である。長辺約1.9ｍ、短辺約1.5ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍ程である。南東隅には被熱痕が見られ、炭化物・焼土を取り除くと、床面から深さ0.2ｍ程の土坑状になる。北東隅壁際の床面直上と被熱痕上で土師器杯や灰釉陶器長頸壺が出土している。ＳＨ５を切っている。今回、竪穴住居として報告したが、小形であることや、この遺構に伴う柱穴を確認できなかったことから、住居であるとするには疑問も残る。

竪穴住居ＳＨ５（第12図）　ＳＨ４の東で検出した遺構である。南側が調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、平面形は方形になると思われる。東西径約 2.3ｍ、検出面からの深さ約 0.1ｍ程である。北東隅には被熱痕が見られる。出土遺物もこの周辺に集中する。ＳＨ４によって切られる。

溝ＳＤ７　調査区南端で検出した遺構である。東西方向に流れ、両端が北方に緩やかに屈曲しながら、調査区外に延びる。幅約0.7ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍである。途中でＳＤ27を切るかたちで合流する。埋土中から灰釉陶器などが出土している。

溝ＳＤ27　調査区中央部から南端にかけて検出した遺構である。ＳＤ７と合流する。最大幅約2.8ｍ、検出面からの深さ約0.9ｍ～1.0ｍである。埋土中からは灰釉陶器をはじめ、黒色土器・製塩土器・緑釉陶器など多数出土している。

掘立柱建物ＳＢ52（第７図）　調査区北西部で検出した遺構である。調査区外へ延びるため定かではないが、東西５間、南北１間以上の掘立柱建物である。建物の東に、同方向に並ぶ柱列があるため、東面庇

である可能性も考えられる。棟方向はN58°Wを示す。

掘立柱建物ＳＢ53（第12図）　細長い調査区の中央付近で検出した遺構である。調査区外へ延びるため定かではないが、東西２間、南北１間以上のものである。棟方向はN27°Eである。ＳＢ54と同時期の建物であると思われる。

掘立柱建物ＳＢ54（第12図）　細長い調査区の中央付近で検出した遺構である。調査区外へ延びるため定かではないが、東西５間、南北２間以上のものである。東西棟で、棟方向はN74°Wを示す。

掘立柱建物ＳＢ55（第12図）　細長い調査区の中央付近で検出した遺構である。調査区外へ延びるため定かではないが、東西３間、南北１間以上の掘立柱建物である。東西棟で、棟方向はN73°Wである。ＳＢ55の建て替えであると思われる。

柱列ＳＡ56（第９図）　調査区北東部の掘立柱建物群の南側で検出した遺構である。東西４間まで確認できた。ＳＢ58やＳＢ59に伴うものと考える。

掘立柱建物ＳＢ57（第８図）　調査区北東隅で検出した遺構である。南北２間、東西４間の南北棟で、棟方向はN23°Eを示す。

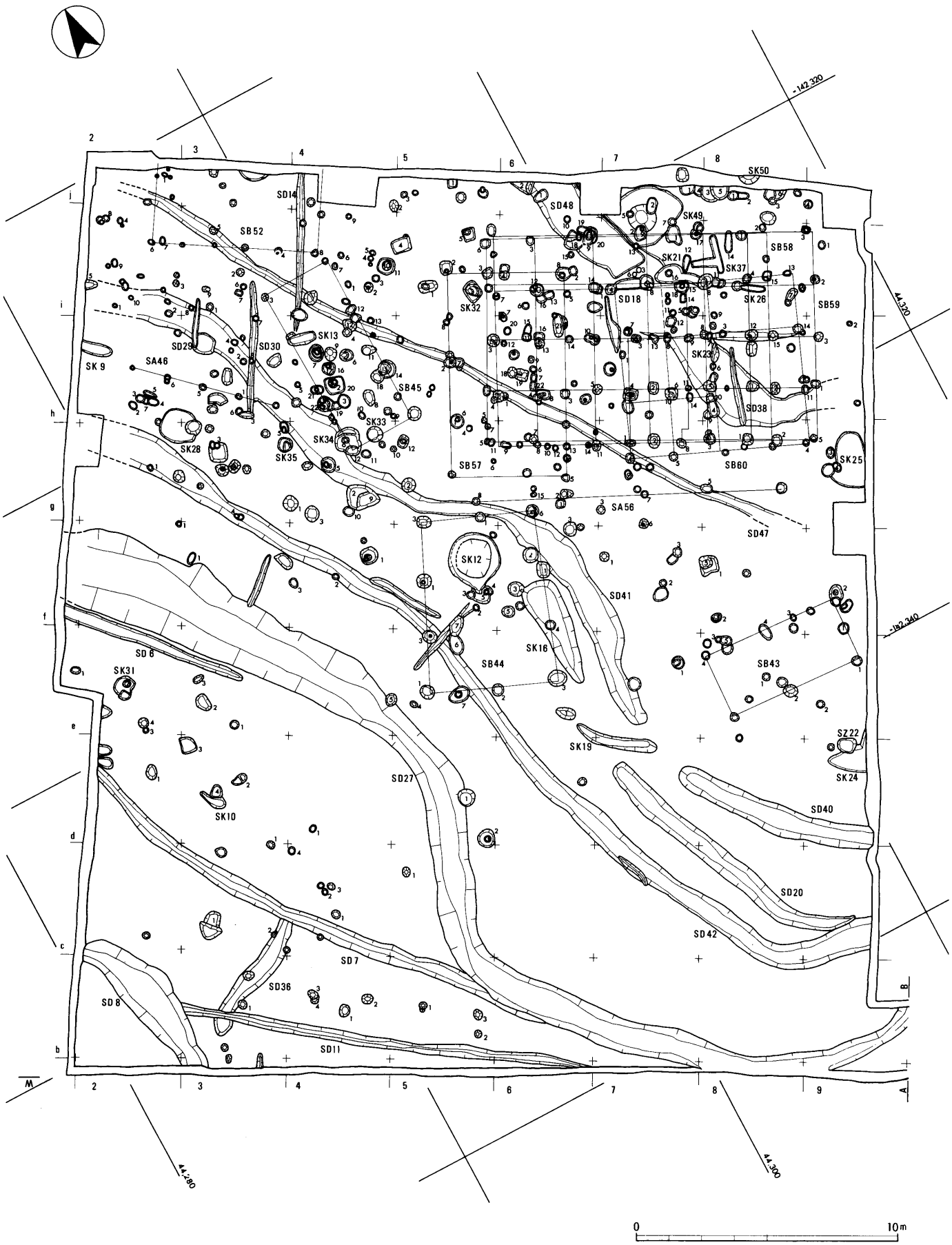
掘立柱建物ＳＢ58（第11図）　調査区北東隅で検出した遺構である。東西５間、南北４間の掘立柱建物である。四面に庇を持つ、棟方向N64°Wの建物であると考えられる。ＳＢ59を建て替えたものであろう。

掘立柱建物ＳＢ59（第10図）　調査区北東隅で検出した遺構である。東西５間、南北４間の掘立柱建物である。四面に庇を持つ、棟方向N64°Wの建物であると考えられる。ＳＢ58とは建て替え関係にあるものと思われる。

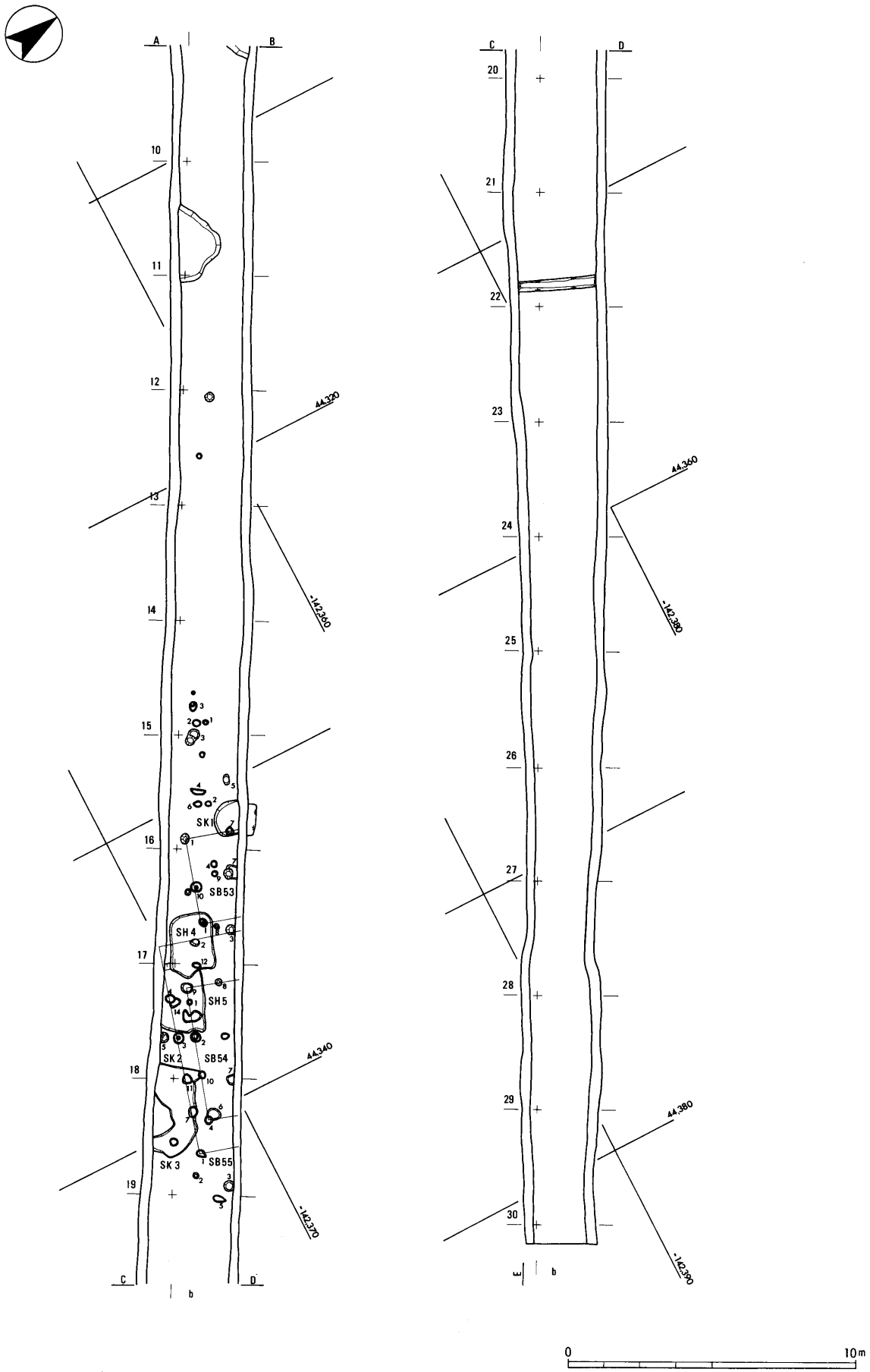
掘立柱建物ＳＢ60（第９図）　調査区北東隅で検出した遺構である。南北３間、東西４間の掘立柱建物である。東側に庇と考えられる柱列のあることから南北棟であると考えられる。建物の主軸はN23°Eである。本報告書では庇と考えたが、西側の身舎とした部分の南を除く三方に浅い溝が確認でき、これを雨落ち溝とすると、２間×３間の建物と同方向の柱列であるとも考えられる。ピット内からはO53号窯式[4]に相当すると思われる、灰釉陶器の椀が出土している。

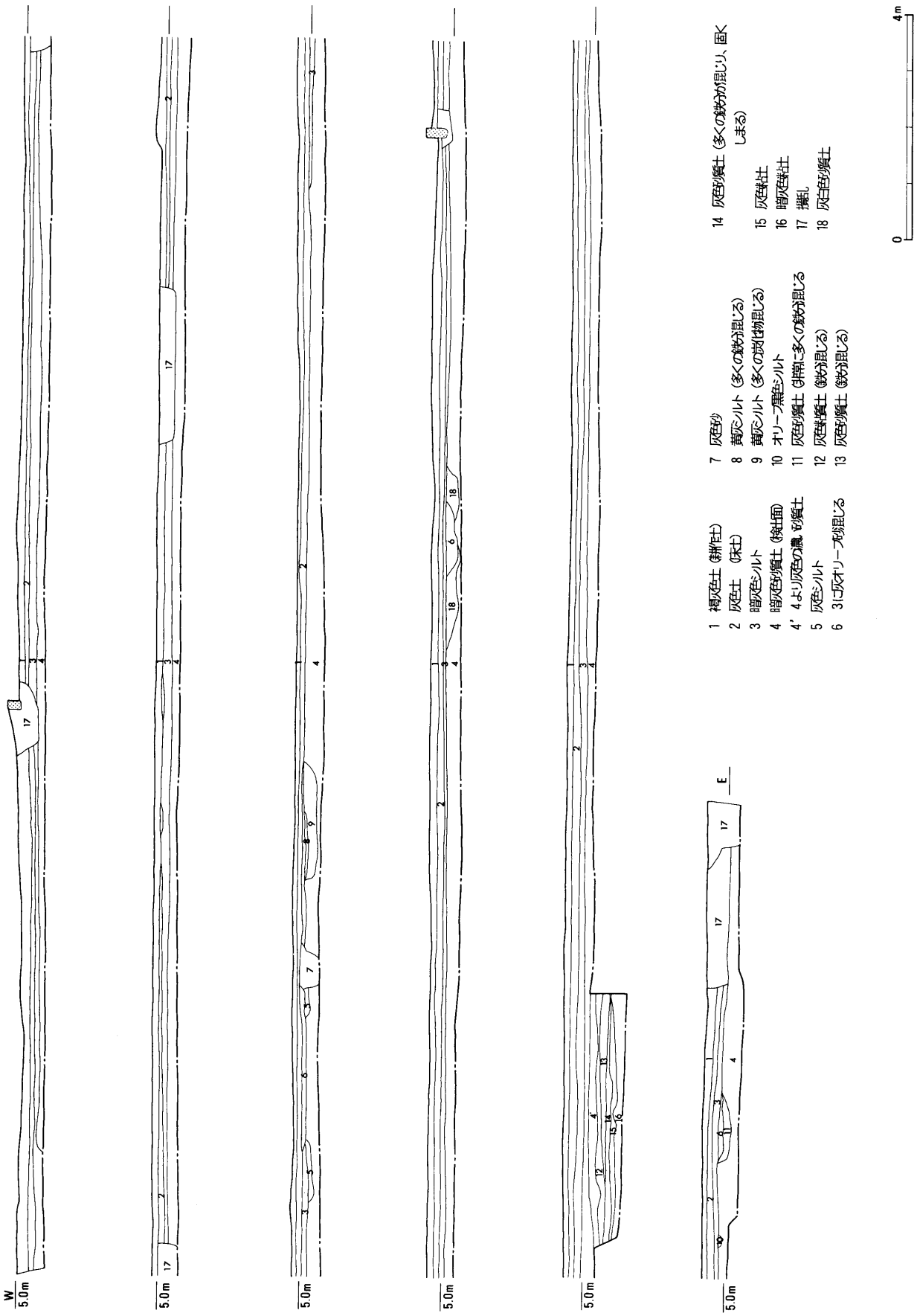
遺構番号	小地区	規　模	方　向		桁行(m)	梁行(m)	時　期	備　考
ＳＢ43	e 8 他	4 × 2	東西棟	N84° W	5.3	2.5		
ＳＢ44	f 5 他	3 × 2	南北棟	N23° E	6.6	4.6		
ＳＢ45	h 3 他	3 × 2	南北棟	N 2° W	6.8	2.6		
ＳＡ46	g 6 他	4		N47° W	5.8	−	平安時代	
ＳＢ52	i 2 他	5 ×（1）	東西棟？	N58° W	6.4	(1.4)		
ＳＢ53	b 17他	2 ×（1）	南北棟？	N27° E	3.0	(1.6)	平安時代	
ＳＢ54	b 17他	(4) ×（1）	東西棟？	N74° W	(5.5)	(2.7)	平安時代	
ＳＢ55	b 18他	3 ×（1）	東西棟？	N73° W	4.7	(1.2)	平安時代	
ＳＡ56	g 6 他	4		N65° W	11.8	−	平安時代	
ＳＢ57	h 6 他	4 × 2	南北棟	N23° E	7.9	4.5	平安時代	
ＳＢ58	h 6 他	5 × 4	東西棟	N64° W	10.9	7.9	平安時代	四面庇か
ＳＢ59	h 6 他	5 × 4	東西棟	N64° W	12.4	8.1	平安時代	四面庇か
ＳＢ60	h 8 他	3 × 4	南北棟	N23° E	6.5	6.9	平安時代	東面庇か

第３表　神戸遺跡（Ａ地区）掘立柱建物一覧表

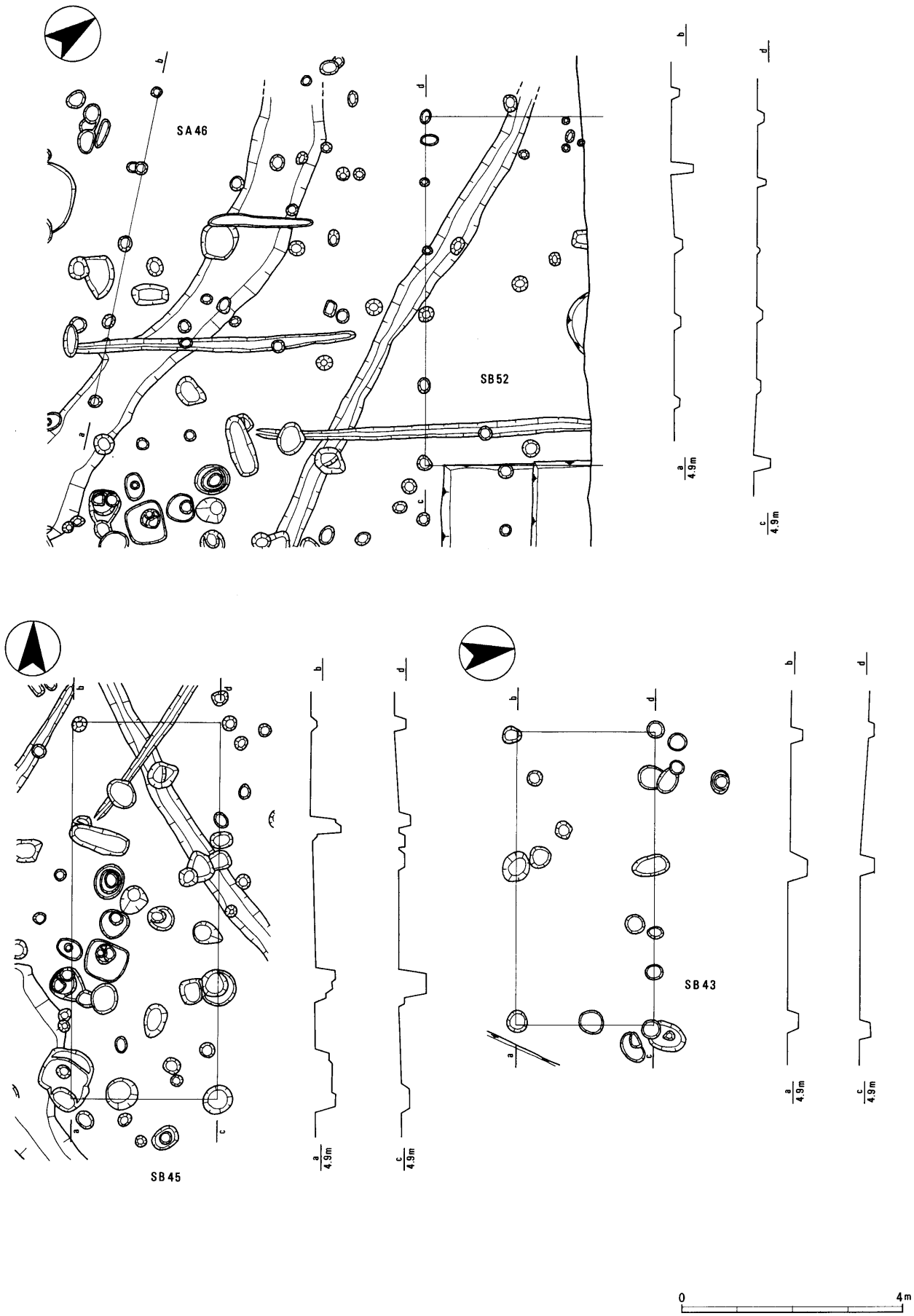


第５図　神戸遺跡（Ａ地区）調査区平面図（１：200）

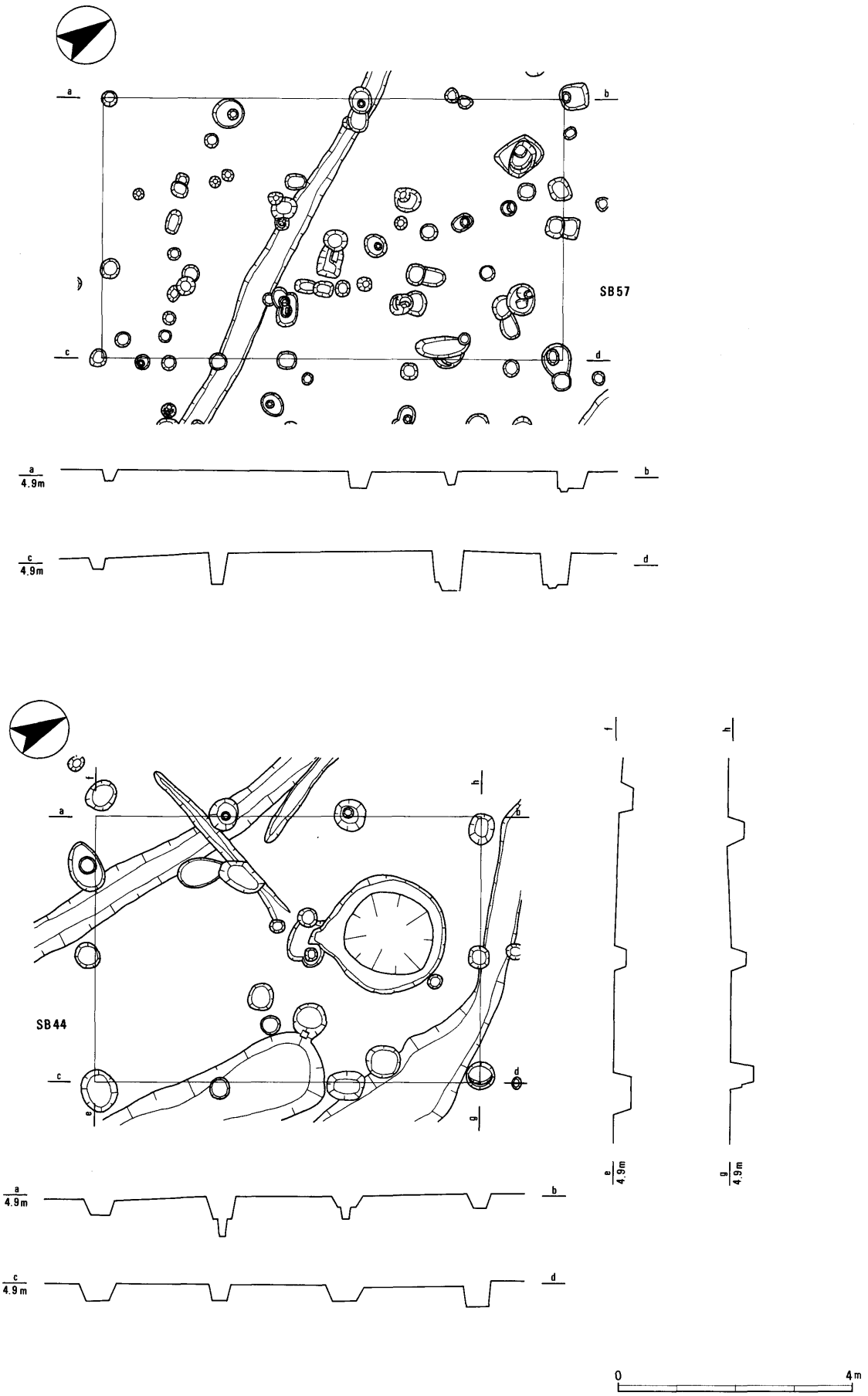

A
B
C
D
E
b
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
44.320
-142.360
44.340
-142.370
44.360
-142.380
44.380
-142.390
SK1
SB53
SH4
SH5
SK2
SB54
SK3
SB55
0
10m



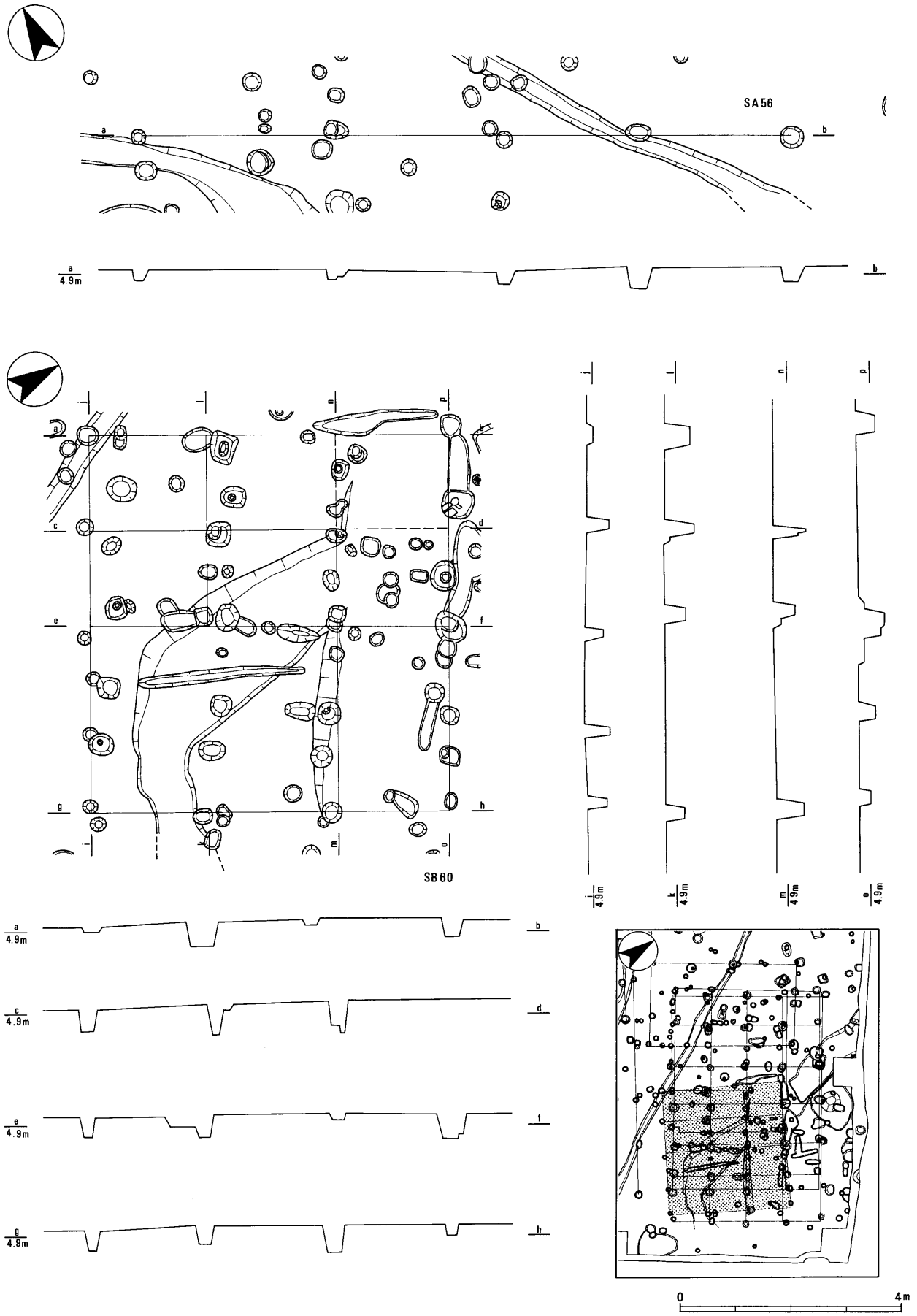
第６図　神戸遺跡（Ａ地区）土層断面図（１：100）



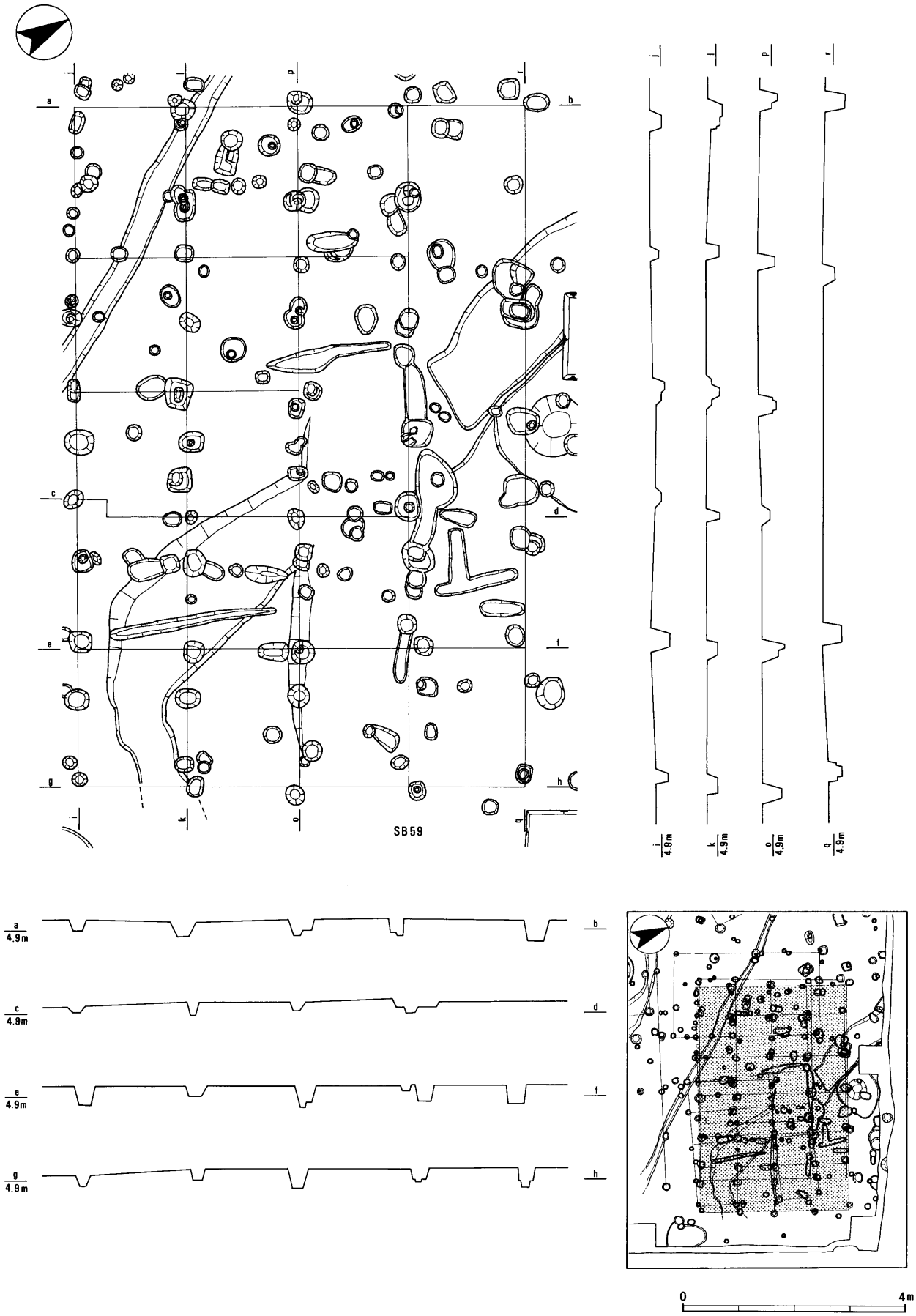
第７図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＡ46・ＳＢ52・ＳＢ45・ＳＢ43　実測図（１：100）



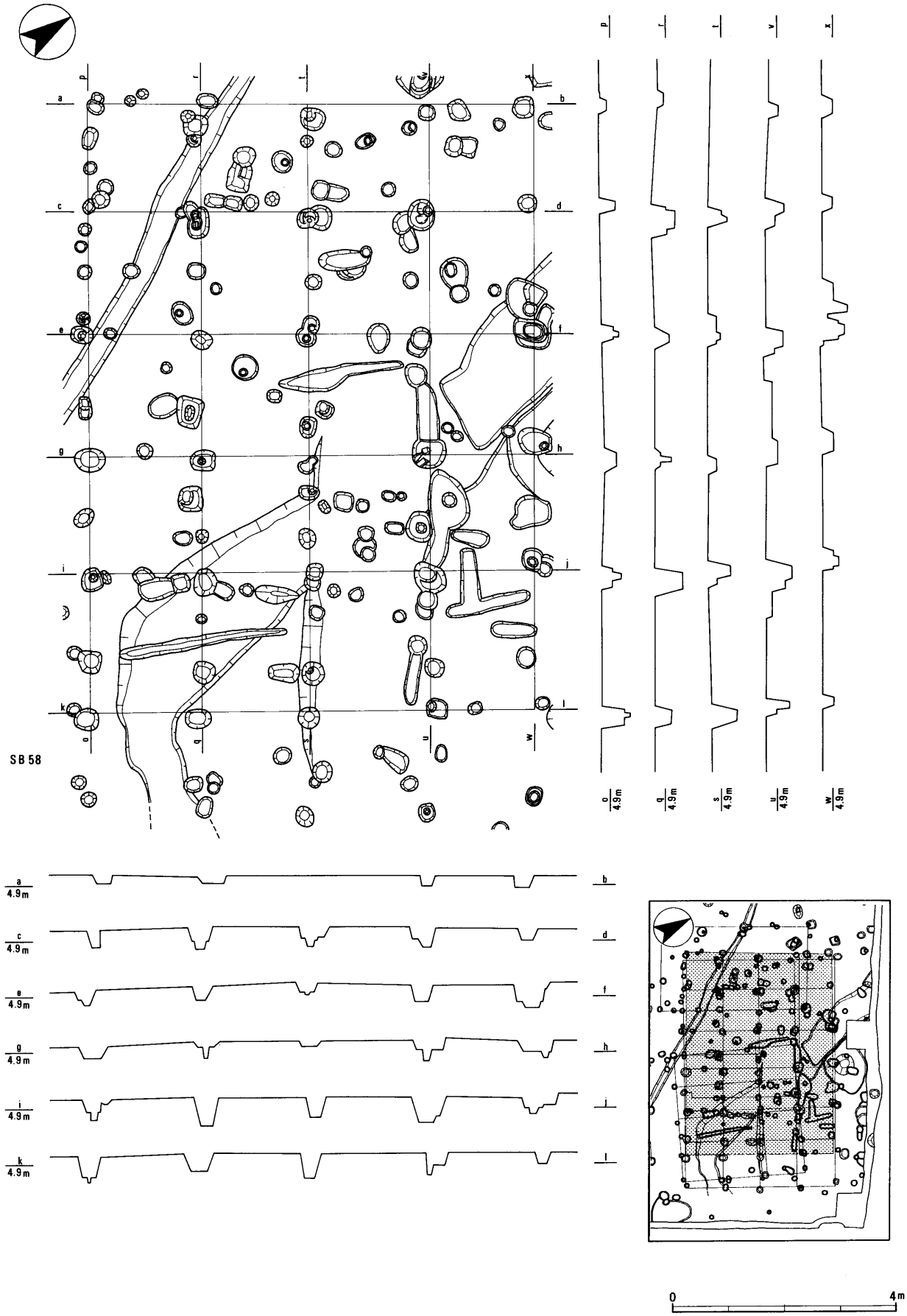
第８図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ57・ＳＢ44　実測図（１：100）



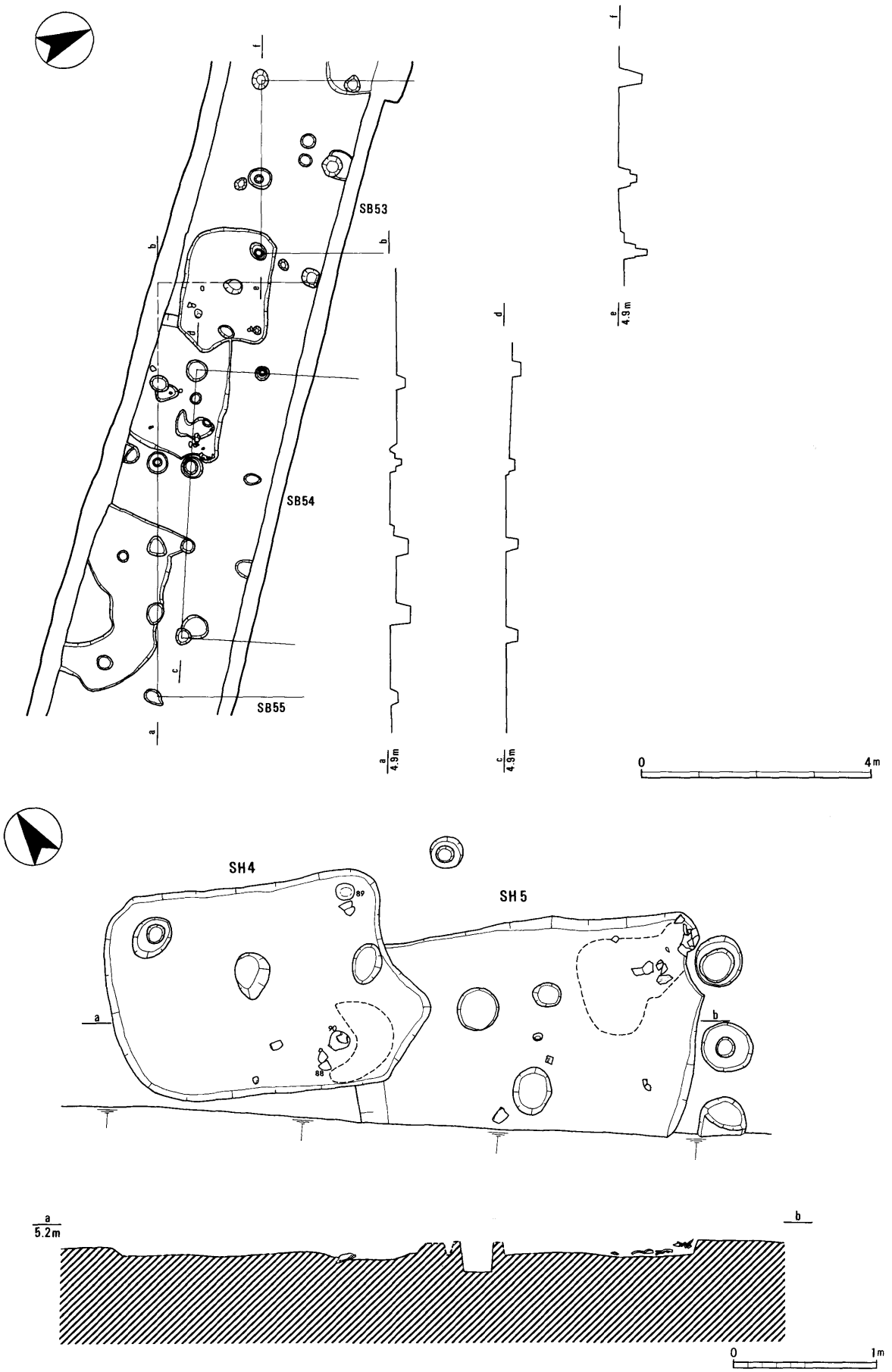
第９図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＡ56・ＳＢ60　実測図（１：100）



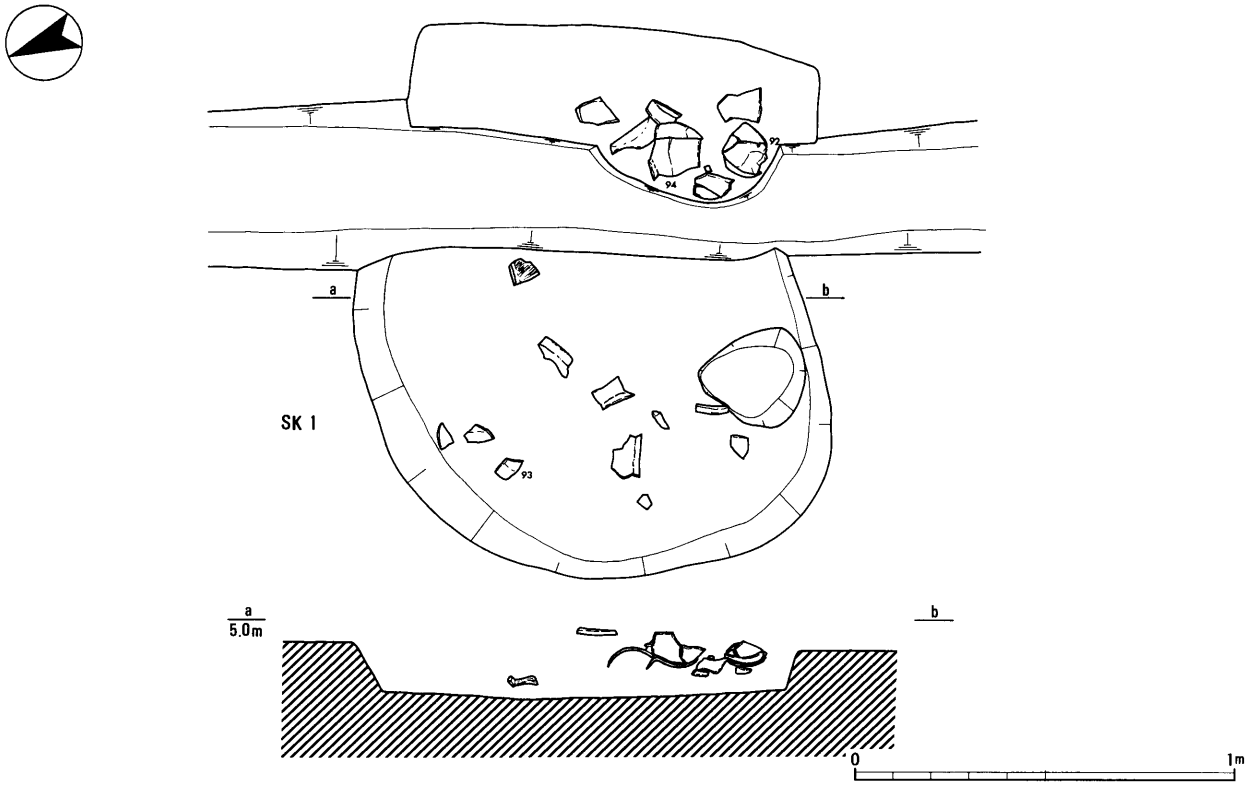
第10図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ59　実測図（１：100）



第11図　神戸遺跡（A地区）ＳＢ58　実測図（1：100）



第12図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＢ53・ＳＢ54・ＳＢ55 実測図（１：100）　ＳＨ４・ＳＨ５　実測図（１：40）
点線内は焼土，炭化物



第13図　神戸遺跡（Ａ地区）ＳＫ１　実測図（１：20）

遺構番号	小地区	性　格	時期	備　　考	遺構番号	小地区	性　格	時期	備　　考
ＳＫ１	b16	土坑	平安		ＳＫ13	ｈ４	土坑	不明	
ＳＫ２	b18	土坑	不明		ＳＤ14	ｉ４	溝	平安	
ＳＫ３	b19	土坑	中世		ＳＫ15				ＳＤ27の一部のため抹消
ＳＨ４	b17	竪穴住居	平安		ＳＫ16	ｅ６他	土坑	古墳	
ＳＨ５	b18	竪穴住居	平安		ＳＫ17	ｊ６他	土坑		
ＳＤ６	ｆ２	溝	平安		ＳＤ18	ｈ７他	溝		
ＳＤ７	ｃ３	溝	平安		ＳＫ19	ｅ６他	土坑	奈良？	
ＳＤ８	ｂ２	溝			ＳＫ20	ｄ７	土坑	古墳	
ＳＫ９	ｈ２	土坑	平安		ＳＫ21	ｉ７	土坑		
ＳＫ10	ｄ３	土坑			ＳＺ22	ｄ９	撹乱		
ＳＤ11	ｂ３	溝	古墳		ＳＫ23	ｈ８	土坑	不明	
ＳＫ12	ｆ５	土坑	古墳	ＳＥ12から変更	ＳＫ24	ｄ９	土坑	古墳前期	

第４表　神戸遺跡（Ａ地区）遺構一覧表１

遺構番号	小地区	性　格	時期	備　　考	遺構番号	小地区	性　格	時期	備　　考
ＳＫ25	ｇ９	土坑	古墳		ＳＫ37	ｉ８	土坑	古墳	
ＳＫ26	ｉ８	土坑	飛鳥		ＳＤ38	ｈ８	溝	古墳	
ＳＤ27	ｆ２	溝	平安		ＳＫ39				抹消
ＳＫ28	ｇ２他	土坑	平安		ＳＤ40	ｄ８	溝	古墳前期	ＳＤ41と同じか？
ＳＤ29	ｈ３他	溝			ＳＤ41	ｅ７他	溝	古墳前期	ＳＤ40と同じか？
ＳＤ30	ｈ３他	溝			ＳＤ42	ｆ５	溝	古墳前期	
ＳＫ31	ｅ２	土坑	不明		ＳＤ47	ｇ７	溝	古墳前期	
ＳＫ32	ｉ５	土坑	古墳？		ＳＤ48	ｉ７	溝	古墳前期	
ＳＫ33	ｇ４	土坑	古墳前期		ＳＫ49	ｉ７	土坑	奈良	
ＳＫ34	ｇ４	土坑	古墳？		ＳＫ50	ｊ８	土坑	古墳？	
ＳＫ35	ｇ４他	土坑	古墳		ＳＫ51	ｇ９	土坑	古墳？	
ＳＤ36	ｂ３	溝	古墳						

第５表　神戸遺跡（Ａ地区）遺構一覧表２

４　遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で90箱程度である。中でも古墳時代、平安時代前期から中期にかけての遺物が多数を占める。以下、出土遺物についての概略を遺構別に記述する。詳細については観察表を参照されたい。

①　古墳時代

ＳＤ11出土遺物（１）　１は高杯の脚台部である。脚部は屈曲し、脚裾は強いヨコナデによって立ち上げられている。

ＳＫ16出土遺物（２～５）　２は壺の肩部である。貼付突帯上を板状工具で刻んでいる。弥生時代前期後半のものと思われる。

３～５は台付甕である。４は口縁部が外に張り出し、体部外面のハケメは細かい。器壁はやや厚手である。赤塚次郎氏によるＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕と省略）の編年のＣ類後半のものであろう。５も同じくＳ字甕である。Ｄ類に相当する。３はＳ字状口縁をなしていたものと同系統のものである。口縁部外面の特徴的な屈曲は消失している。

ＳＤ48出土遺物（６～８）　６・７は小形の鉢である。６は口縁部が直線状に開き、体部は平底を呈する。体部外面のほぼ全域が黒化している。７は体部と口縁部の境が明瞭ではなく、口縁端部までほぼ直線状に開く。調整は非常に粗い。内外面に少量ではあるが、斑点状に赤色顔料が付着している。

８は台付甕の脚部である。脚裾は折り返されている。器壁は厚い。

ＳＤ41出土遺物（９～16）　９は壺である。ヘラ描沈線を巡らせる。

10は高杯杯部である。外面ナデ、内面ハケメ調整の後なでられている。11は高杯脚部である。外面に横方向のミガキが施されている。近畿地方の影響を受けているものであろう。

12は柳ヶ坪形壺である。口縁部内外面に綾杉文が施されている。

13～16は台付甕である。13は受口状口縁を有するもの、14～16はＳ字状口縁を有するものである。14は口縁端部に面を持ち、外面には押し引き刺突文が施されている。Ａ類に相当する。15・16は器壁が厚

く、ハケメも粗い。D類に相当する。

ＳＫ25出土遺物（17） 17は須恵器短頸壺である。底部が丸く、肩が張り、口縁部は内弯傾向である。田辺昭三氏による陶邑編年（以下、田辺編年）のＴＫ10型式に相当するものであろう。

ＳＤ20出土遺物（18・19） 18は須恵器杯身、19は高杯の杯部である。田辺編年のＴＫ10型式～ＭＴ85型式に相当する。

ＳＤ６出土遺物（20） 20は土師器甕である。磨滅が激しく、調整が不明瞭である。内面のヨコハケは辛うじて観察できるが、実測図には表現できなかった。口縁端部を上方につまみ上げる形状である。

ＳＫ12出土遺物（21） 21は大形の鉢であると思われる。体部外面にケズリ、内面にナデ、口縁部には２単位のヨコナデが施されている。甕である可能性も考えられる。

ＳＫ19出土遺物（22） 22は大形の甕である。体部内・外面ともハケメ調整されている。６世紀前半頃のものと思われる。

ＳＫ49出土遺物（23・24） 23は土師器の甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は丸くおさまる。

24は須恵器の甕の底部であると思われるが、外面全体にカキメが施されていることから横瓶である可能性も考えられる。

②　平安時代

ＳＤ７出土遺物（25～28） 25は砥石である。

26・27は灰釉陶器の皿の高台部である。27は底部に「長□」と読める墨書が施されている。

28は土師器甕である。体部から口縁部にかけて「く」の字状に強く屈曲し、口縁端部は折り返される。器壁は比較的厚い。

ＳＫ５出土遺物（29～31） 29は壺の口縁部であろう。形状から瀬戸内の影響を受けているものと思われる。

30・31は甕である。30は受口状口縁を呈する。口縁端部に面を持ち、口縁部に刺突文が施されている。混入遺物と考える。31の口縁端部は強いナデによって肥厚し、丸みを帯びた形状を呈する。

ＳＤ27出土遺物（32～77） 土師器・須恵器のほか、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器・木製品などが出土している。

32は須恵器杯蓋、33・34は杯身である。32の天井部と34の底部内面にヘラ記号が見られる。

35・36は土師器皿、37～39は土師器杯である。35はほぼ平坦な底部から、口縁部が強いヨコナデによって外反気味に立ち上がる。内面には暗文が確認でき、また内外面には煤が付着する。36の底部内面にはヘラ記号が見られる。38は、底部と口縁部の境が明瞭ではなく、断面が弓状をなす。ヨコナデの範囲は狭い。それに対して、37・39のヨコナデの範囲は1/2程度まで及ぶ。

40は黒色土器である。Ａ類に相当する[5]。高台は、ゆるやかな方形を呈する。

41はロクロ土師器の台付皿である。糸切り後高台を貼り付けているが、剥落している。

42は土師器の台付皿である。底部を刻んで高台を貼りつけている。

43は小形の鉢である。体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部は強いナデによって外反する。体部外面に煤が付着している。

44・45は志摩式製塩土器である。

46は土師器の鉢である。体部外面をヘラケズリ後ミガキ、内面をナデで調整する。口縁部は外に屈曲し、端部は強いナデによって肥厚する。

47・48は緑釉陶器である。47は椀で、近江産のものである。48は皿で、内面に沈線、三叉トチン痕が観察できる。K90号窯式に並行するものである。

49～65は灰釉陶器である。皿（49～52・54）、椀（53・55～65）に分けられる。49は陵皿である。56・63は高台が三日月形を呈する。52・57・62は高台がやや幅広になり、内側下半の内弯や外側下方の陵が弱い。53は断面方形の高台を有する。内外面や、断面に煤が付着する。58～60は高台が低く、体部下半側に貼り付けされている。58の内外面には煤が全面に付着している。特に底部外面は非常に黒い。しかし断面には煤は付着していない。59の底部内面にはべんがらと思われる赤色顔料が付着している。64の高台形状は二等辺三角形を呈する。いずれもK90号窯式の新しいところからO53号窯式の古いところまでで納まる。

66は須恵器双耳壺の耳の部分であると思われる。粘土塊を貼り付け後、焼成前に穿孔している。

67は灰釉陶器の長頸壺である。

68～75は土師器の甕である。口縁端部が丸くおさまるもの（68）、つまみ上げるもの（69・75）、内側に肥厚するもの（70～74）に分けられる。69は体部が球形をなす。口縁端部外面には沈線が観察できる。75は体部が長胴形をなすと思われる。69と同様、口縁端部外面に沈線が観察できる。71～73は体部が球形である。74は体部が長胴形をなす。70は口縁部から体部にかけての屈曲が、ほかのものに比較してゆるやかである。体部外面の磨滅は非常に激しいが、わずかにヨコハケが観察できる。

76は須恵器甕である。底部は平底である。体部外面には左下がりの平行タタキが施され、内面はなでられている。

77は棒状木製品である。片方の先端を欠く。もう一方の先端を丸く調整する。用途は不明である。

ＳＤ42出土遺物（78～82） 78・82は須恵器杯身である。78は口縁部が内弯して立ち上がり、端部は外反する。82は田辺編年のＴＫ43型式に相当すると思われる。

79は小形の壺の口縁部である。

80は布留形甕である。口縁部がやや内弯して立ち上がり、端部が内側に肥厚する。

81はＳ字甕である。形状はＢ類に相当するが、頸部に沈線とまではいかないまでも痕跡が確認できるため、Ｃ類である可能性もある。

ＳＫ28出土遺物（83～87） 83は土師器杯・84は土師器皿である。どちらも平坦な底部から口縁部が外反気味に立ち上がる。

85・86は土師器椀である。85は内面をヘラミガキ後なでている。内面には煤が付着している。86は底部に刻みを施し、高台を貼り付けている。

87は甕である。口縁部は、「く」の字状を呈し、端部はつまみ上げる形状である。

ＳＫ４出土遺物（88～90） 88・89は土師器の杯である。88はほぼ平坦な底部から、口縁部が若干外反しながら立ち上がるもので、口径約13cm、器高約３cmである。89は口縁部と底部との境があまり明瞭ではなく、断面が弓状にやや外反しながらのびるものである。歪みが大きく、口径約12～13cm、器高約４cmである。内面のほぼ全体に煤が付着している。

90は灰釉陶器の長頸壺であると思われる。体部最大径に比較して、頸接合部の径が小さいことや体部の欠け方などから水瓶・浄瓶である可能性も考えられる。

ＳＫ９出土遺物（91） 91は黒色土器椀である。Ａ類に相当する。外面にはミガキが、内面にはナデが施されている。

ＳＫ１出土遺物（92～94） 92・93は土師器杯である。92は平坦な底部から口縁がまっすぐのびるもので、器高は約３cmである。磨滅が激しい。93はヨコナデが口縁部ほぼ全域に施されており、底部内面も比較的丁寧になでられている。

94は土師器甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は強いナデによって内側に肥厚し、丸みをおびる。

ＳＢ58出土遺物（95～100） 95は土師器の皿である。底部と口縁部の境が明瞭ではなく、断面が弓状を呈する。内面が黒化している。

96は灰釉陶器椀である。体部外面下半はケズリで調整されている。

97は黒色土器椀である。Ａ類に相当する。

98は志摩式製塩土器である。

99は灰釉陶器の鉢である。体部下半にケズリが施されている。

100は須恵器の鉢であると思われる。口縁端部が肥厚する。形状から篠窯須恵器の影響を受けているものと思われる。

ＳＢ59出土遺物（101・102） 101はミニチュア甑である。

102は高杯である。脚部は屈曲し、脚裾は強いヨコナデによって立ち上げられている。全体的に丁寧なナデで仕上げられている。

ＳＢ60出土遺物（103） 103は灰釉陶器椀である。内面に重ね焼きの痕が確認できる。Ｏ53号窯式に相当すると思われる。

ＳＢ44出土遺物（104・105） 104は須恵器杯蓋、105は杯身である。どちらも田辺編年によるＴＫ43型式に相当するものであろう。

その他のピット出土遺物（106～113） 106は土師器高杯である。磨滅が激しく、調整は不明瞭である。

107はＳ字甕である。器壁が厚く、ハケメも粗いが、

口縁部には２単位のヨコナデが残る。Ｄ類後半のものと思われる。

108は台付甕の脚台部である。脚裾は折り返される形状である。

109は土師器杯、110・111は土師器の皿である。110・111 は平坦な底部から口縁部がやや外反気味に立ち上がる形状である。110は内外面に煤が付着する。111は内面に赤色顔料が付着している。

112・113 は土師器の甕である。113は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は強いナデによって内側に肥厚し、丸みをおびる。外面全域に煤が付着し、内面には炭化物が付着している。

包含層等出土遺物（114～161） 土師器・須恵器のほかに土錘・石器などが出土している。

114は石鏃である。基部が凹基をなし、側縁が緩やかに外に張り出し、脚部の上で少しくびれる。脚部は先細りせず角ばる。先端を欠く。下呂石製である。

115は砥石である。細長い自然礫を素材とし、片面がよく使い込まれている。左側面もわずかではあるが、使用された形跡が見られる。

116は敲石である。片面に敲打痕がある。大きさ・重さから敲石としたが、台石として使用された可能性も考えられる。

117は不明土製品である。

118～122は小形丸底壺である。119～121は口縁部が真っ直ぐ立ち上がる。121の外面には赤い斑点状のものが各所に確認できる。122は口縁部がやや内弯気味に立ち上がる。いずれも、ハケメの状況や胎土がＳ字甕Ａ類と類似する。

123は高杯である。杯部は椀形を呈する。

124～126 は甕である。125・126はＳ字甕で、器壁が厚く、ハケメが粗い。口縁部のヨコナデは２単位残る。Ｄ類に相当する。124はＳ字甕と同じ系統に属するものであろう。口縁端部は凹線状の窪みを持つ面を有する。

127は土師器鉢である。内外面に煤が付着しており、赤変している部分も見られる。

128～130は土師器壺である。128は磨滅が非常に激しく、調整が不明瞭である。体部外面に辛うじてハケメが確認できる程度である。129・130は広口壺である。129は頸部に突帯を巡らせ、その上に刻みを施す。また、体部上半には櫛描横線文の間に、板状工具による綾杉文が施され、最下段には刺突文が施される。130の口縁端部の内・外面は櫛状工具による刺突文で装飾されている。頸部には突帯を巡らせ、その上を刻んでいる。体部上半には櫛状工具により横線文・刺突文が施されている。

131は有蓋高杯の蓋、132・133は杯蓋、134・135は杯身である。131は天井部につまみが付くもので、つまみ上部は窪んでいる。杯蓋（132・133）はどちらも小形で、天井部はヘラおこし後未調整である。田辺編年のＴＫ217型式の前半に相当するものと思われる。杯身（135）は偏平感が強い。

136は高杯の脚台部である。土師器の高杯のような形状である。

137～ 141は土師器の杯である。 137の底部内面には焼成後に施されたヘラによる線刻が確認できる。138は口縁部内面の一部に沈線が見られる。 141の外面には煤が付着している。

142は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、底部外面はなでられている。底部内面には暗文が確認できる。器壁は厚い。

143・144は黒色土器椀である。Ａ類に相当する。144の口縁端部内面には沈線が確認できるが、小片なので、全周するかは不明である。

145はロクロ土師器の椀、146は鉢である。

147～150は土錘である。

151は灰釉陶器の長頸壺である。頸部と体部は接合できなかったが、同一固体であると思われる。

152～154は須恵器甕である。

155～157・160は土師器甕、158・159は土師器鍋である。155は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部に面を持つ。体部外面のヨコハケは頸部にまで及ばない。157の体部は球形をなす。口縁端部は内側に肥厚する。特に頸部内面に煤が付着している。158の口縁端部外面には凹線状の窪みが一部確認できる。把手は差し込み式である。 158は口縁端部に面を持つ。体部外面の上半は細かいハケメ、下半はケズリ、内面にはヨコハケが施されている。

160は口縁端部が肥厚し、凹線状の窪みを持つ面を有する。

161は清郷型鍋である。口縁部が「く」の字状に短

く屈曲し、水平に引き出される。

5　小結

（1）遺構について

当調査区が所在する安濃川流域は、かつての条里型地割の名残をよく留めている地域であり、条里の復元も行われてきた[6]。この推定方向はN30°Eである。また、実際に神戸遺跡内の地割りをあたってみるとN25°E～N27°Eの間におさまる[7]。

今回の調査では、この実測した条里の方向にほぼ合致する掘立柱建物が数棟確認できた。調査区北東部に位置するSA56～SB60と、細長い調査区中央付近に位置するSB53～SB55である。軸方向については第3表で示した。ピット内からは灰釉陶器、黒色土器、製塩土器などが出土しており、いずれも平安時代中期のものであると思われる。

それに対して、これらの掘立柱建物と同時期であるSD27は、この条里の方向には合致しておらず、SD41やSD42、SD47などの古墳時代前期以降の溝と同じ方向を示している。

この神戸遺跡周辺に目を向けてみると、中勢バイパス建設に伴って発掘調査が行われた蔵田遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代初頭の掘立柱建物や、平安時代末期以降の溝が、条里方向に沿う形で検出されている[8]。また、同じく弐ノ坪遺跡でも、条里方向に合致する平安時代前期の建物や溝が確認された[9]。

以上のことから、安濃川右岸では現存の条里方向に沿った遺構が、遅くとも平安時代前期には出現していたことがわかる。しかし、神戸遺跡では平安時代中期においても、条里地割りが完全には施行されておらず、古墳時代前期以来の地割りを依然踏襲しているものもあり、条里プランの成立の過渡期であることがわかる。

今後この地域の条里プランの成立・拡散を考えていく上で、依然飛鳥・奈良・平安時代の遺構の検出例が乏しいのは否めないが、今回の調査結果がその一助になることは間違いないであろう。

（2）遺物について

今回の調査で出土した遺物のうち、ここでは灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・製塩土器について記述する。

緑釉陶器は破片数で約30点ほどあり、うち70％が調査区北東部の掘立柱建物付近から出土している。あとの30％については、SD27付近からの出土である。30点のなかで半数は猿投産のものと思われ、O53号窯式併行のものであろう。

製塩土器については破片数にして約70点、黒色土器については同じく約27点確認した。出土地点は、SD27と調査区北東部の掘立柱建物付近からで、他ではほとんど見られない。黒色土器は27点中1点のみがB類であった。

灰釉陶器も多数出土しており、ほとんどがSD27からのものである。時期的には、K90号窯式3型式～O53号窯式1型式までのものである。全体的に完形品が見られず、よく使い込まれている。

（柴山圭子）

〔註・参考文献〕

① 中川　明『神戸遺跡発掘調査報告　－鳥井前地区－』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

② 以下、S字状口縁台付甕の分類については、下記の文献による。
赤塚次郎「廻間式土器」「土器・土器群の形成」（『廻間遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター　1990年）

③ 以下、陶邑編年については、下記の文献による。
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）

④ 以下、灰釉陶器の分類については、下記の文献による。
斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産　－猿投窯を中心に－」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西東3－』古代の土器研究会　1994年）
※但し分類をするにあたって、愛知県立陶磁資料館の井上喜久男氏のご教示を得た。

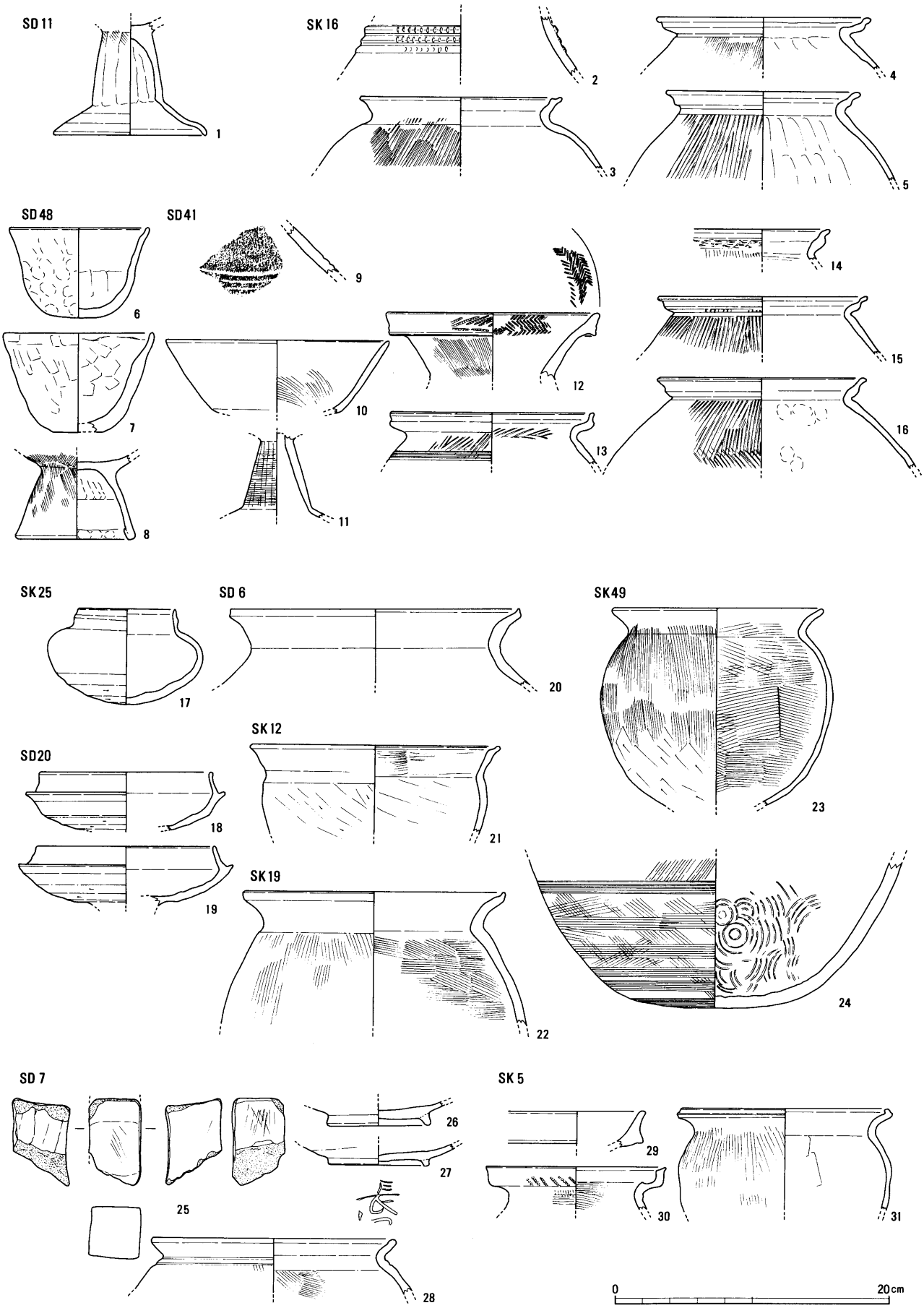
⑤ 以下、黒色土器の分類については、下記の文献による。
田中　琢「古代・中世窯業の地域的特色(4) 畿内」（『日本の考古学』Ⅳ　河出書房　1967年）

⑥ 仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」（『伊勢湾岸地域の古代条里制』　東京堂出版　1979年）

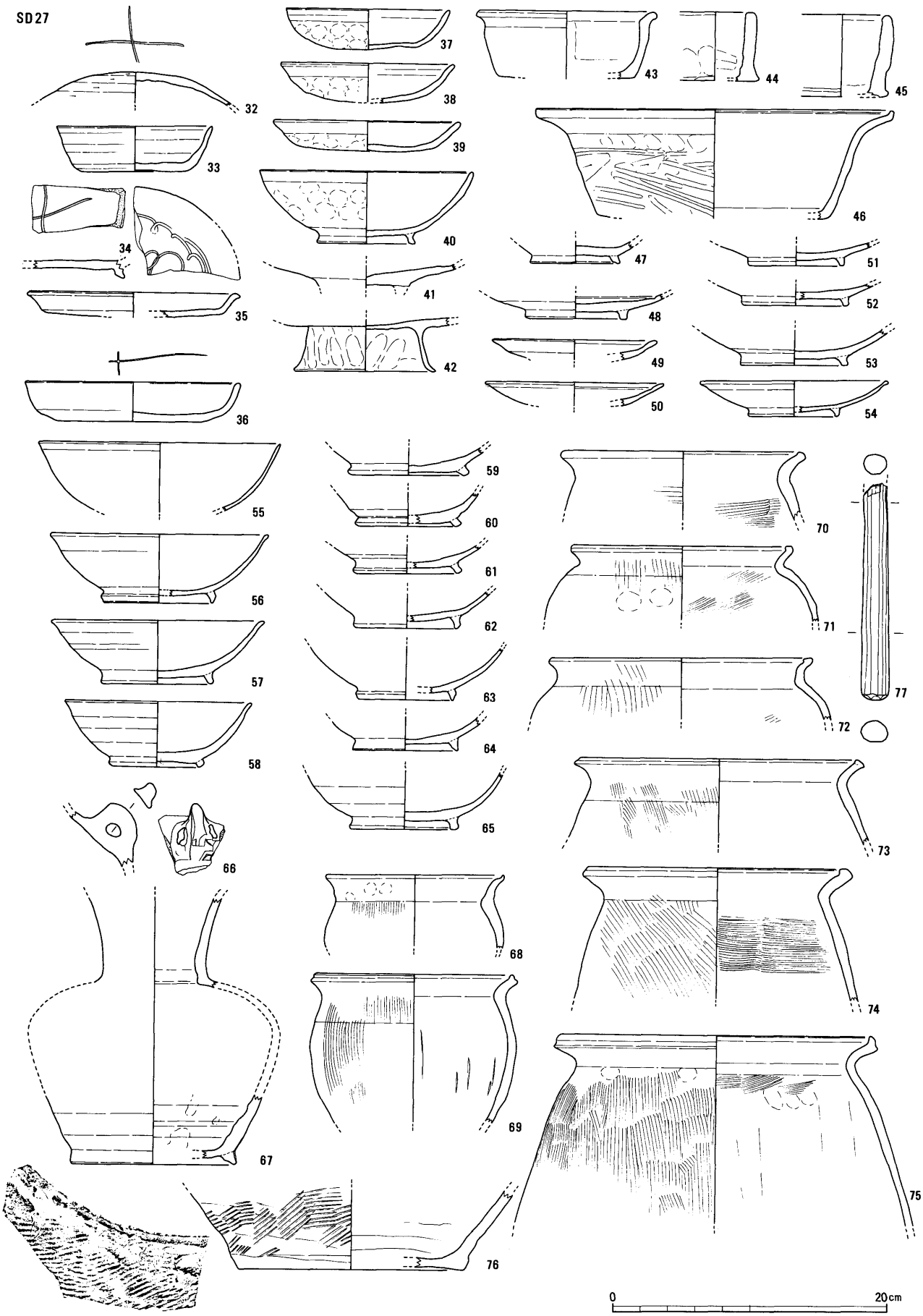
⑦ 『三重県　津市遺跡位置図』（津市教育委員会　1988年）を使用して当該地域の地割方向を測った。

⑧ 米山浩之・宮田勝功『一般国道23号（10工区）建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

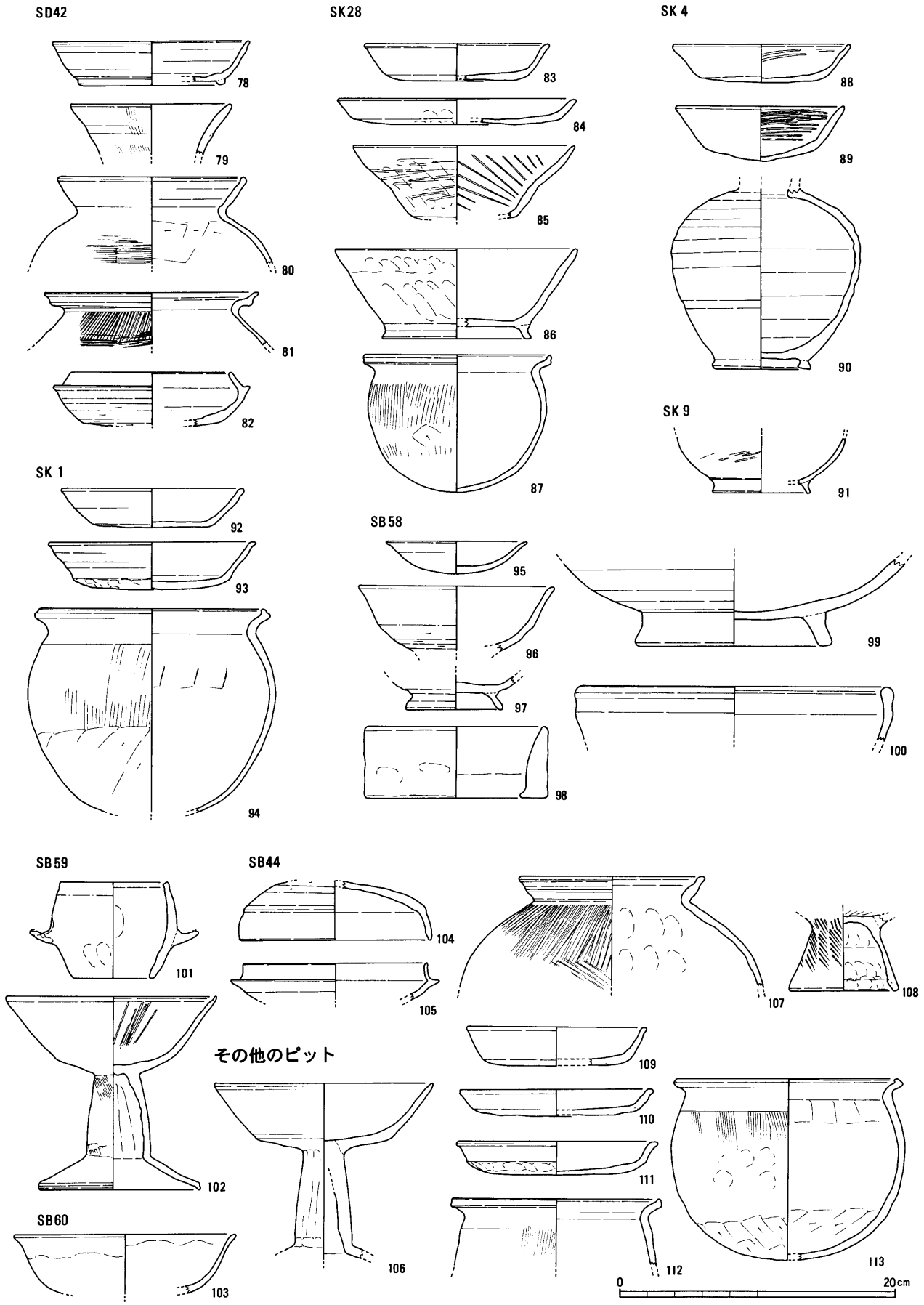
⑨ 池端清行「弐ノ坪遺跡」（『一般国道23号中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報X』　三重県埋蔵文化財センター　1998年）



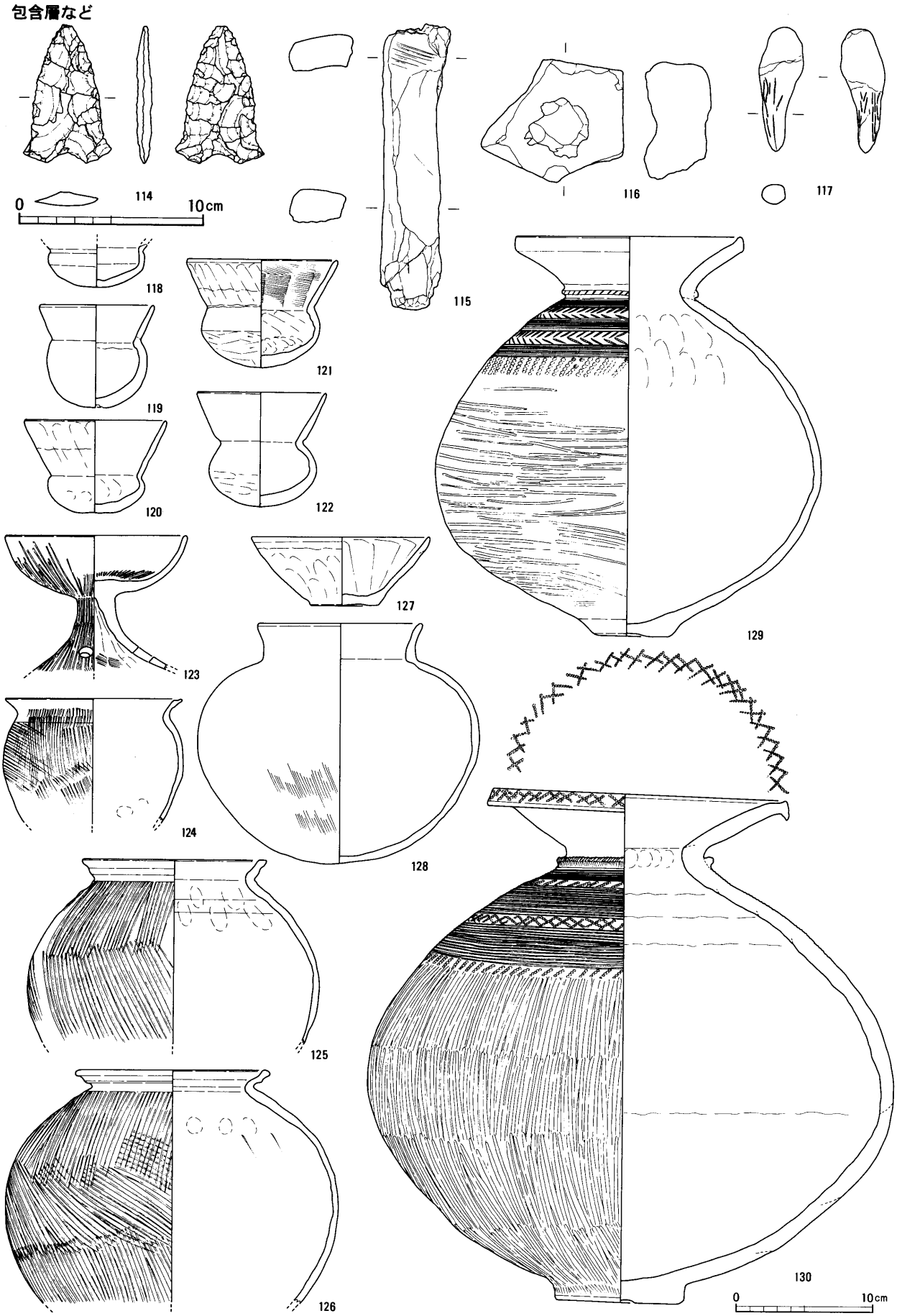
第14図　神戸遺跡（A地区）出土遺物実測図１（１：４）



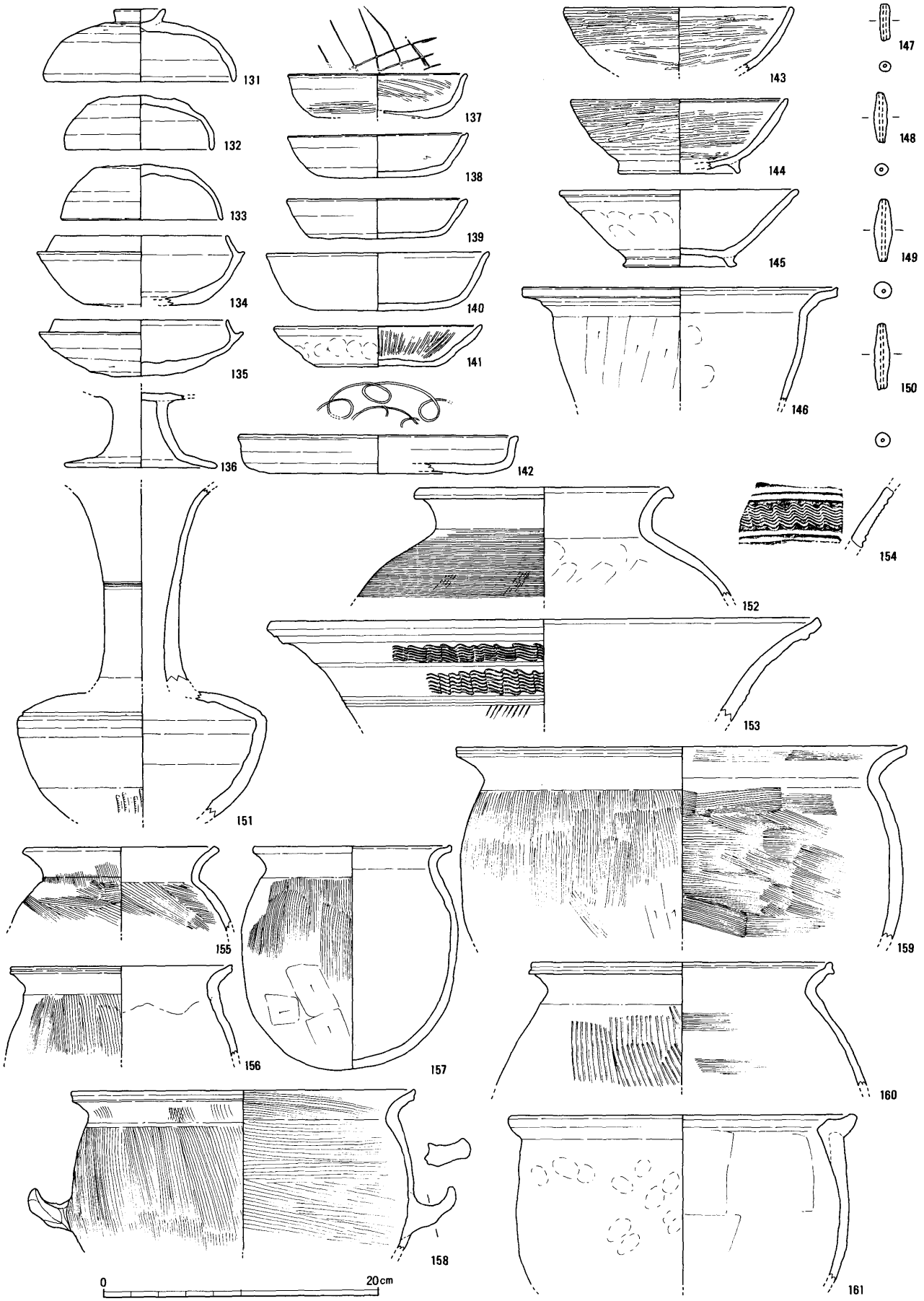
第15図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図２（１：４）



第16図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図３（１：４）



第17図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図４（114は１：３、他は１：４）



第18図　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物実測図５（１：４）

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	009-01	土師器 高杯	b 5 SD11			底径 11.1	ナデ・シボリ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	外：灰白 5Y 7/1 内：灰 5Y 5/1	1/2	
2	022-04	弥生土器 壺	f 6 SK16				ナデ・貼付突帯上刺突	粗（～3.0㎜細砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：にぶい橙 7.5YR 6/4		
3	022-01	土師器 台付甕	f 6 SK16	15.0			ハケメ・ナデ	やや密	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	1/7	ハケメ 6本／cm
4	040-02	土師器 台付甕	f 6 SK16	15.5			ハケメ・ナデ	やや密	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	1/3	ハケメ 7本／cm
5	022-02	土師器 台付甕	f 6 SK16	14.0			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	外：黄灰 2.5Y 5/1 内：灰黄 2.5Y 7/2	1/5	ハケメ 4本／cm
6	034-01	土師器 小形鉢	h 8 SD48	10.0	6.5		オサエ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 6/4	1/4	底部黒斑あり
7	034-02	土師器 小形鉢	g 9 SD48	11.0	7.0		ナデ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	褐灰 10YR 5/1 4/1 黄灰 2.5Y 4/1	1/5	内外面赤い斑点あり
8	034-03	土師器 台付甕	g 9 SD48			底径 8.5	ハケメ・ナデ・オサエ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/3 7/4 内：明褐灰 7.5YR 7/2	7/8	ハケメ 8本／cm
9	034-06	弥生土器 壺	g 5 SD41					粗（～2.0㎜砂粒含）	並	外：灰白 10YR 5/2 内：黒褐 2.5Y 3/1		
10	035-03	土師器 高杯	i 2 SD41	16.1			ナデ・ハケ後ナデ	やや密（～3.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 6/4	1/7	
11	035-04	土師器 高杯	h 3 SD41				ミガキ・ナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	橙 5YR 7/6		横方向のミガキ
12	036-05	土師器 壺	b 7 SD41	15.5		頸部 9.0	ハケメ・刺突文	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4 6/4	頸部 1/5	柳ヶ坪形壺
13	034-05	土師器 台付甕	g 4 SD41	14.8			ハケメ・櫛描横線文・ナデ	粗（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/4 浅黄橙 10YR 8/3	1/8	受口状口縁
14	034-04	土師器 台付甕	f 6 SD41				ハケメ・刺突文・ナデ	粗（～3.0㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/2	残少量	S字甕A類
15	035-02	土師器 台付甕	h 3 SD41	15.2			ハケメ・ナデ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/8	S字甕D類
16	035-01	土師器 台付甕	h 3 SD41	15.2			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	1/5	S字甕D類
17	023-02	須恵器 短頸壺	g 9 SK25	7.0	7.0		ロクロケズリ・ロクロナデ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	灰 5Y 5/1	1/2	
18	010-02	須恵器 杯身	d 7 SD20	13.0		受部径 14.5	ロクロケズリ・ロクロナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	外：灰白 N 7/ 内：灰 N 6/	1/6	
19	010-01	須恵器 高杯	c 8 SD20	13.0		受部径 15.5	ロクロケズリ・ロクロナデ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	灰 N 6/	1/4	
20	009-02	土師器 甕	l 2 SD6	21.0			ナデ・ハケメ？	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/4	1/4	
21	022-05	土師器 鉢	f 5 SK12	18.0			ケズリ・ナデ	やや密（～3.0㎜砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：にぶい黄橙 10YR 7/2		
22	024-01	土師器 甕	d 7 SK19	19.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～3.5㎜砂粒含）	並	浅黄橙 7.5YR 8/3 灰黄褐 10YR 4/2	1/5	

第６表　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物観察表１

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
23	032-02	土師器 甕	i 7 SK49	15.0			ハケメ・ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4 浅黄橙 7.5YR 8/3	1/4	ハケメ 6本／cm
24	032-01	須恵器 甕	i 7 SK49				カキメ・タタキ・ナデ・青海波	やや密（4.0㎜大小石含）	並	黄灰 2.5Y 5/1 灰白 5Y 7/1		
25	010-03	砥石	b 6 SD7									
26	009-04	灰釉陶器 皿	b 6 SD7			台径 7.5	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密	良	灰白 5Y 7/1		
27	009-03	灰釉陶器 皿	b 7 SD7			台径 7.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	良	外：灰白 2.5Y 8/1 内：灰白 5Y 7/1	台部 1/4	底部墨書 「長□」
28	009-05	土師器 甕	b 9 SD7	18.0			ハケメ・ナデ	やや密（微砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：灰黄褐 10YR 5/2		
29	024-04	土師器 壺	b 18 SK5				ナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	浅黄橙 10YR 8/3		
30	024-03	土師器 甕	b 18 SK5	13.0			ナデ・刺突文・ハケメ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/2	小片	
31	024-02	土師器 甕	b 18 SK5	15.0			ハケメ・ナデ	やや密（～4.0㎜小石含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	1/4	
32	004-04	須恵器 杯蓋	e 4 SD27				ロクロケズリ・ロクロナデ	やや密（～1.0㎜砂粒含）	良	灰 N 6/ 5/		天井部 ヘラ記号
33	005-06	須恵器 杯身	f 3 SD27	11.4	3.4	底径 7.0	ロクロナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	良	灰白 N 7/	1/5	
34	004-07	須恵器 杯身	e 4 SD27				ロクロナデ・ロクロケズリ	密（微砂粒含）	良	灰 7.5Y 6/1 灰 N 4/		底部内面 ヘラ記号
35	005-04	土師器 皿	f 3 SD27	15.4			ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	1/4	内面に暗文 内外面炭化物
36	005-05	土師器 皿	e 3 SD27	15.5	2.9		ナデ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 6/4 灰褐 7.5YR 4/2	1/8	内面ヘラ記号 外面磨滅
37	005-02	土師器 杯	f 2 SD27	12.8	2.9		オサエ・ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	浅黄橙 10YR 8/3	3/4	
38	004-03	土師器 杯	e 3 SD27	12.6			オサエ・ナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/2 黄灰 2.5Y 5/1	1/4	
39	004-02	土師器 杯	d 5 SD27	13.6	2.2		オサエ・ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	並	浅黄橙 10YR 8/3 にぶい黄橙 10YR 7/3		
40	004-01	黒色土器 椀	b 7 SD27	15.4	7.1	高台径 5.3	オサエ・ナデ・貼付ナデ	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	外：浅黄橙 10YR 8/3 内：黒	1/6	
41	005-03	ロクロ土師器 台付皿	f 3 SD27			底径 6.5	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	密（微砂粒含）	軟	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内：浅黄橙 10YR 8/3	底部ほぼ残	
42	018-02	土師器 台付皿	f 3 SD27			台径 10.1	ナデ・オサエ	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	橙 5YR 7/6	台部一部欠損	
43	005-07	土師器 小形鉢	f 3 SD27	13.2			ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 6/4 内：灰褐 7.5YR 6/2	1/4	外面煤付着
44	004-05	製塩土器	f 2 SD27				オサエ・ナデ	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい褐 7.5YR 6/3 灰黄褐 10YR 4/2		

第７表　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物観察表２

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
45	004-06	製塩土器	f 2 SD27				オサエ・ナデ	粗（～4.5㎜砂粒含）	並	橙 5YR 6/6		
46	018-01	土師器 鉢	l 3 SD27	26.0			ケズリ後ミガキ・オサエ・ナデ	粗（～2.5㎜細砂粒含）	並	にぶい橙 5YR 7/4	1/5	
47	007-03	緑釉陶器 椀	f 2 SD27			高台径 6.5	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR 8/3 オリーブ黄 7.5Y 6/3	完存	近江
48	007-02	緑釉陶器 皿	f2 f3 SD27			高台径 7.5	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/1 オリーブ黄 7.5Y 6/3	2/3	K90
49	006-08	灰釉陶器 皿	f 2 SD27	12.0			ロクロナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 7.5Y 8/1	小片	O53 陵皿
50	006-07	灰釉陶器 皿	f 2 SD27	13.0			ロクロナデ	やや密	並	灰白 2.5Y 8/1	1/8	K90
51	008-04	灰釉陶器 皿	e 3 SD27			高台径 7.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	灰白 N 8/	1/4	K90
52	008-03	灰釉陶器 皿	f 2 SD27			高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	灰白 7.5Y 7/1	1/3	K90
53	008-05	灰釉陶器 椀	f 2 SD27			高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	灰白 5Y 7/1 黄灰 2.5Y 5/1	完存	K90 内外面煤付着
54	006-02	灰釉陶器 皿	f 3 SD27	13.5	2.6	高台径 6.5	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 8/1 にぶい黄橙 10YR 6/3	1/3	K90
55	006-01	灰釉陶器 椀	f 2 SD27	17.5			ロクロナデ	やや密（～3.0㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 8/1	1/3	O53
56	006-03	灰釉陶器 椀	e 3 SD27	15.5	5.0	高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや粗（～0.5㎜砂粒含）	並	灰黄 2.5Y 7/2	1/10	K90
57	006-04	灰釉陶器 椀	e4 d5 SD27	15.0	4.65	高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	台部 1/2	K90
58	008-07	灰釉陶器 椀	f 2 SD27	13.5	4.8	高台径 7.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～3.0㎜砂粒含）	並	黄灰 2.5Y 6/1 黄灰 2.5Y 4/1	台部 完存	O53 内外面煤付着
59	007-04	灰釉陶器 椀	e 3 SD27			高台径 9.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～3.0㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 8/1	1/2	O53 赤色顔料付着
60	007-05	灰釉陶器 椀	e 4 SD27			高台径 7.5	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/1	1/5	O53
61	008-02	灰釉陶器 椀	e 5 SD27			高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 8/1	1/2	K90
62	006-06	灰釉陶器 椀	f 3 SD27			高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 7/1	1/2	K90
63	006-05	灰釉陶器 椀	e 3 SD27			高台径 7.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	黄灰 2.5Y 6/1	1/4	K90
64	008-01	灰釉陶器 椀	f 2 SD27			高台径 7.5	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	灰白 7.5Y 7/1	1/2	O53
65	008-06	灰釉陶器 椀	f 2 SD27			高台径 8.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り	やや密（～5.0㎜小石含）	並	灰白 5Y 7/1	完存	O53
66	005-01	須恵器 双耳壺	e 7 SD27					密（微砂粒含）	良	外：灰 5Y 5/1 内：黄灰 2.5Y 5/1		耳の部分のみ

第８表　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物観察表３

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
67	007-01	灰釉陶器 長頸壺	b6 c5 SD27			高台径 12.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	灰白 5Y 8/1 オリーブ灰 10Y 6/2	1/8	K90
68	018-03	土師器 甕	e4 SD27	13.0			ナデ	粗（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい褐 7.5YR 6/3	1/3	
69	018-04	土師器 甕	e3 SD27	14.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	1/4	ハケメ 4～5本／cm
70	019-03	土師器 甕	e3 SD27	18.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	浅黄橙 7.5YR 8/4	1/4	
71	020-03	土師器 甕	f3 SD27	16.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/2	1/7	
72	020-02	土師器 甕	f3 SD27	19.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～1.5㎜砂粒含）	並	浅黄橙 10YR 8/3	1/4	ハケメ 3本／cm
73	019-02	土師器 甕	e4 SD27	21.0			ハケメ・ナデ	粗（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/6	
74	020-01	土師器 甕	f3 SD27	19.5			ハケメ・ナデ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	1/6	内面煤付着
75	019-01	土師器 甕	e3 SD27	23.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～1.0㎜小石含）	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	1/6	
76	001-01	須恵器 甕	e4 SD27			底径 16.4	タタキ後ナデ・ロクロナデ	やや密（～4.0㎜砂粒含）	良	外：灰白 N 7/ 内：灰白 5Y 7/1	3/5	
77	021-01	木製品	b6 SD27			残存長 15.8						
78	036-02	須恵器 杯	e5 SD42	14.2	3.2	高台径 10.6	ロクロナデ・貼付ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	青灰 5B 6/1	高台 1/4	
79	036-03	土師器 壺	f5 SD42	11.6			ハケメ	やや粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 6/4	1/3	磨滅激しい
80	036-04	土師器 甕	g2 SD42	13.6			ナデ・ケズリ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：にぶい黄橙 10YR 7/4	1/4	
81	035-05	土師器 台付甕	e5 f4 SD42	15.4			ハケメ・ナデ	やや密（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/6	S字甕B類
82	036-01	須恵器 杯身	d6 SD42	11.3		受部径 14.0	ロクロケズリ・ロクロナデ	やや粗（～2.5㎜砂粒含）	良	灰 N 6/ 5/		
83	041-02	土師器 杯	g2 SK28	13.2	2.7		ヘラミガキ後ナデ	やや粗	並	外：にぶい橙 5YR 6/4 内：にぶい褐 7.5YR 6/3	1/4	内面煤付着
84	041-03	土師器 皿	g2 SK28	17.0	1.9		ナデ・オサエ	やや粗	並	にぶい橙 5YR 7/4	1/5	
85	041-01	土師器 椀	h3 SK28	15.3			ミガキ	やや粗	並	外：にぶい橙 5YR 7/4 内：橙 5YR 7/6		内面暗文有り 内面煤付着
86	040-04	土師器 椀	g2 SK28	17.4	6.5	高台径 10.6	ナデ・貼付ナデ	やや密	並	外：橙 内：にぶい褐 7.5YR 7/4	1/10	外面煤付着
87	023-03	土師器 甕	h3 SK28	13.5	10.0		ハケメ・ケズリ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 6/3	1/2	
88	023-05	土師器 杯	b17 SK4	13.0	2.8		ナデ・ミガキ	やや密	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	1/2	

第９表　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物観察表４

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
89	023-04	土師器 皿	b 1 7 SK 4	12.0 ～13.0	4.0		ナデ・ミガキ？	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：黒 2.5Y 2/1	完存	内面煤付着
90	023-01	灰釉陶器 長頸壺	b 1 7 SK 4			高台径 7.0	ロクロナデ・貼付ナデ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	灰白 N 8/ オリーブ灰 2.5GY 5/1	高台完存	
91	022-03	黒色土器 椀	h 2 SK 9			高台径 7.0	ミガキ・ナデ・貼付ナデ	やや密	並	外：褐灰 10YR 4/1 内：暗灰 N 3/	1/3	
92	003-02	土師器 杯	b 1 6 SK 1	13.2	2.7		ナデ	やや密	並	橙 5YR 6/6	1/4	
93	003-01	土師器 杯	b 1 6 SK 1	14.8	3.3		ナデ・オサエ	やや密	並	橙 5YR 6/6	1/4	
94	003-05	土師器 甕	b 1 6 SK 1	19.0			ハケメ・ケズリ	やや密	並	にぶい黄橙 7.5YR 7/4	1/2	内外面煤付着
95	041-05	土師器 小皿	i 7 SB 5 8	10.2	2.4		ナデ	やや密	並	外：淡赤橙 2.5YR 7/4 内：灰 5Y 5/1	1/4	
96	031-02	灰釉陶器 椀	h 8 SB 5 8	14.0			ロクロナデ・ロクロケズリ	密	並	灰白 N 7/	1/10	
97	031-03	黒色土器 椀	g 7 SB 5 8			高台径 7.0	ロクロナデ・ミガキ・貼付ナデ	やや密	並	外：浅黄橙 7.5YR 8/4 内：暗灰 N 3/	3/4	
98	030-02	製塩土器	i 8 SB 5 8	13.2	5.1	底径 13.2	オサエ・ナデ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 5YR 6/4	1/10	
99	039-01	灰釉陶器 鉢	i 6 SB 5 8			高台径 14.1	ロクロケズリ・ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	灰白 5Y 7/1	1/2	
100	031-01	須恵器 鉢	i 6 SB 5 8				ロクロナデ	密	並	灰白 N 7/		篠窯須恵器の影響か？
101	015-01	土師器 ミニチュア甑	h 8 SB 5 9	7.8	7.0		オサエ後ナデ	密	並	灰白 10YR 8/2	1/8	ミニチュア甑
102	030-03	土師器 高杯	i 6 SB 5 9	15.0	14.0	台径 11.6	ナデ・ハケメ・ミガキ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/2	
103	039-03	灰釉陶器 椀	i 8 SB 6 0	16.0			ロクロナデ	密	良	灰白 5Y 7/1 灰オリーブ 5Y 6/2	1/5	重ね焼痕有り
104	039-02	須恵器 杯蓋	f 6 SB 4 4	13.8			ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密	並	灰 N 4/ 灰白 N 7/	完存	
105	039-04	須恵器 杯身	e 6 SB 4 4	13.0		受部径 15.0	ロクロナデ	やや密	並	灰白 N 7/	小片	
106	003-06	土師器 高杯	i 6 pit 10	15.8			ナデ・ケズリ？	やや密（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/8	磨滅激しい
107	030-01	土師器 台付甕	i 6 pit 10	13.4			ハケメ・オサエ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/2	1/4	S字甕D類
108	040-05	土師器 台付甕	f 8 pit 5			底径 8.0	ハケメ・オサエ	やや密	並	外：にぶい橙 5YR 6/4 内：褐灰 7.5YR 4/1	1/2	
109	041-04	土師器 杯	f 6 pit 4	13.0	2.8			やや密	並	橙 5YR 6/8	1/5	磨滅激しい
110	003-04	土師器 皿	g 4 pit 2	14.0	1.9		オサエ後ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/4	磨滅激しい

第10表　神戸遺跡（A地区）出土遺物観察表５

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
111	003-03	土師器 皿	e 2 pit 2	14.6	2.5		オサエ後ナデ	密	並	橙 2.5YR 6/3	1/2	外面煤付着
112	040-03	土師器 甕	g 4 pit 2	15.2			ハケメ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 5YR 7/4	1/3	
113	040-01	土師器 甕	b 1 8 pit 13	16.5			ハケメ・ナデ・ケズリ	やや密	並	外：褐灰 10YR 4/1 内：灰黄褐 10YR 4/2	1/4	外面煤付着
114	002-01	石鏃	h 2 包含層	長さ 3.77	幅 2.39	厚さ 0.38						下呂石 重さ 2.7g
115	014-02	砥石	排土	長さ 20.8	幅 ～4.6	厚さ 2.2						
116	014-01	敲石	表土	長さ 10.3	幅 8.5	厚さ ～4.6						
117	014-03	土製品	b 2 包含層					粗（～2.0㎜砂粒含）	並	褐灰 10YR 4/1 灰白 2.5Y 7/1		
118	033-05	土師器 小形丸底壺	i 6 包含層				ナデ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/2		
119	033-04	土師器 小形丸底壺	包含層	9.5	8.4		ナデ	やや密	並	灰黄 2.5Y 7/2	小片	
120	033-02	土師器 小形丸底壺	h 7 包含層	10.5	6.8		ナデ	やや密（～3.0㎜砂粒含）	良	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	1/4	
121	033-01	土師器 小形丸底壺	j 4 包含層	10.9	7.9		ナデ・ケズリ・オサエ	やや密（～2.5㎜砂粒含）	良	外：灰白 2.5Y 7/1 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	3/4	赤い斑点有り
122	033-03	土師器 小形丸底壺	g 4 包含層	9.5	8.4		ナデ	やや密	良	外：橙 7.5YR 6/6 内：褐灰 10YR 4/1	小片	
123	013-02	土師器 高杯	g 3 包含層	11.0			ケズリ・ナデ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	橙 2.5YR 6/6	1/4	
124	028-03	土師器 甕	g 9 包含層	13.0		頸部径 11.0	ハケメ・ナデ・オサエ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	頸部 1/5	
125	028-01	土師器 台付甕	g 7 包含層	13.0			ハケメ・ナデ	粗（～3.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/4	
126	027-01	土師器 台付甕	j 6 包含層	14.0			ハケメ・ナデ・オサエ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/2	外面煤付着
127	011-03	土師器 鉢	c 4 包含層	13.0	5.0	底径 4.9	ナデ・オサエ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	外：灰白 2.5Y 7/1 内：浅黄橙 10YR 8/3	ほぼ完存	
128	013-01	土師器 壺	d 2 包含層	12.0	17.6		ハケメ・ナデ	粗（～5.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/2	1/4	磨滅激しい
129	037-01	土師器 壺	j 4 包含層	16.6	29.4	底径 5.8	ミガキ・ハケメ・ナデ・刺突文・竹管文・櫛描横線文・オサエ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	外：橙 5YR 7/6 内：灰白 7.5YR 8/2	1/3	外面一部黒斑
130	038-01	土師器 壺	j 4 包含層	22.0	37.6	底径 9.5	ミガキ・ハケメ・ナデ・刺突文・櫛描横線文	やや粗（～4.0㎜砂粒含）	並	外：にぶい黄橙 10YR 7/2 内：灰 5Y 6/1	完存	
131	026-03	須恵器 杯蓋	d 6 包含層	14.0	5.3	つまみ径 3.2	ロクロケズリ・ロクロナデ・貼付ナデ	やや密	並	外：灰赤 2.5YR 5/2 内：灰 N 6/	完存	
132	026-05	須恵器 杯蓋	i 7 包含層	10.8	4.0		ロクロナデ・ヘラ切り未調整	やや密（～2.5㎜砂粒含）	並	灰 N 6/	完存	

第11表　神戸遺跡（A地区）出土遺物観察表6

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
133	026-04	須恵器 杯蓋	j 6 包含層	12.0	4.0		ロクロナデ・ ヘラ切り後未調整	やや粗（～2.0 ㎜砂粒含）	並	外：灰 N 6/ 内：灰 N 5/	1/4	
134	025-04	須恵器 杯身	g 9 包含層	12.5		受部径 15.0	ロクロナデ	やや密	並	灰白 N 7/ 灰白 N 6/	完存	自然釉
135	025-05	須恵器 杯身	g 9 包含層	12.5	4.1		ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密（微砂粒含）	並	灰白 N 7/ 灰 N 6/	小片	
136	025-06	須恵器 高杯	g 9 包含層			底径 11.0	ロクロナデ	やや密	良	灰白 N 7/ 灰 N 5/	1/7	
137	016-03	土師器 杯	f 6 包含層	13.0			ミガキ・ナデ	やや密（～1.5 ㎜砂粒含）	並	橙 5YR 7/6 にぶい黄橙 10YR 7/4	1/3	内面底部ヘラ描き
138	016-02	土師器 杯	f 6 包含層	13.1	3.2		ナデ・オサエ	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	橙 5YR 7/6	4/5	
139	017-03	土師器 杯	j 7 包含層	13.1	2.9		ナデ・オサエ	やや粗（～1.5 ㎜砂粒含）	並	浅黄橙 7.5YR 8/4 橙 5YR 7/6	2/3	磨滅激しい
140	016-04	土師器 杯	f 6 包含層	16.0	4.2		ナデ	やや粗（～1.5 ㎜砂粒含）	並	橙 5YR 6/8 橙 7.5YR 7/6	1/3	磨滅激しい
141	017-02	土師器 杯	g 2 包含層	15.2	3.0		ナデ・オサエ・ミガキ	やや粗（～2.0 ㎜砂粒含）	並	外：にぶい黄灰 10YR 7/4 内：灰白 10YR 8/1	2/3	
142	017-01	土師器 皿	b 7 包含層	20.4	2.8		ナデ・オサエ	やや粗（～1.0 ㎜砂粒含）	並	橙 7.5YR 7/6 にぶい橙 10YR 7/2		内面底部暗文
143	012-03	黒色土器 椀	d 5 包含層	16.7			ミガキ・ナデ	やや密	並	外：灰白 10YR 8/2 内：黒 N 2/	5/8	
144	012-02	黒色土器 椀	b 7 包含層	15.8	5.4		ミガキ・ナデ・貼付ナデ	やや密（～1.0 ㎜砂粒含）	並	外：浅黄橙 7.5YR 8/4 内：暗灰 N 3/	小片	
145	011-02	ロクロ 土師器 椀	包含層	17.3	5.6		オサエ・貼付ナデ・ ロクロナデ	やや密	並	外：橙 5YR 7/6 内：浅黄橙 7.5YR 8/4	1/4	口縁部歪み大
146	032-03	土師器 鉢	h 9 包含層	23.0			ケズリ・ナデ	やや密	並	橙 5YR 7/6 灰褐 7.5YR 6/2	1/5	
147	015-04	土錘	i 8 包含層	長さ 2.7	最大径 0.8							重さ1.58g
148	015-05	土錘	d 5 包含層	長さ 3.6	最大径 1.0							重さ3.13g
149	015-02	土錘	e 2 包含層	長さ 4.6	最大径 1.3							重さ5.71g
150	015-03	土錘	i 8 包含層	長さ 4.3	最大径 1.1							重さ4.30g
151	026-01 026-02	灰釉陶器 長頸壺	b 3 0 包含層				ロクロナデ・タタキ	やや密（～2.0 ㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 7/1 灰白 5Y 7/		同一個体
152	025-02	須恵器 甕	表土	19.0			タタキ後カキメ・ナデ	やや密（～1.5 ㎜砂粒含）	並	灰白 5Y 7/1	1/8	
153	025-01	須恵器 甕	i 5 包含層	40.0			ロクロナデ・波状文	やや密	良	外：灰 N 5/ 内：灰 5Y 6/1	1/8	
154	025-03	須恵器 甕	g 3 包含層				ロクロナデ・波状文	やや粗	並			

第12表　神戸遺跡（A地区）出土遺物観察表７

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm）			調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	その他						
155	027-03	土師器 甕	表土	14.0			ハケメ・ナデ	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	1/4	
156	027-02	土師器 甕	g 9 包含層	16.0			ハケメ・ナデ	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/8	
157	029-01	土師器 甕	包含層	14.0			ハケメ・ケズリ・ナデ	粗（～2.0㎜砂粒含）	並	浅黄橙 10YR 8/3	1/4	内面煤付着
158	011-01	土師器 鍋	j 6 包含層	25.0			ハケメ・ナデ・貼付ナデ	やや粗（～1.0㎜砂粒含）	並	にぶい橙 7.5YR 7/4 褐灰 7.5YR 4/1	1/4	
159	012-01	土師器 甕	j 6 包含層	32.6			ハケメ・ナデ・ケズリ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 10YR 8/2	1/6	
160	028-02	土師器 甕	e 2 包含層	22.0			ハケメ・ナデ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	1/11	
161	016-01	清郷型鍋	f 2 包含層	25.3		体部径 24.0	オサエ・ナデ	やや粗（～2.5㎜砂粒含）	並	外：灰褐 7.5YR 5/2 内：にぶい黄橙 10YR 6/3	1/3	

第13表　神戸遺跡（Ａ地区）出土遺物観察表８

〔遺物観察表　凡例〕

遺物観察表については、以下のような方法で表記した。

番号：図版に対応する番号である。
登録番号：実測図作成番号である。
器種：陶器・土師器などの別と、器種（甕・壺・皿など）を記した。
出土位置、遺構：その遺物が出土した小地区、遺構名などを記した。
計測値：計測できる範囲で表記した。
胎土：密・やや密・やや粗・粗の４段階で表記した。
焼成：良・並・不良の３段階で表記した。
色調：『新版　標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編　９版　1989）を基準にしている。
残存度：特に示していないものについては、口縁部の残存状況を示す。数値で示せないものは「小片」とした。

※以下、本報告書に掲載した遺物観察表についても上述の凡例に準拠する。

Ⅳ　神戸遺跡（Ｂ地区）調査の成果

1　調査の方法

Ｂ地区の調査面積は400㎡である。掘削は表土については重機掘削を行った。それ以外は人力による掘削である。

今回の調査では、調査区内を４ｍ四方の枡目で区切ることによって、小地区を設定した。北から数字、西からアルファベットを付け、北西隅交点をその小地区の符号とした。なお、設定は国土座標とは無関係である。

調査区の平面図・土層断面図は1/20で作成した。

2　基本層序

調査区は標高約５ｍの沖積地に位置している。現状は水田である。調査区の基本層序は上から順に次のとおりである。

第１層　黒褐色土　　（耕作土）
第２層　灰黄褐色土　（旧耕作土）
第３層　にぶい黄褐色シルト
第４層　灰黄褐色砂質土
第５層　褐灰色砂質土（検出面）

3　遺構

検出した遺構は、溝と土坑である。主に古墳時代の遺構である。溝については12条検出したが、これらは、自然流路である可能性も考えられる。また、いくつかのピットがあり、掘立柱建物の存在も想定できるが、今回は明確にすることはできなかった。ここでは主な遺構について記述する。

土坑ＳＫ６　調査区のほぼ中央西壁際で検出した遺構である。調査区外に広がるため、全体の規模は不明であるが、短径約0.45ｍの不整楕円形であると思われる。検出面からの深さは約0.5ｍである。土坑内からは、台杯甕（６・９）・須恵器杯（16・17）が出土した。

溝ＳＤ８　調査区中央南部で検出した遺構である。幅約２～３ｍ、深さ約0.3～0.4ｍで、約９ｍにわたって検出した。断面はほぼ逆台形を呈する。二重口縁壺の口縁部（７）等が出土しており、古墳時代前半期頃に埋没したものと考えられる。

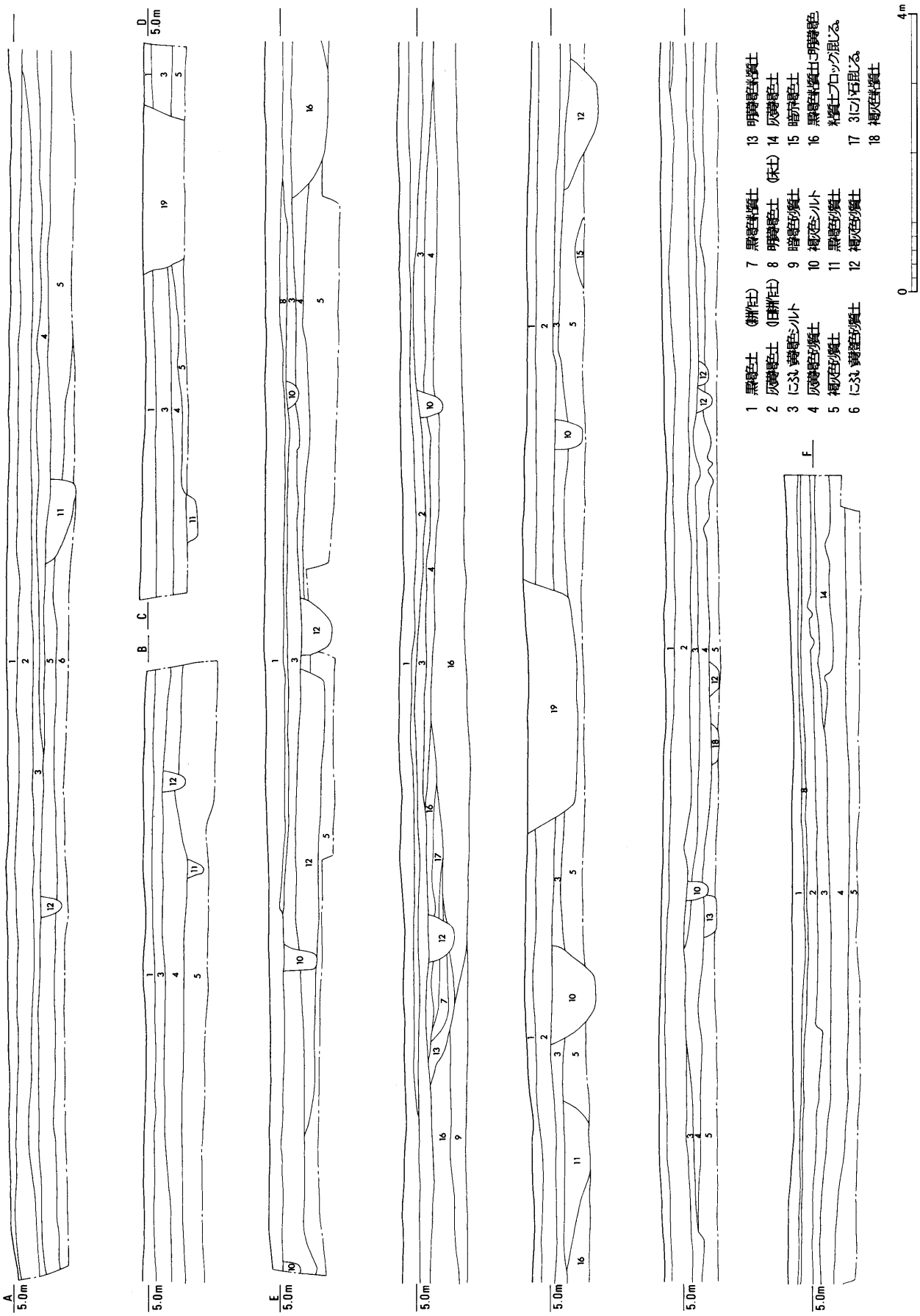
溝ＳＤ14　調査区中央北部で検出した遺構である。落ち込みＳＺ15を切っている。幅約１ｍ、検出面からの深さ約0.2ｍで、調査区内約５ｍにわたって検出した。埋土中からは、６世紀中頃の須恵器甕（20）・杯身（18）や５世紀中頃の台付甕（13）・土師器壺（14）等が出土している。時代の古い遺物については、掘削中にＳＺ15まで掘り抜いてしまい、混入した可能性がある。

落ち込みＳＺ15　調査区ほぼ中央で検出した遺構である。埋土の堆積状況や、遺構の立ち上がり方、平面形が不整形なこと等から、氾濫原であると考えられる。幅約14ｍ程度、深さは検出面から約0.3ｍで東西に流れる。

遺構番号	小地区	性　格	時　期	備　　考
ＳＤ１	a 24	溝	不明	遺物なし
ＳＤ２	b 28他	溝	古墳前期	Ｓ字甕片
ＳＤ３	b 10他	溝	古墳か？	土師器甕
ＳＤ４	b ７	溝	不明	土器小片あり，ＳＤ７より新
ＳＫ５	b 24他	土　坑	古墳前か	遺物少量，ＳＤ１・８より古
ＳＫ６	b 20	土　坑	古墳	Ｓ字Ｃ～Ｄ類，須恵器杯
ＳＤ７	b ７	溝	古墳	ＳＤ４より古
ＳＤ８	b 21他	溝	古墳	Ｓ字甕片，須恵器片，ＳＤ10より古
ＳＤ９	b 21	溝	古墳	Ｓ字甕片，ＳＤ８・10より新
ＳＤ10	b 21他	溝	不明	土師器片あり
ＳＤ11	b 27他	溝	不明	土師器片あり
ＳＫ12	b 20他	土　坑	古墳前期	Ｓ字甕片
ＳＤ13	b 12	溝	古墳	Ｓ字甕Ｄ類
ＳＤ14	b 13他	溝	古墳前期	Ｓ字甕Ｄ類，須恵器壺
ＳＺ15	a 15他	落ち込み		氾濫原か？
ＳＤ16	b 25	溝	不明	遺物なし

第14表　神戸遺跡（Ｂ地区）遺構一覧表

第19図　神戸遺跡（B地区）調査区平面図（1：200）



第20図　神戸遺跡（B地区）土層断面図（1：80）

4　遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で10箱程度である。以下、出土遺物の概略を記述する。詳細については観察表を参照されたい。

ＳＤ３出土遺物（19） 19は大形の土師器甕である。長胴形を呈するものと考えられる。磨滅が激しいため不明瞭であるが、体部外面はハケメ、内面はナデによって調整されているものと思われる。８世紀前半頃のものと思われる。

ＳＫ６出土遺物（６・９・16・17） ６・９はＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕と省略）である。６は器壁が薄く、外面のヨコハケが施されている一方、口縁部の形状に若干新しい要素を含んでいる。赤塚次郎氏による分類[①]（以下省略）のＣ類後半～Ｄ類にかけてのものと思われる。９は６と比較して器壁が厚い。

16・17は須恵器杯身・杯蓋である。どちらも外面のヘラケズリは殆ど省略されているが、器形的に見て、田辺昭三氏による陶邑編年[②]（以下、田辺編年）のＴＫ43型式に相当するものと思われる。

ＳＤ８出土遺物（７） ７は二重口縁壺の口縁部である。頸部が短く、丸く屈曲する。器形的に山陰からの影響が考えられるが、口縁端部の形など細部では違いも見られる。

ＳＤ14出土遺物（13・14・18・20） 13はＳ字甕の口縁部である。口縁端部が三角形状を呈し、器壁が厚い。Ｄ類の中でも新しいものであろう。

14は土師器の壺である。口縁端部上端に面をなす。内外面とも磨滅が激しいが、体部外面のハケメ・内面のナデが辛うじて観察できる。器壁は厚い。

18は須恵器杯身である。田辺編年のＴＫ10型式に相当するものであろう。

20は須恵器甕である。

ＳＺ15出土遺物（１・２・４・５・15） １は小形の壺である。磨滅が激しく調整は不明瞭であるが、おそらく内・外面ともオサエ後なでられていると思われる。

２は高杯の脚部である。外面が縦方向のヘラミガキで調整され、内面がなでられている。また、杯部内面にはハケメが観察できる。

４は壺の底部である。底部外面に木葉痕が付着している。

５はＳ字甕の口縁部である。端部が外に張り出し、器壁は比較的薄い。Ｃ類に相当するものであろう。

15は須恵器杯蓋である。田辺編年のＴＫ43型式に相当するものと思われる。

包含層出土遺物（３・８・10・11・12） ３は台付甕の脚台部である。器壁が厚く、開いて内弯する。脚裾部の折り返しも見られない。10～12はＳ字甕の口縁部である。器壁が厚く、ハケメも粗いが、口縁部には２単位のヨコナデが残る。これらは、Ｄ類後半頃に相当する。

８は二重口縁壺の口縁部である。内・外面ともなでられている。

5　小結

Ｂ地区と、平成10年度に調査を行った神戸遺跡の鳥井前地区[③]とは、農道を挟んで隣接している。それぞれで確認された遺構のうち、特に溝に注目してみる。流れの方向・調査区の位置（平成10年度調査では国土座標を使用していないため、おおよその位置関係である。）・出土遺物・層序などを考え合わせると、

ＳＤ２（鳥井前地区）＝ＳＤ14（Ｂ地区）
ＳＤ８（　〃　）＝ＳＤ８（　〃　）
ＳＤ15（　〃　）＝ＳＤ３（　〃　）

ではないかと考えられる。

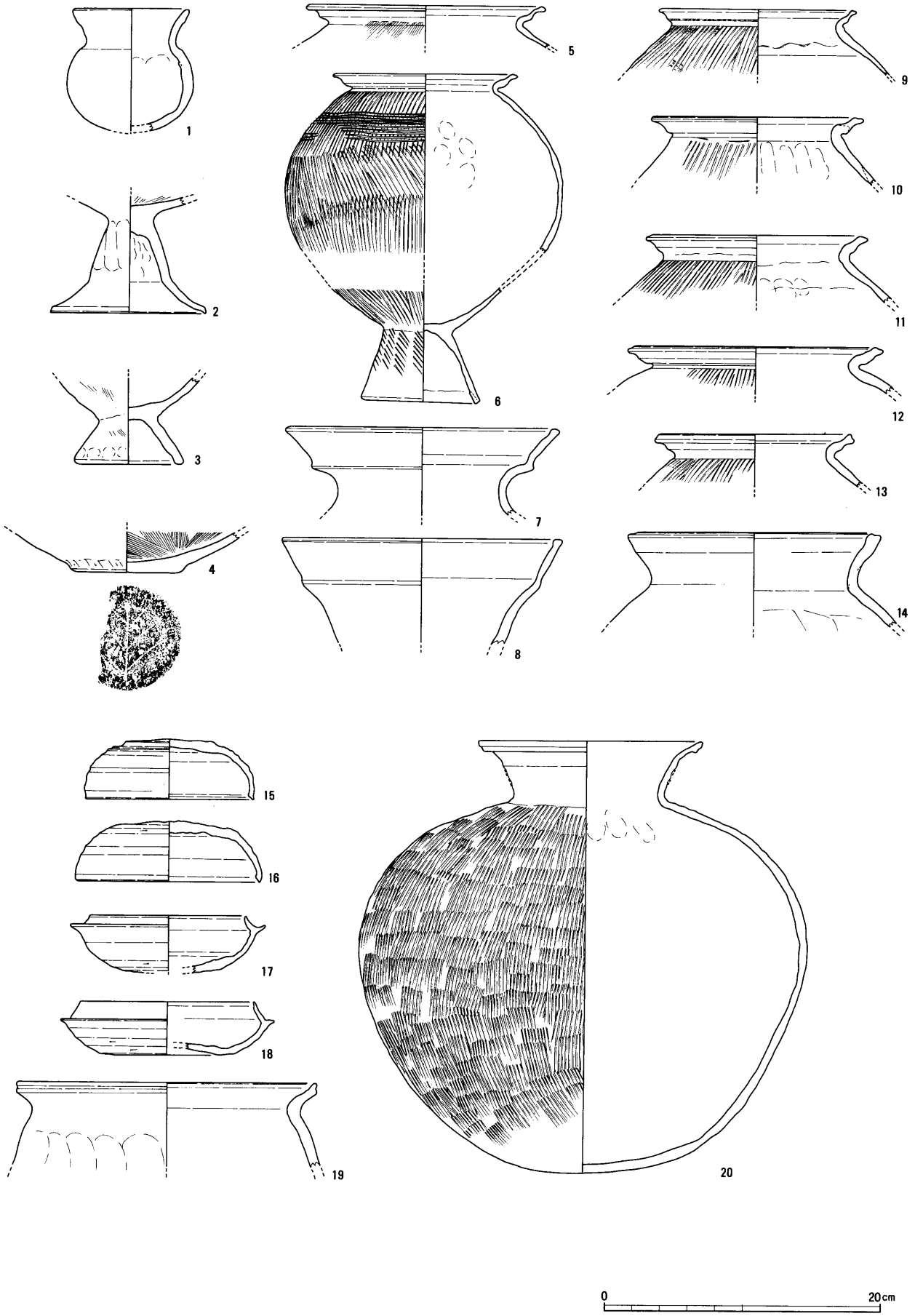
（柴山圭子）

［註・参考文献］

① 以下、Ｓ字状口縁台付甕の分類については、下記の文献による。
赤塚次郎「廻間式土器」「土器・土器群の形成」（『廻間遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター 1990年）

② 以下、陶邑編年については、下記の文献による。
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）

③ 中川　明『神戸遺跡発掘調査報告　－鳥井前地区－』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）



第21図　神戸遺跡（B地区）出土遺物実測図（1：4）

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	003-03	土師器 小形壺	b15 SZ15	8.5			ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/3	
2	003-07	土師器 高杯	b14 SZ15			底径 11.0	ナデ・ハケメ	やや粗（～3.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/10	
3	003-04	土師器 台付甕	b14 包含層			底径 8.0	ナデ・オサエ・ハケメ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	外：灰黄 2.5Y 6/2 内：灰白 5Y 8/1	完存	外面煤付着
4	003-02	土師器 壺	b16 SZ15			底径 8.0	ナデ・ケズリ・ハケメ	やや粗	並	外：にぶい橙 7.5YR 6/4 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	2/3	底部木葉痕有り・内面煤付
5	002-07	土師器 台付甕	b15 SZ15	17.0			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/2	1/4	
6	005-01 005-02	土師器 台付甕	b20 SK6	13.3		台径 約8.6	ハケメ・ナデ・オサエ	粗（～2㎜砂多、5.0㎜小石混）	並	体部：にぶい黄橙 10YR 6/3 台部：灰黄褐 10YR 6/2	口縁部 1/5	外面煤付着
7	003-01	土師器 壺	b21 SD8	19.5			ナデ	やや粗（～5.0㎜小石含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 6/4 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	2/3	ハケメ 6本／cm
8	002-01	土師器 壺	表土	20.0			ナデ	やや粗（～2.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	1/4	
9	004-02	土師器 台付甕	b20 SK6				ハケメ・ナデ	粗（～1.5㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 6/3		外面煤付着
10	002-04	土師器 台付甕	b14 包含層	15.0			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～2.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	1/5	ハケメ 3本／cm
11	002-05	土師器 台付甕	b12 包含層	16.0			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～4.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄 2.5Y 6/3	1/7	ハケメ 4本／cm
12	002-03	土師器 台付甕	b14 包含層	18.5			ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/4	
13	002-06	土師器 台付甕	b13 SD14	14.5			ハケメ・ナデ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/5	ハケメ 4本／cm
14	002-02	土師器 壺	b13 SD14	18.0			ナデ	やや粗（～2.5㎜砂粒含）	並	灰白 2.5Y 8/2	1/5	
15	003-05	須恵器 杯蓋	b14 SZ15	12.0	4.3		ロクロナデ・ナデ	やや密（～3.0㎜砂粒含）	並	灰 10Y 4/1	1/5	
16	004-03	須恵器 杯蓋	b20 SK6	13.5	4.4		ロクロナデ・ロクロケズリ（ワラの痕あり）	密（～3.0㎜砂粒含）	良	外：灰 7.5Y 4/1 内：灰 N 6/	1/6	灰かぶる
17	004-04	須恵器 杯身	b20 SK6	11.5	4.2		ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	灰 N 6/	1/6	
18	003-06	須恵器 杯身	b13 SD14	12.5	3.9		ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密（～2.0㎜砂粒含）	並	外：灰白 10Y 7/1 内：青灰 5B 6/1	1/4	
19	004-01	土師器 甕	b10 SD3	22.0			ナデ	粗（～2.5㎜砂粒含）	並	外：橙 2.5YR 6/6 内：にぶい黄橙 10YR 7/4		磨滅激しい
20	001-01	須恵器 甕	b13 SD14	16.6	31.4		タタキ・オサエ・ナデ	やや粗（～3.0㎜砂粒含）	並	灰白 10Y 7/1	1/8	内面磨滅のため調整不明

第15表　神戸遺跡（B地区）出土遺物観察表

Ⅴ　神戸遺跡（Ｃ地区）調査の成果

１　基本層序

Ｃ地区は、現況水田で、標高は、 5.6ｍ前後である。基本的層序を記述すると、次のようになる。

第１層　黒色粘質土　（耕作土）

第２層　黄褐色砂質土（床土）

第３層　褐灰色粘質土

第４層　暗灰色粘質土

第５層　にぶい黄橙色砂質土

第６層　青灰色砂質土

遺構は、第３層上面で検出した。遺構の詳細は後述するが、中世以降の溝などを確認した。

なお、第３層には古墳時代などの遺物が含まれていたため、下層確認調査を行ったが、中世以前の明確な遺構は確認できなかった。

２　遺構と遺物

検出した遺構は溝７条である。

以下遺構ごとに概述する。

（１）溝

ＳＤ３　調査区の南のｂ17地区を北東から南西に向けて緩やかに流れる。幅は約0.7ｍ、深さは約0.3ｍで、断面形状は浅いＵ字型の溝である。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は、土師器の杯片のみであり、鎌倉時代以降の遺物であろうと思われる。

ＳＤ４　調査区の中央から南寄りのｂ12地区を北東から南西に向けて緩やかに流れる。幅は約0.6ｍ、深さは約0.2ｍで、断面形状は浅いＵ字型の溝である。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は、山茶椀の小片のみであり、鎌倉時代から室町時代までのものであろうと思われる。

ＳＤ１　調査区の中央からやや南寄りのｂ11地区を東から西へ流れる。幅は約1.1ｍ、深さは約0.3ｍで断面形状は浅いＵ字型の溝である。埋土は褐灰色粘質土である。

ＳＤ２　調査区の南のｂ14地区を南西へ流れる。幅は約1.0ｍ、深さは約0.5ｍで、断面形状は浅いＵ字型の溝である。埋土は、灰色砂質土と褐灰色粘質土（鉄分の粒が多く混じる。）である。

ＳＤ５　調査区の南のｂ13地区を南西へ流れる。幅は約1.0ｍ、深さは約0.3ｍで、断面形状は逆台形の溝である。埋土は褐灰色粘質土である。

ＳＤ６　調査区の南のｂ17～ｂ19地区に至る南北に細長く続く溝で、幅は約0.2ｍ、深さは約0.1ｍであり、埋土は褐灰色粘質土である。耕作溝であると考えられる。

ＳＤ７　調査区の北のｂ５地区を北西へ流れる。幅は約1.3ｍ、深さは約0.4ｍで、断面形状は逆台形の溝である。埋土は灰色砂質土である。

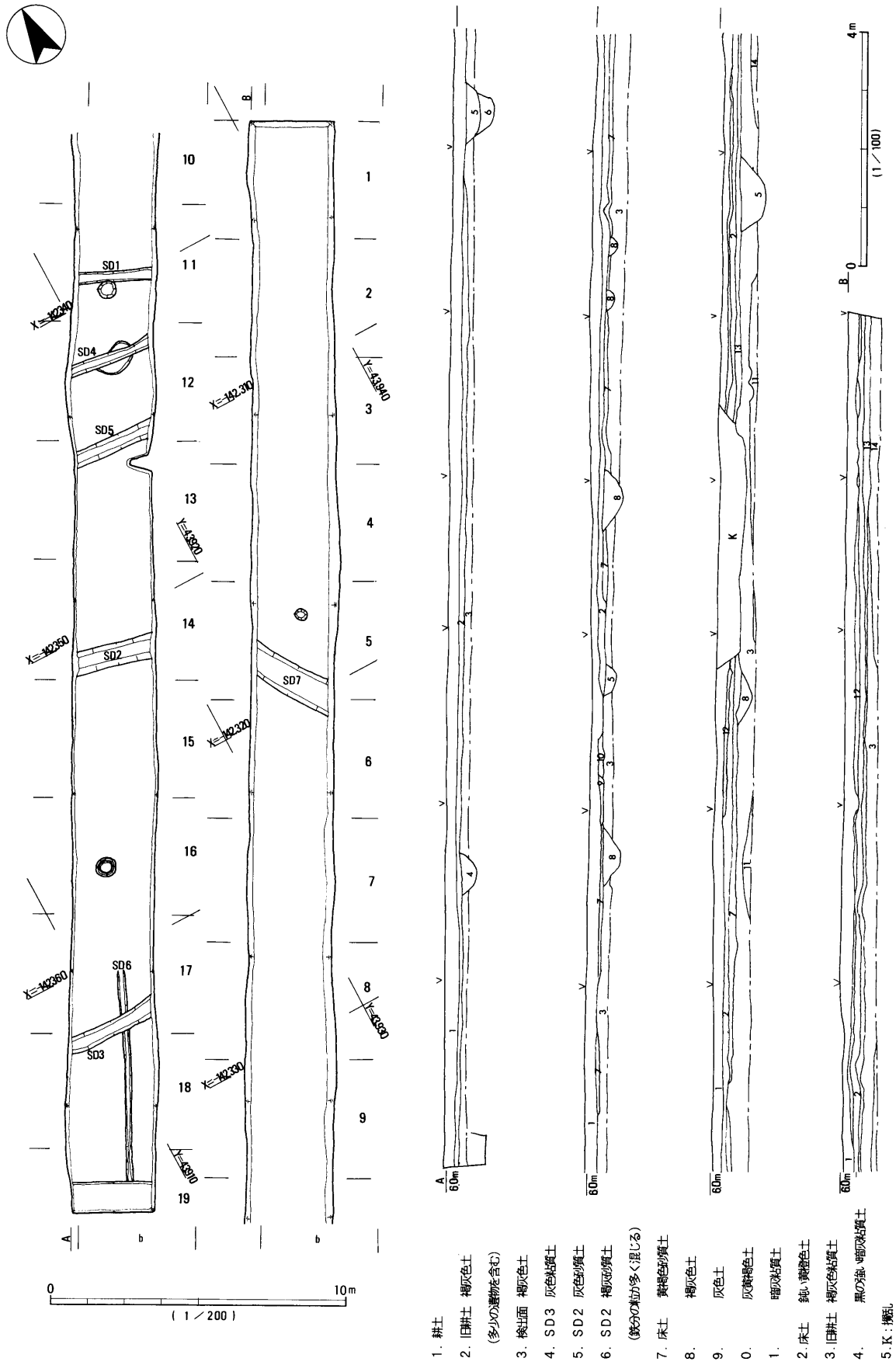
（２）遺物包含層等出土の遺物

遺物包含層等からは、古墳時代から中世までの遺物が出土した。

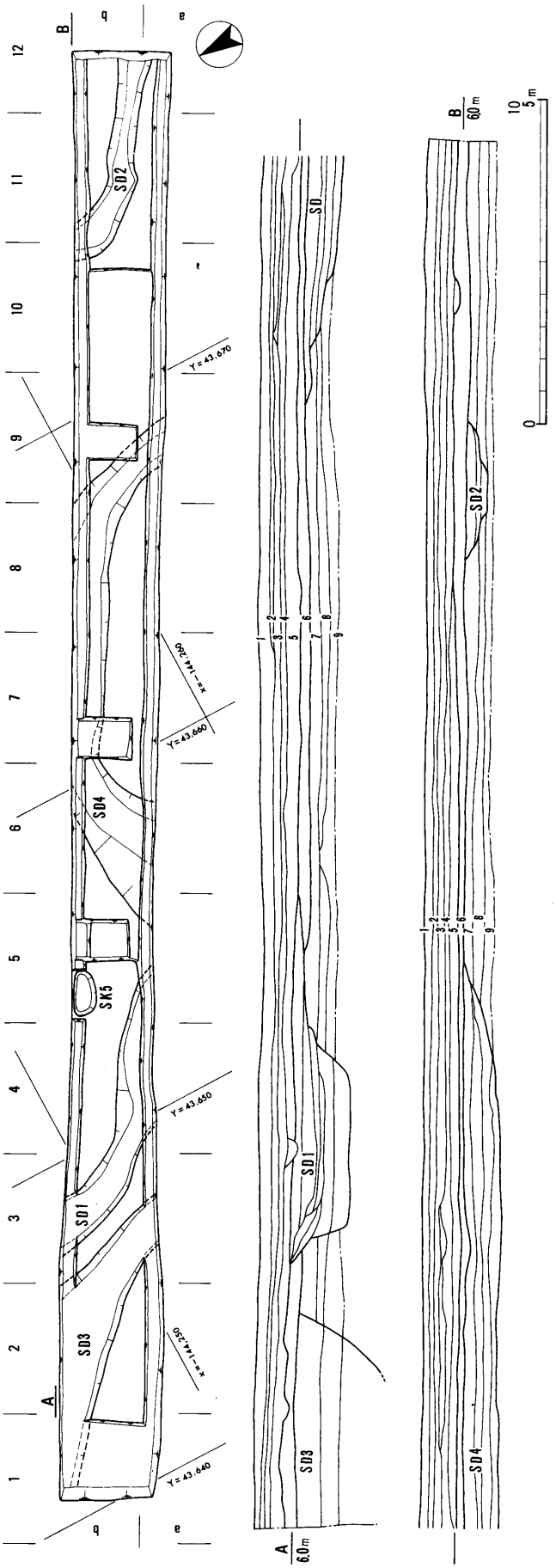
土師器（壺、鍋、甕、杯）、須恵器（壺、杯蓋、身）、製塩土器、山茶椀、青磁等であったが、いずれも細片で磨滅したものが多く図示することができなかった。

３　小結

Ｃ地区の遺物は、元々ここのものではなく、河川の氾濫等によって流れてきて堆積したものであると考える。　（筒井英俊）



第22図　神戸遺跡（C地区）調査区平面図（1：200）及び土層断面図（1：100）



第23図 替田遺跡(第３次)調査区平面図(１：200)
及び土層断面図（１：100)

Ⅵ　替田遺跡（第３次）調査の成果

１　土層

調査区の標高は6.4m前後である。基本的層序は、第１層；黒褐色土（耕土)、第２層；黄灰色土（床土)、第３層；褐灰色土（旧耕土)、第４層；灰黄褐色土(旧床土)、第５層；黒褐色粘質土、第６層；にぶい黄褐色土、第７層；褐灰色砂質土、第８層；灰色砂、第９層；灰色砂質土である。第10層以下は激しい湧水と調査区壁面の崩落のため図化することが出来ず、肉眼による土層観察のみ実施した。第10層は黄灰色微砂であり、さらにその下の第11層以下については、調査区西端から小地区ｂ４付近は木片を含む灰色砂層が、ｂ４～ｂ６付近までは暗灰色微砂、ｂ６～ｂ９付近までは灰色砂、暗灰色砂質土、ｂ９から東端までは微砂含みの灰色土、黄灰色微砂、濃灰色砂が堆積する。遺構検出は第７層上面で行ったが、検出面の標高は 5.6～5.9mである。また遺構検出面より下の第７層以下は砂質土や砂層であり、何度も氾濫を繰り返していた様子が窺えた。

２　遺構

（１）溝

溝はＳＤ１～４の４条を検出した。ＳＤ１は第６層上面から、ＳＤ２～４は第７層上面から、それぞれ切り込んでいる。時期は、いずれも弥生時代のもので、北から南に流れている。ＳＤ２・３は埋土が砂であり自然流路の可能性もある。各溝の規模等は一覧表の通りである。

（２）土坑

土坑はＳＫ５の１基のみ検出したが、遺物は出土しなかった。

遺構番号	小地区	性　格	時期	備　　考
ＳＤ　1	ｂ４他	溝	弥生	幅1.0m、深さ0.1 ～0.7m
ＳＤ　2	ｂ11他	溝	弥生	幅0.7 ～1.0m、深さ0.2m
ＳＤ　3	ｂ２他	溝	弥生	幅1.2 ～1.8m、深さ0.2m
ＳＤ　4	ｂ６他	溝	弥生	幅1.0 ～2.0m、深さ0.6m
ＳＫ　5	ｂ５他	土　坑	弥生	1.4 ×0.7m　楕円形

第16表　替田遺跡（第３次）遺構一覧表

3　遺物

出土遺物には弥生土器壺・甕と木製品がある。出土位置はＳＤ１・２・４、及び遺物包含層である。

遺構出土の遺物としては、ＳＤ１出土の壺（１）、甕（２）、ＳＤ２出土の壺（４）、甕（３）、ＳＤ４出土の壺（６・７）、甕（５）がある。

（８）～（25）は、暗灰色砂、暗灰色砂質土、灰色砂質土等の各層から出土したものである。

壺は、口縁部が広口のもの（８・９）と受口のもの（10・11）があり、また胴部は（12）のように頸が長く胴部が下方で張るものと、（14）のように算盤珠形に胴部最大径が大きくなるものがある。甕は刷毛による調整を基本としているが、口縁外面端部に刻目文を施すものもや、炭化物や煤が付着しているものもみられる。（25）は底部の器壁が厚いもので、内面には赤色顔料が付着していることから、他の甕とは異なった用途のものであると考えられる。なお、各遺物の詳細については、遺物観察表のとおりである。

櫂状木製品（26）

木製品（26）はＳＤ４出土である。櫂状の木製品で、先端部を欠損しているが残存長は107cmである。柄部は長さ47cmで、断面は径３～５cmの楕円形である。水掻部は肩が撫で肩になり、長さは60cm以上、幅11cm、厚さ1.5cmであるが、先端部では幅がやや狭くなり、厚さは２cmと厚くなる。

4　小結

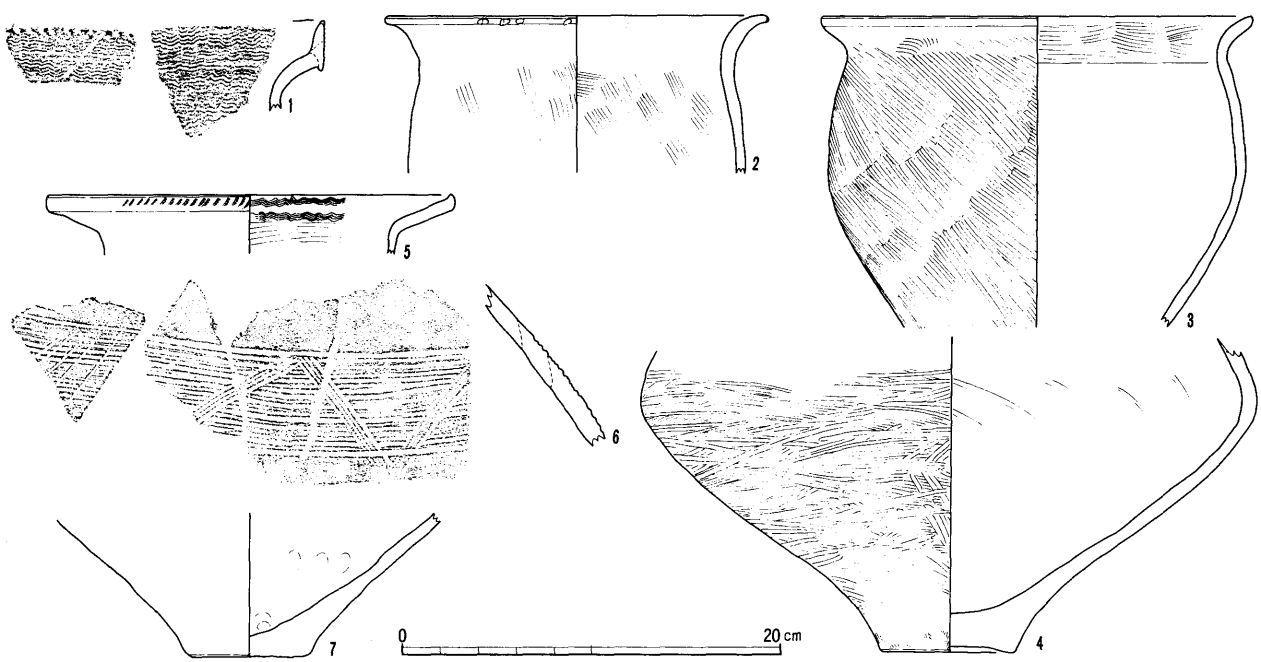
遺構及び遺物の時期は比較的揃っており、弥生時代中期前半を中心とするものである。替田遺跡の第１・２次調査①では当該期の竪穴住居や土坑墓が、また、弐ノ坪遺跡②では竪穴住居や土坑が検出されており、当時の集落は第１・２次調査区及び弐ノ坪遺跡周辺の微高地に形成されていたことが分かっている。今回の調査区では検出した遺構の殆どが溝であるが、地形的には集落から少し離れた低い場所に位置していることから、集落縁辺部に流れる溝であったと考えてよいであろう。　（河北秀実）

【註】

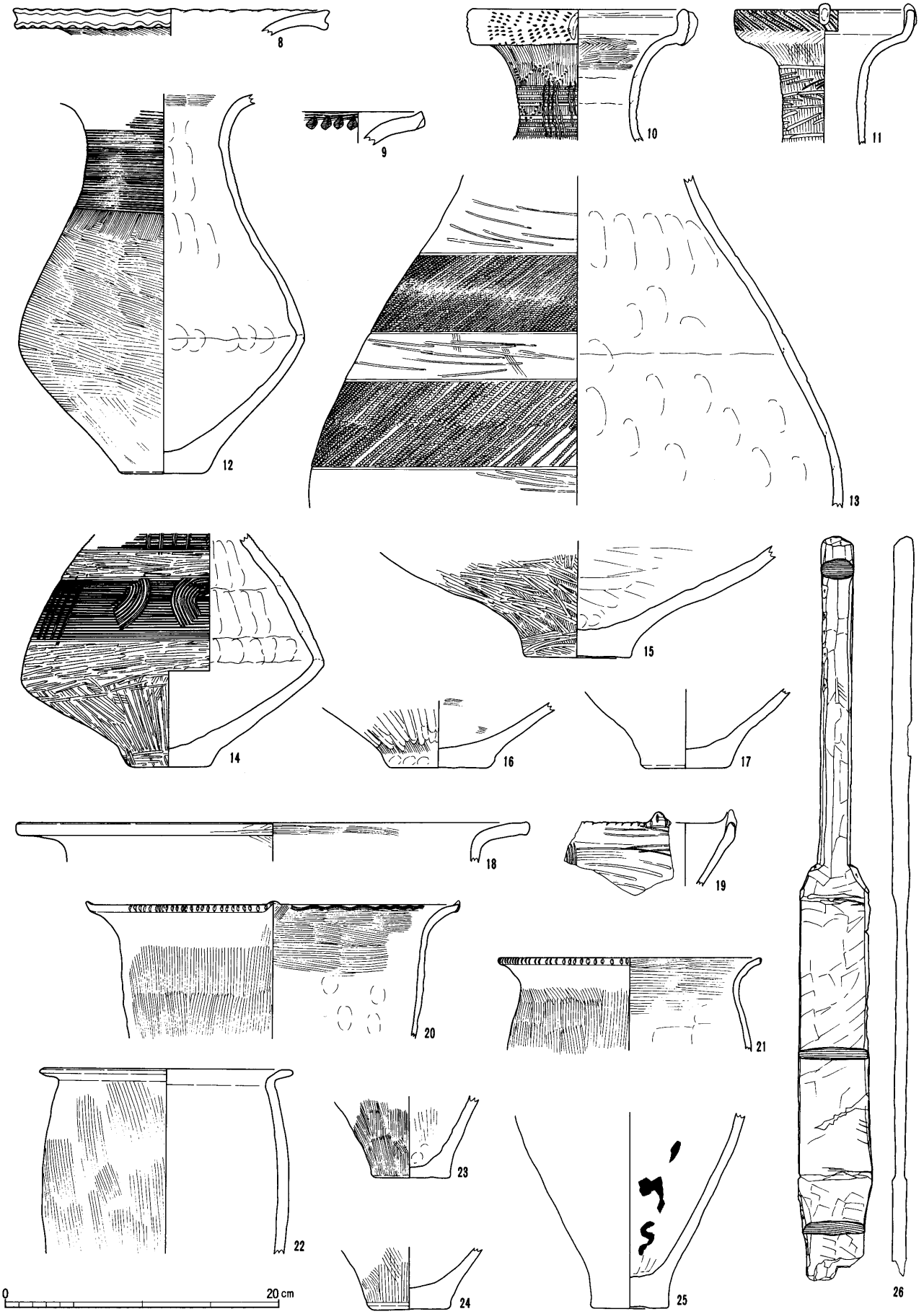
①ａ．池端清行・水橋公恵「Ⅵ．替田遺跡（第１次）」『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター　1997

ｂ．水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「Ⅱ．替田遺跡（第２次）」『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998

②池端清行・米山浩之・宮田勝功「Ⅲ．弐ノ坪遺跡」『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998



第24図　替田遺跡（第３次）出土遺物実測図１（１：４）



第25図　替田遺跡（第３次）出土遺物実測図２（１：４）

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	009-02	弥生土器 壺	b4 SD1				外面：櫛描波状文・刻目文・ナデ 内面：波状文	やや粗（1～2mm砂粒含）	並	外：灰褐 7.5YR 4/2 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部小片	外面口縁端面に煤付着
2	008-02	弥生土器 甕	b4 SD1	20			口縁部：ヨコナデ 外面：刻目文 ハケメ 内面：ハケメ	粗（2～5mm砂粒含）	並	外：灰白 2.5Y 7/1 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	上半部1/4	
3	011-01	弥生土器 甕	b11 SD2	22.6			口縁部：ヨコナデ 外面：ハケメ 内面：ハケメ・ナデ	やや粗（～2mm砂粒含）	並	外：にぶい黄橙 10YR 7/4 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	上半部1/3	外面に煤付着
4	011-02	弥生土器 壺	b11 SD2			7.0 底径	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ナデ・オサエ	粗（～4mm砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：にぶい橙 7.5YR 6/4	胴部下半1/4	
5	009-03	弥生土器 甕	b6 SD4	21.2			口縁部：ヨコナデ 外面：刻目文 内面：櫛描波状文・ハケメ	やや粗（1～2mm砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：褐灰 10YR 4/1	口縁部1/8	外面に煤付着
6	010-01	弥生土器 壺	b7 SD4				外面：櫛描横線文・鋸歯文・ミガキ 内面：ハケメ後オサエ	やや粗（1～3mm砂粒含）	並	外：橙 2.5YR 6/6 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	胴部小片	
7	008-01	弥生土器 壺	b6 SD4			6.0 底径	外面：調整不明 内面：ナデ・オサエ	粗（1～6mm砂粒含）	並	外：にぶい黄橙 10YR 7/2 内：黄灰 2.5YR 5/1	底部完存	
8	003-01	弥生土器 壺	b10 南排水トレンチ	23			口縁部：ヨコナデ 外面：ハケメ 押圧文	粗（～1mm砂粒含）	並	外内 にぶい黄橙 10YR 7/4	口縁部1/6	
9	008-04	弥生土器 壺	b9 包含層				口縁部：ヨコナデ 外面：櫛描横線文・刻目文	やや粗（1～2mm砂粒含）	並	外：にぶい黄橙 10YR 7/3 内：にぶい黄橙 10YR 6/2	口縁部小片	
10	003-03	弥生土器 壺	b9 暗灰色砂	16			外面：ハケメ・刺突文・櫛描横線文・浮文 内面：ハケメ・ナデ	粗（～2mm砂粒含）	並	外内 にぶい黄橙 10YR 7/2	口頸部1/2	
11	002-04	弥生土器 壺	b4 北排水トレンチ	13			外面：ハケメ・沈線・刻目文・浮文・縄文 内面：ナデ	粗（～4mm砂粒含）	並	外内 橙 5YR 6/6	口縁部1/5	
12	006-01	弥生土器 壺	b8 11層以下 暗灰色砂質土			6.1 底径	外面：ハケメ・二枚貝復縁による直線文 内面：ハケメ・オサエ・ナデ	粗（～3mm砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 5/2 内：にぶい黄橙 10YR 6/3	頸胴部完存	
13	001-01	弥生土器 壺	b9 11層以下 暗灰色砂				外面：沈線・縄文・ミガキ 内面：ナデ・オサエ	やや粗（1～2mm砂粒含）	並	外：にぶい黄橙 10YR 6/3 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	胴部上半1/2	
14	005-01	弥生土器 壺	b7 9層 灰色砂質土			6.2 底径	外面：沈線・ミガキ・櫛描横線文 疑似流水文 内面：オサエ・ナデ	やや粗（～5mm砂粒含）	並	外：黄灰 2.5Y 4/1 内：灰黄 2.5Y 7/2	胴部ほぼ完存	
15	002-01	弥生土器 壺	b11 南排水トレンチ			7.7 底径	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ナデ	粗（～3mm砂粒含）	並	外内 にぶい黄橙 10YR 6/3	下半部1/3	
16	004-02	弥生土器 壺	b9 11層以下 暗灰色砂			7.5 底径	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ハケメ後ナデ	粗（～5mm砂粒含）	並	外内 灰黄 2.5Y 6/2	底部完存	
17	008-03	弥生土器 壺	排土			6.7 底径	外面：調整不明 内面：ナデ	粗（1～3mm砂粒含）	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/3 内：にぶい黄橙 10YR 7/2	底部完存	
18	009-01	弥生土器 甕	b7 トレンチ	37			口縁部：ヨコナデ 外面：ハケメ 内面：ハケメ	やや粗（1～3mm砂粒含）	並	外内 黄灰 2.5Y 6/1	口縁部小片	口縁部内外面とも煤付着
19	010-02	弥生土器 甕	b10 遺物包含層				外面：刻目文・ハケメ・ミガキ 内面：ナデ	やや粗（1～3mm砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 5/2 内：にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部小片	
20	002-02	弥生土器 甕	b5 9層 灰色砂質土	27			外面：刻目文・ハケメ 内面：波状文・ハケメ・ナデ・オサエ	粗（～3mm砂粒含）	並	外内 灰黄褐 10YR 4/2	口縁部1/3	外面に煤付着
21	003-02	弥生土器 甕	e7 11層以下 暗灰砂質土	19			外面：刻目文・ハケメ 内面：ハケメ・ナデ	粗（～2mm砂粒含）	並	外内 にぶい橙 5YR 7/4	口縁部1/5	内外面とも炭化物付着
22	007-01	弥生土器 甕	b9 トレンチ	18.4			口縁部：ヨコナデ 外面：ハケメ 内面：工具ナデ	粗（1～3mm砂粒含）	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：黒褐 7.5YR 4/2	上半部1/4	外面煤付着
23	002-03	弥生土器 甕	b10 南排水トレンチ			5.8 底径	外面：ハケメ 内面：ハケメ後ナデ・オサエ	粗（～2mm砂粒含）	並	外内 にぶい黄褐 10YR 5/3	底部完存	内面に炭化物付着
24	007-02	弥生土器 甕	包含層			6.0 底径	外面：ハケメ 底部外面：ケズリ 内面：ナデ	粗（1～2mm砂粒含）	並	外内 にぶい黄橙 10YR 7/3	底部完存	
25	004-01	弥生土器 甕	b9 11層以下 暗灰色砂			5.7 底径	外面：調整不明 内面：ナデ	粗（～2mm砂粒含）	並	外内 灰黄褐 10YR 5/2	下半部1/3	内面に赤色顔料付着
26	木001	木製品 櫂状製品	b6 SD4	全長 107以上 柄部長47 柄部径（断面楕円形）3～5 水掻部長60以上 水掻部幅11 水掻部厚 1.5～2.0							先端部欠損	

第17表　替田遺跡（第３次）出土遺物観測表

付　替田遺跡（かん排）調査の成果

1　調査の方法

調査区は３つに分かれ、便宜上、北東から順にア地区・イ地区・ウ地区とした。調査面積は３地区で280㎡である。掘削は、表土については重機掘削を行った。それ以外は人力による掘削である。

調査区の平面図は1/100、土層断面図は1/20で作成した。

2　基本層序

調査区は標高約７ｍの自然堤防上に位置している。現状は水田である。調査区の基本層序は上から順に次のとおりである。

第１層　オリーブ黒色土　（表土）

第２層　灰オリーブ砂質土（包含層）

第３層　灰色砂質土　　（検出面）

表土上面から検出面までは約0.6ｍ程であるが、この深さまで掘り下げると湧水が見られた。

3　遺構と遺物

検出した遺構は、土坑とピットである。イ・ウ地区では、遺構は確認できなかった。

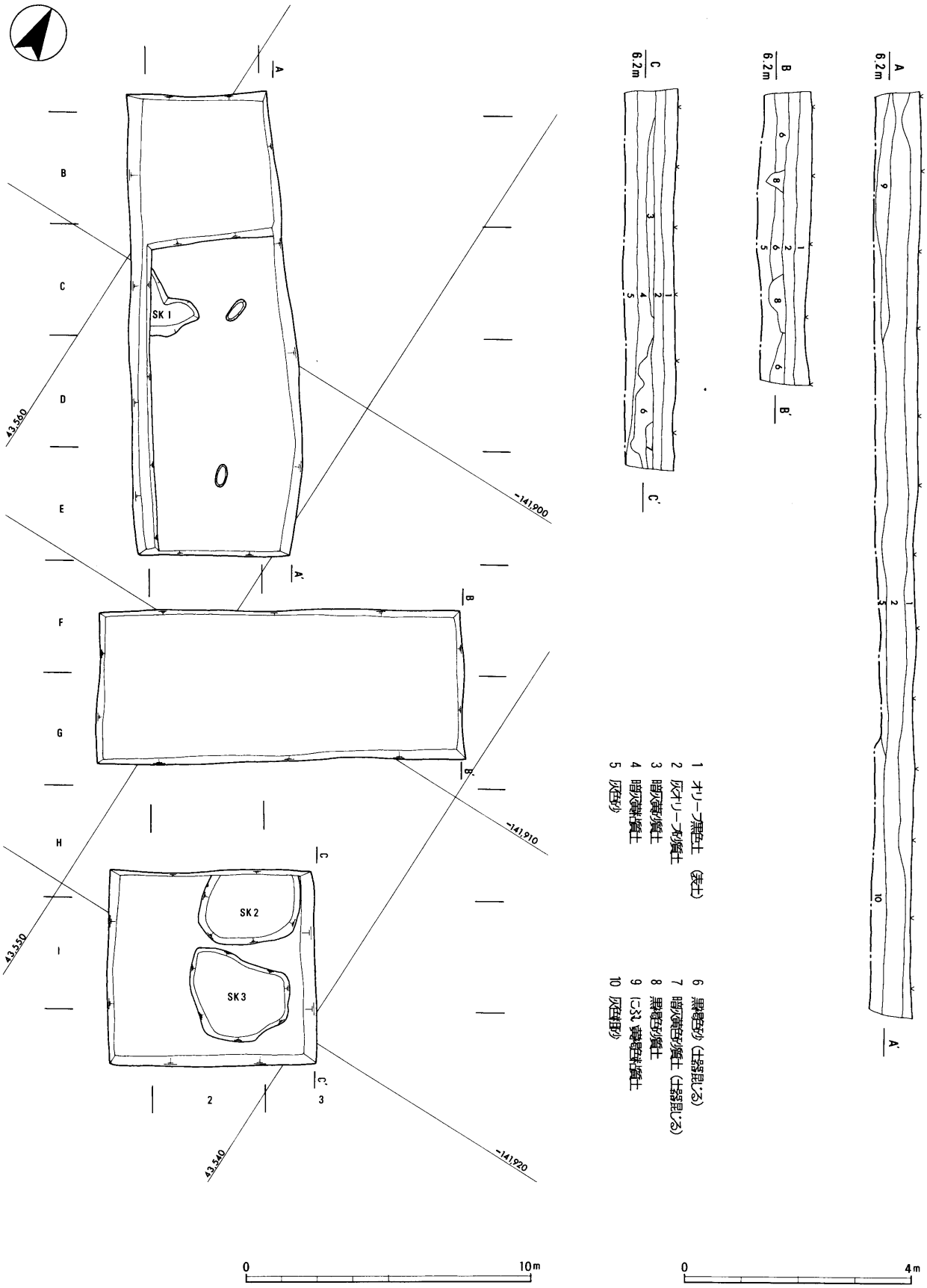
遺物の出土量は非常に少ない。平安末～鎌倉時代の遺物が主で、瓦器椀などが見られる。またウ地区では、円形の溜まり状であるＳＫ２・ＳＫ３から、杭・木片が少量出土した。

今回の出土遺物には、図示できるものはなかった。

（柴山圭子）

遺構番号	小地区	性格	時期	備考
ＳＫ１	Ｃ２	土坑	中世	深さ約10㎝程度
ＳＫ２	Ｉ２他			木片出土
ＳＫ３	Ｉ２他			木片出土

第18表　替田遺跡（かん排）遺構一覧表



第26図　替田遺跡（かん排）調査区平面図（1：200）及び土層断面図（1：100）

図版1　神戸遺跡（A地区）

調査前風景（北から）

調査区全景（北から）

図版2　神戸遺跡（A地区）

調査区全景（西から）

ＳＢ44（南から）

図版3　神戸遺跡（A地区）

ＳＢ46（西から）

掘立柱建物群（東から）

説明会風景

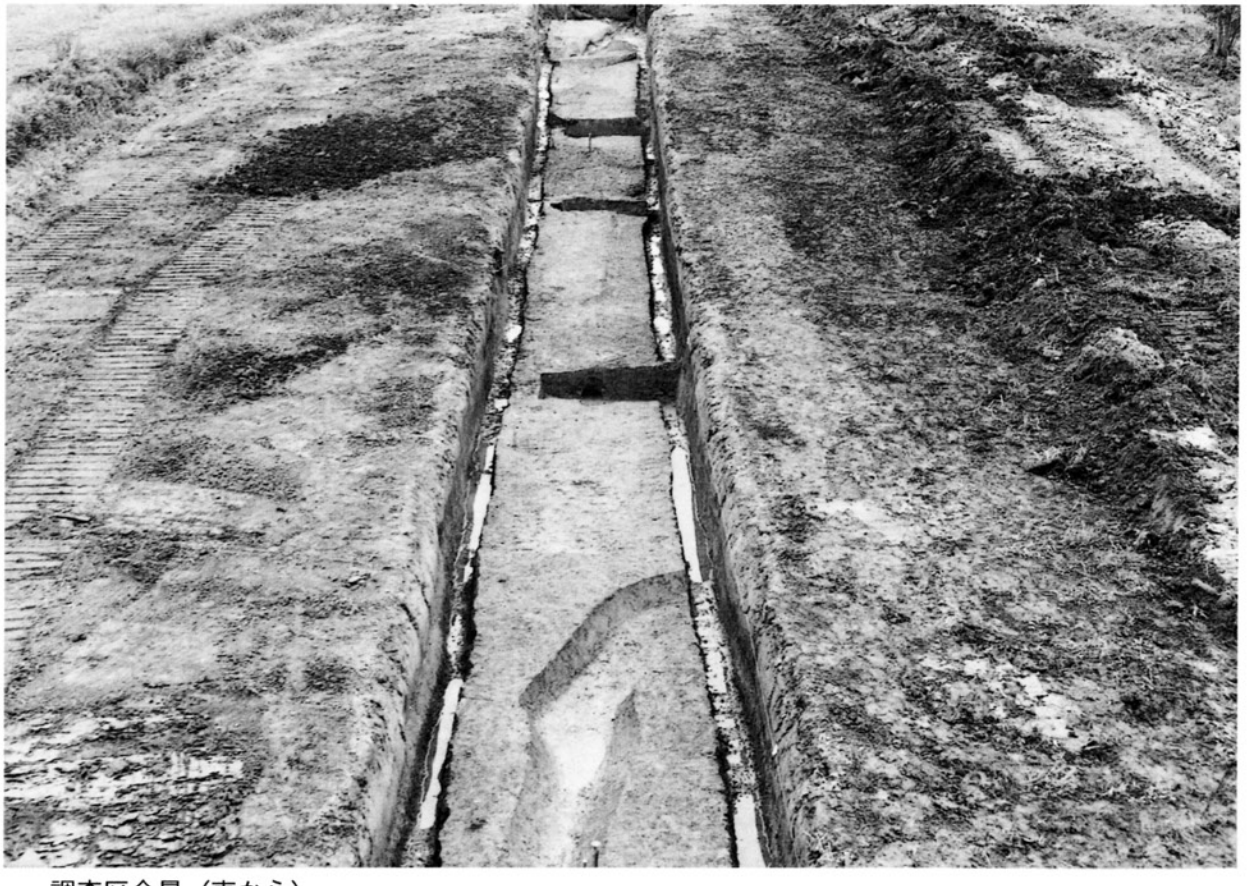
下層全景（東から）

図版5　神戸遺跡（B地区）

調査区全景（南から）

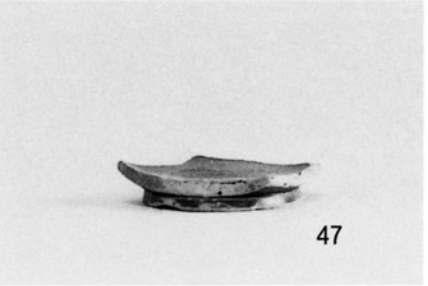
ＳＫ６（南から）

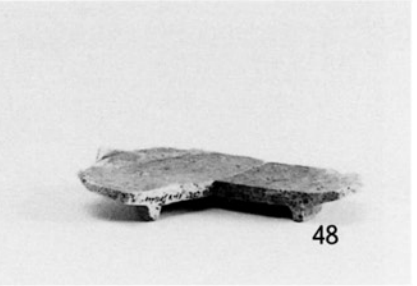
調査区全景（南から）

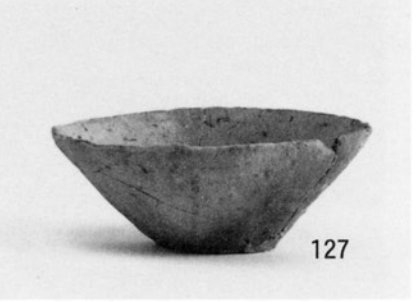


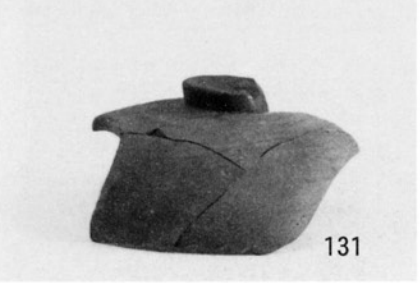
調査区全景（東から）

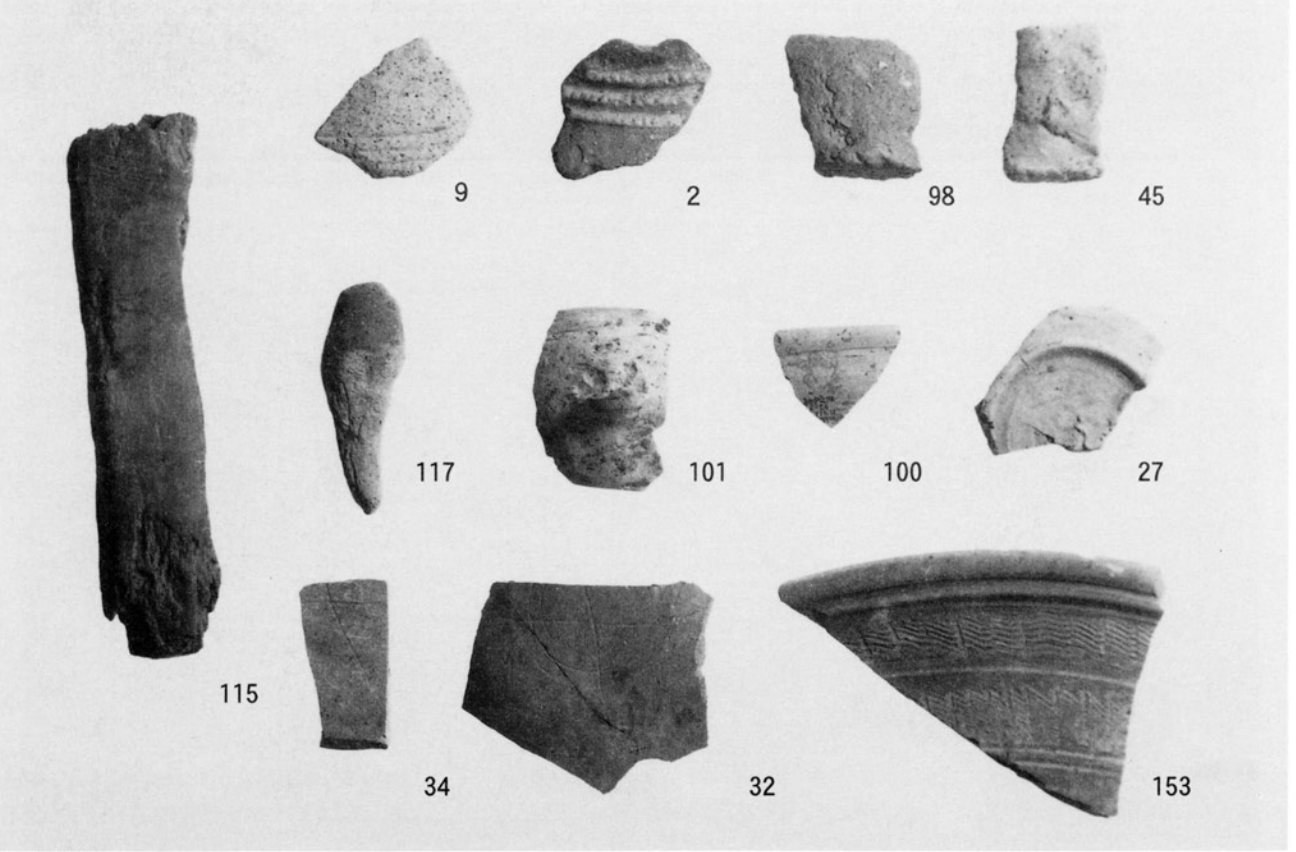
図版7　神戸遺跡（A地区）



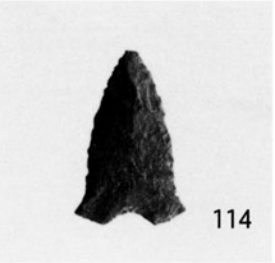


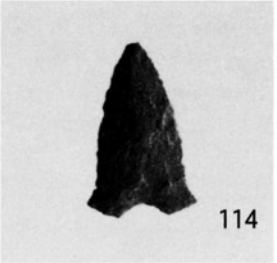


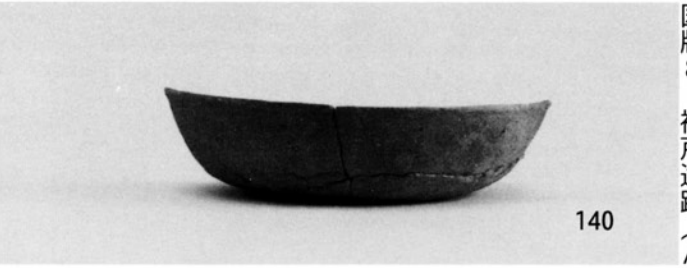


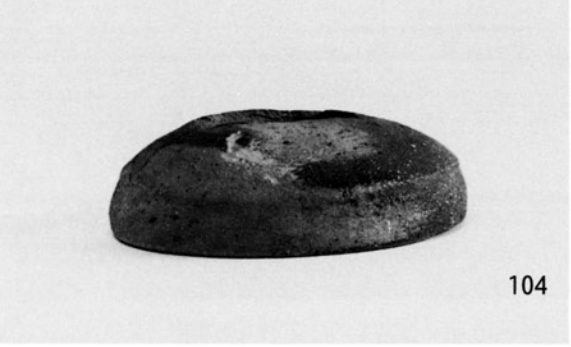


出土遺物1


114

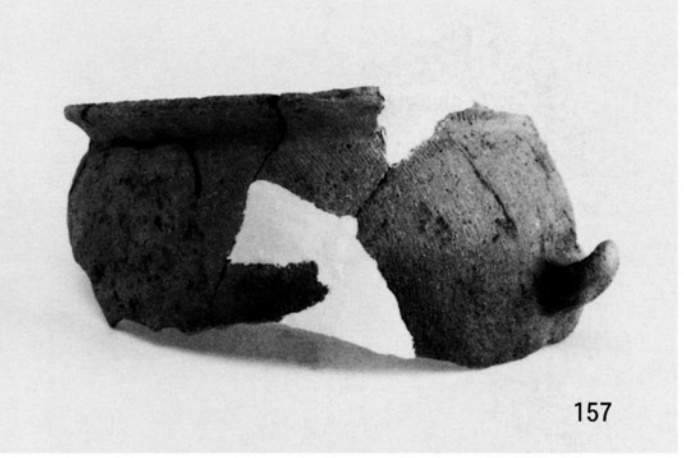

114


140

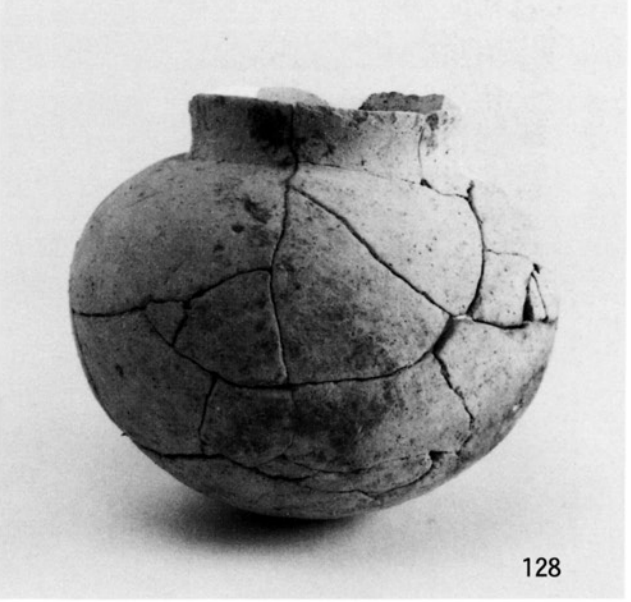

104

76

90


157

102

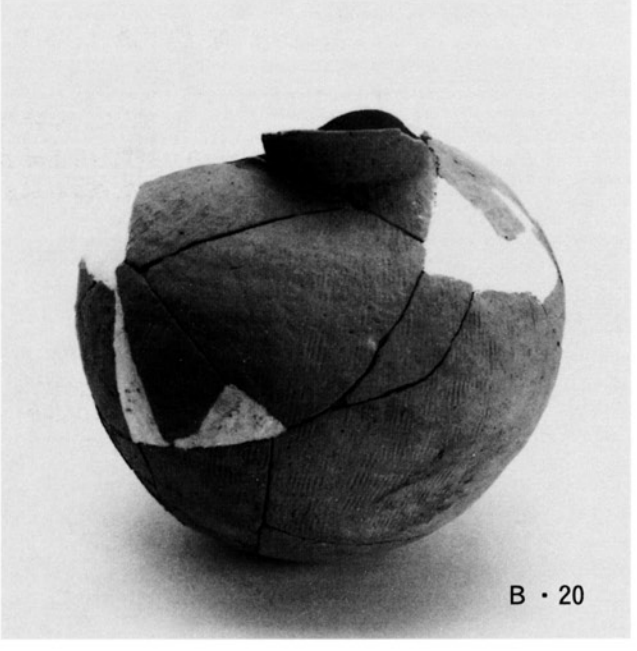

128

出土遺物２

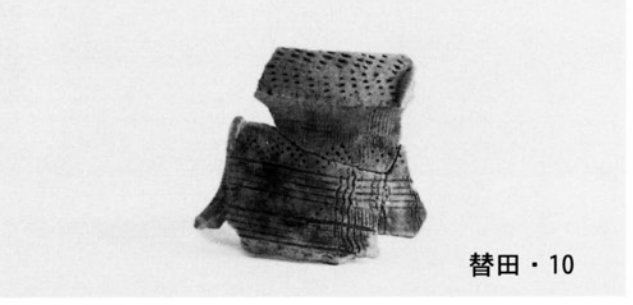
図版9　神戸遺跡（A・B地区）・替田遺跡（第3次）

129

130


B・20

替田・11


替田・10

替田・12

替田・14

出土遺物3

報告書抄録

ふりがな	かんべいせき（だい２じ）・かえだいせき（だい３じ）はっくつちょうさほうこく
書名	神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告
副書名	～三重県津市南河路所在～
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２２３
編著者名	柴山　圭子・河北　秀実・筒井　英俊
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　0596(52)1732
発行年月日	2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査面積 m²	調査期間	調査原因
かんべいせき 神戸遺跡	つしみなみこうじ 津市南河路	24201	598	34° 42′ 56″	136° 29′ 04″	上層 1,700 下層　400	19990510 ～ 20000117	平成11年度県営ほ場整備事業（津中部地区）
かえだいせき 替田遺跡	つしみなみこうじ 津市南河路	24201	759	34° 43′ 08″	136° 28′ 38″	80		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神戸遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代	土坑・溝 掘立柱建物	台付甕・須恵器杯など 土師器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・黒色土器 など	
替田遺跡	集落跡	弥生時代	溝・土坑	弥生土器・木製品	

平成13(2001)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告223

神戸遺跡・替田遺跡発掘調査報告（第２次）（第３次）

～ 三 重 県 津 市 南 河 路 所 在 ～

２００１年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲第一プリント社